福島県文化財調査報告書第489集

阿賀川改修（長井地区）遺跡発掘調査報告３

小田高原遺跡（３次調査）

２０１３年

福島県教育委員会
財団法人 福島県文化振興財団
国土交通省北陸地方整備局

阿賀川改修（長井地区）遺跡発掘調査報告３

小田高原（おだこはら）遺跡（３次調査）

序　　文

文化財は，それぞれの地域の歴史に根ざした文化遺産であり，我が国の歴史や文化を正しく理解するために必要不可欠なものです。

そのため，当時の姿がよく理解できるように，可能な限りそのままの形で文化財を保存し，後世に伝えていく努力が現代に生きる私たちに求められています。

さて，国土交通省が実施する「阿賀川下流狭窄部改修事業（長井地区）」は，阿賀川下流部のうち長井地区にある狭窄部の河道を掘削して川幅を広げる事業です。この事業が完成すると，洪水の流下を阻害する部分がなくなるため，出水による冠水被害などの災害を防ぐことができるようになります。

福島県教育委員会では，この計画地区内にある周知の埋蔵文化財包蔵地，いわゆる遺跡を含めた文化財を保存するため，関係機関と協議を重ねてきましたが，現状で保存が困難なものについては，詳細な記録を残すために発掘調査を実施することになりました。

本報告書は，平成24年度に発掘調査を実施した喜多方市所在の小田高原遺跡の３次調査の成果をまとめたものです。

小田高原遺跡の３次調査では，ロクロで土器を作った工房として使われた竪穴住居跡や土器を焼いたと思われる土坑など，会津地方で活発化した土器生産を示す貴重な成果を得ることができました。

今後，この報告書が，県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに，地域の歴史を解明するための基礎資料として，さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に，発掘調査の実施に当たり，御協力いただいた喜多方市教育委員会，国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所，財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

平成25年12月

福島県教育委員会
教育長　杉　昭　重

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興財団では，福島県教育委員会からの委託により，県内の大規模な開発に先立ち，開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。

本報告書は，阿賀川下流狭窄部改修事業（長井地区）の実施に伴い，平成24年度に発掘調査を行った喜多方市慶徳町山科地区に所在する小田高原遺跡の調査成果をまとめたものです。

小田高原遺跡の発掘調査は，平成22年度から平成24年度の３次にわたって行われました。最終年度となった今回の３次調査では，河川敷に作られた平安時代の竪穴住居跡から，ロクロ施設の痕跡が確認されたとともに，この近くから土器を焼いたと考えられる焼成坑も確認されました。これらのことから，竪穴住居跡は住居でありますが，土器作りの工房と推測できます。この工房ではロクロで土器を作り，屋外の焼成坑で焼いて製品に仕上げたと考えられます。

会津地方では，平安時代に入ると土器生産が活発化しますが，小田高原遺跡及び周辺部でも呼応するように土器作りが盛んになったことが確認されました。

今後，この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として，広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに，この調査に御協力いただきました喜多方市並びに地域住民の皆様に，深く感謝申し上げますとともに，当財団の事業の推進につきまして，今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成25年12月

財団法人　福島県文化振興財団
理事長　　遠　藤　俊　博

緒　　言

1　本書は，平成24年度に実施した阿賀川下流狭窄部改修事業（長井地区）に関連する遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書は，福島県喜多方市慶徳町山科字西新田・古屋敷に所在する小田高原遺跡（３次調査）の成果を収録した。

3　本発掘調査事業は，福島県教育委員会が国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所の委託を受けて実施し，調査・報告にかかる費用は国土交通省が負担した。

4　福島県教育委員会では，発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団（現，財団法人福島県文化振興財団）に委託して実施した。

5　財団法人福島県文化振興財団では，遺跡調査部の以下の職員を配置して調査にあたった。
　専門文化財主査　　香川　愼一　　文化財主査　　廣川　紀子

6　本書の執筆・編集は担当職員が行い，文末に文責を示した。

7　自然科学分析は次の機関に依頼し，その報告を付章に掲載した。
　放射性炭素年代測定　　株式会社　加速器分析研究所

8　本書に使用した地図は，国土交通省国土地理院発行の５万分の１地形図「喜多方」の該当範囲を複製したものである。

9　本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

10　発掘調査および報告書作成にあたり，次の諸機関から御協力・御助言をいただいた。
　喜多方市　　喜多方市教育委員会　　（敬称略・順不同）

用　　例

1　本書における地形図・遺構図の用例は，以下のとおりである。

⑴　方位・座標　　図中の方位は座標北を示す。表示のないものは本書の天を北とした。座標軸には国土座標Ⅸ系に基づく座標値を記した。

⑵　毛　　羽　　遺構内の傾斜部は「　卌　」，相対的に緩傾斜の部分には「　𝍏　」，後世の撹乱および削平部には「　𝍐　」を用いた。

⑶　網　　点　　図中の網点は以下を示す。これら以外を示す場合は同挿図中に凡例を示した。

焼土面　　強い焼土面　　炭化物

⑷　土　　層　　遺跡内堆積土層は，大文字Ｌにローマ数字，遺構内堆積土層と小文字ℓに算用数字を付して表記した。土色およびその記号は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄1967）に基づく。

⑸　標　　高　　水準点を基にした，海抜高度を示す。

⑹　縮　　尺　　各挿図中にスケール・縮小率を示した。

2　本書における遺物図の用例は，以下のとおりである。

⑴　土器断面　　土師器は断面白抜きで示し，須恵器は断面を黒く塗りつぶした。粘土紐の積み上げ痕は一点鎖線で示した。

⑵　網　　点　　図中の網点は以下を示す。これら以外は同挿図中に凡例を示した。

内面黒色処理　　炭化物

⑶　一点鎖線　　須恵器杯に示した一点鎖線は，重焼きによる変色の境界を表す。

⑷　遺物番号　　挿図ごとの通し番号とした。括弧内には出土位置・層位を示した。

⑸　計測値　　遺物の計測値は，図中に示した。（　）は推定値，［　］は残存値である。

⑹　縮　　尺　　各挿図中にスケール・縮小率を示した。

3　本書および調査・整理の上で使用した略号は以下のとおりである。

喜多方市…ＫＴ　　小田高原遺跡（３次調査）…ＯＤＫ３　　竪穴住居跡…ＳＩ
須恵器窯跡…ＳＲ　　溝　　跡…ＳＤ　　土　　坑…ＳＫ　　焼土遺構…ＳＧ
土器埋設遺構…ＳＭ　その他（竪穴・畝状遺構，石集中地点，性格不明遺構）…ＳＸ
小　　穴…Ｐ　　グリッド…Ｇ

4　参考・引用文献は執筆者の敬称を略し，本文末にまとめて収めた。

目　　次

序　章

第１節　事業の概要……1

第２節　調査に至る経緯……1

第３節　遺跡周辺の環境……3

地理的環境（３）　歴史的環境（５）

第１章　調査の概要

第１節　遺跡の位置と地形……9

第２節　調 査 経 過 ……9

第３節　調 査 方 法 ……11

第２章　調 査 成 果

第１節　遺構・遺物の分布……17

第２節　基 本 土 層……19

第３節　竪穴住居跡……23

17号住居跡(23)

第４節　土　　坑 ……31

48号土　坑(31)　49号土　坑(32)　50号土　坑(32)　51号土　坑(33)
52号土　坑(34)　53号土　坑(35)　54号土　坑(35)　55号土　坑(36)
56号土　坑(36)　57号土　坑(37)　58号土　坑(37)　59号土　坑(37)
60号土　坑(40)　61号土　坑(40)

第５節　焼 土 遺 構……45

８号焼土遺構(45)　９号焼土遺構(45)　10号焼土遺構(45)　11号焼土遺構(46)
12号焼土遺構(47)　13号焼土遺構(47)

第６節　特 殊 遺 構……47

４号特殊遺構(新)(47)　４号特殊遺構(旧)(50)

第７節　遺構外出土遺物……52

土　師　器(52)　須　恵　器(53)

第３章　総　　括

第1節　遺物について……57

第2節　遺構について……60

付　章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定……63

挿図目次

序　章

図１　阿賀川狭窄部改修事業位置図……１
図２　遺跡周辺の地形分類……４
図３　小田高原遺跡と周辺の遺跡……６

第１章　調査の概要

図４　調査範囲と工事計画……10
図５　遺構配置図……15

第２章　調 査 成 果

図６　Ⅱ区遺構配置図……18
図７　基本土層（１）……20
図８　基本土層（２）……21
図９　基本土層（３）……22
図10　17号住居跡（１）……24
図11　17号住居跡（２）……26
図12　17号住居跡出土遺物（１）……28
図13　17号住居跡出土遺物（２）……29
図14　17号住居跡出土遺物（３）……30
図15　48～52号土坑……38
図16　53～58号土坑……39
図17　59・60号土坑……40
図18　61号土坑……41
図19　土坑出土遺物（１）……42
図20　土坑出土遺物（２）……43
図21　土坑出土遺物（３）……44
図22　８～13号焼土遺構……46
図23　11号焼土遺構出土遺物……47
図24　４号特殊遺構（新）……48
図25　４号特殊遺構（新）出土遺物……49
図26　４号特殊遺構（旧）〔１〕……50
図27　４号特殊遺構（旧）〔２〕……51
図28　遺構外出土遺物（１）……54
図29　遺構外出土遺物（２）……55
図30　遺構外出土遺物（３）……56

第３章　総　　括

図31　平安時代出土土器群……58
図32　２・17号住居跡カマド……61

付　章　自然科学分析

図33　暦年較正年代グラフ（１）……67
図34　暦年較正年代グラフ（２）……68

表　目　次

序　章

表１　周辺の遺跡一覧……７

第１章　調査の概要

表２　竪穴住居跡一覧……12
表３　須恵器窯跡一覧……13
表４　溝跡一覧……13
表５　土坑一覧（１）……13
表６　土坑一覧（２）……14
表７　焼土遺構一覧……14
表８　その他の遺構一覧……14

付　章

表９　放射性炭素年代測定結果……66
表10　暦年較正年代（１）……66
表11　暦年較正年代（２）……67

写真図版目次

１　調査区全景（西から）……71
２　調査区全景（北から）……71
３　基本土層Ｂ（北西から）……72
４　基本土層Ｆ（北西から）……72
５　基本土層Ｅ（北から）……72
６　基本土層Ｃ（西から）……73
７　基本土層Ｄ（南から）……73
８　17号住居跡（北から）……74
９　17号住居跡細部……74
10　17号住居跡カマド（北から）……75
11　17号住居跡カマド細部……75
12　48～55号土坑……76
13　56～61号土坑……77
14　８～13号焼土遺構……78
15　４号特殊遺構－新（北西から）……79
16　４号特殊遺構細部……79
17　17号住居跡出土遺物（１）……80
18　17号住居跡出土遺物（２）……81
19　17号住居跡出土遺物（３）……81
20　遺構出土遺物（１）……82
21　遺構出土遺物（２）・遺構外出土遺物（１）……83
22　遺構外出土遺物（２）……84
23　遺構外出土遺物（３）……84

序　　章

第1節　事業の概要

会津盆地のほぼ中央を貫流してきた阿賀川は，喜多方市南西部の慶徳町付近で盆地を抜け，越後山脈東縁の山間部に入る。山間部での阿賀川は河道が狭窄し，また大きく蛇行している。この地形的特徴が相まって洪水時の円滑な流れを妨げる要因となり，阿賀川は古くから度々氾濫を繰り返してきた。古記録(『会津旧事雑考』等)によれば，「会津慶長地震」(1611)の土砂崩れで慶徳町山崎地区の河道が堰き止められ，出現した「山崎新湖」によって多くの集落が水没したとされる。

大正10年～昭和13年，狭窄部蛇行区間「泡の巻・土塀・袋原」の河道改修工事が行われ，屈曲箇所をつなぐ３本の捷水路が開削された。河道改修工事は一時中断されたが，昭和57年の台風18号による水害が契機となり，昭和58年から阿賀川下流狭窄部改修事業として再開された。改修区域は「泡の巻・津尻・長井」の３地区であるが，平成10年度に泡の巻地区，平成20年度に津尻地区の工事が完了しており，現在，長井地区の改修事業が進行中である。

第2節　調査に至る経緯

平成19年11月，喜多方市教育委員会は，国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所から阿賀川下流狭窄部改修事業(長井地区)に係る埋蔵文化財所在の照会を受けた。工事予定地が周知の小田高原遺跡と隣接していたことなどから，喜多方市教育委員会は，福島県教育委員会とも協議の上，

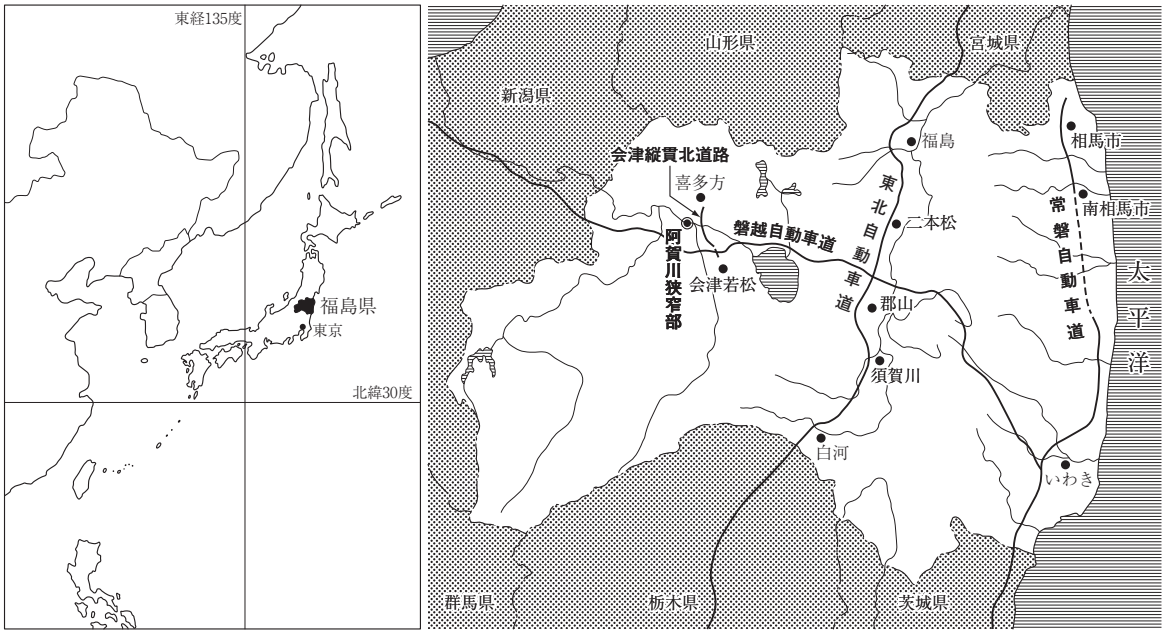


図１　阿賀川狭窄部改修事業位置図

同工事予定地全域(25,350㎡)を対象とする試掘調査を平成21年６～８月に実施した。その結果，試掘調査区のほぼ全域から縄文時代，古墳時代，奈良・平安時代の遺構・遺物が確認され，大規模な複合遺跡であることが判明した。小田高原遺跡の範囲は大幅に増補され，旧遺跡の西側に広がる河道部が新たに加えられた(『喜多方市文化財調査報告書第８集』)。

福島県教育委員会・喜多方市教育委員会は，国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所と小田高原遺跡の保護を目的とする協議を重ねた。しかし，工事計画上，同遺跡の現状保存は困難であるとの判断から，記録保存のための発掘調査が実施されることになった。調査対象面積は，18,000㎡の範囲及び同北西部(調査Ⅱ区)に重層する文化面6,000㎡を加えた計24,000㎡相当が予定された。小田高原遺跡の発掘調査は，福島県教育委員会が財団法人福島県文化振興事業団(現財団法人福島県文化振興財団)に委託して実施することになった。

１次調査

１次調査は，調査員を６名配し，平成22年５月13日～12月17日の期間で実施した。調査日数は，作業ができなかった雨天日を除く延べ107日である。１次調査の主体は平安時代の遺構・遺物で，同時代の竪穴住居跡・土器生産関連遺構を確認している。

調査対象区を便宜上，調査Ⅰ～Ⅲ区に地区割りし，工程上，最優先箇所とされた調査Ⅰ区については１次調査ですべての引き渡しを完了している。１次調査によって新たに調査を必要とする箇所が確認され，調査対象面積の合計が当初の24,000㎡から25,300㎡相当に増加した。25,300㎡の内訳は，調査Ⅰ区4,900㎡，Ⅱ区11,900㎡・Ⅲ区8,500㎡である。１次調査では調査Ⅰ区4,900㎡・Ⅱ区7,900㎡・Ⅲ区3,000㎡の計15,800㎡相当について発掘調査が終了し，残る調査Ⅱ・Ⅲ区の未了部については平成23・24年度の２・３次調査で完了させることになった。

なお，２次調査の早期着手のため，平成23年３月７日に調査員２名が現地入りし，約３週間の計画で重機等による作業用道路の整備・安全対策などの事前準備を行っていた。しかし，３月11日に発生した東日本大震災によってすべての作業が中止となった。

２次調査

２次調査は，調査員を２名配し，平成23年５月23日～11月18日の期間で実施した。調査日数は，作業ができなかった雨天日を除く延べ93日である。２次調査は調査Ⅲ区の未了部5,500㎡を対象に実施し，平安時代の竪穴住居跡のほか，縄文時代の遺構・遺物も確認した。

２次調査では，東日本大震災の影響もあって重機類の確保が容易でなく，表土除去作業等に遅れが生じた。また，７月末，新潟県･会津地方に大きな被害をもたらした集中豪雨の影響も受けたが，作業員の増員等によって進捗が回復し，11月16日に調査Ⅲ区の引き渡しが完了した。引き渡し後，撤収作業等を行い，11月18日に２次調査のすべての工程が終了した。

なお，調査Ⅱ区の南東側で平安時代の遺構・遺物が発見され，新たに発掘調査を必要とする200㎡の範囲が調査Ⅱ区(計12,100㎡)に加えられた。最終的な調査対象面積の合計は，25,500㎡相当である。また，調査Ⅱ区の未了面積も4,200㎡となり，平成24年度に３次調査を実施した。

第３節　遺跡周辺の環境

地理的環境

福島県は，東北地方の最南部に位置する。福島県の面積は13,782㎢で，北海道・岩手県に次ぐ３番目の広さである。県土の８割は山地で占められ，南北に縦走する越後山脈・奥羽山脈・阿武隈高地の各山稜によって，西から「会津」・「中通り」・「浜通り」の３地方に区画されている。

小田高原遺跡が所在する喜多方市は，福島県北西部の会津地方北部に位置付けられる。会津の語意は，『古事記』によれば北陸道・東海道へそれぞれ遠征した将軍が出会った所とされ，古来より会津地方が両地域の文化融合地点として認識されていたことを推測させる。喜多方市の南部を流れる阿賀川は，新潟県に通じている。また，会津地方の気候は日本海岸型気候に属しており，風土の点において北陸地方との関連が窺われる。

現在の喜多方市は，会津盆地の北部を占める旧喜多方市と，旧市を取り巻く塩川町・山都町・熱塩加納村・高郷村の１市２町２村が平成18年１月に合併して成立した。喜多方市の北部は，飯豊連峰を境界に山形県と接している。喜多方市の西部は西会津町，南部は阿賀川・日橋川を境界に会津坂下町・湯川村・会津若松市と接している。

喜多方市の市名は会津盆地の北方「きたかた」に由来するといわれ，その地形は盆地部と周縁の山間部に代表される。盆地部の地形分類は，濁川・田付川・日橋川など周囲の山間部から流入する阿賀川支川によって形成された扇状地が大半である。各支川は，喜多方市の南西部で阿賀川に合流する。盆地部の標高は喜多方市街地付近で210ｍ前後，阿賀川合流付近で180ｍ前後である。盆地部の周囲は，東は標高1,404ｍの猫魔ヶ岳を主峰とする磐梯高原に，西は越後山脈から派生する標高1,000ｍ前後の山地に，北は飯豊連峰によってそれぞれ遮られている。

小田高原遺跡が所在する慶徳町は，喜多方市の南西部に位置する。会津盆地を概ね北流してきた阿賀川は，喜多方市南端で流れを北西方向に転じ，慶徳町山科地区から盆地を抜けて越後山脈東縁の山間部に入る。山間部での阿賀川は，左右に大きく蛇行を繰り返しながら山地を切り開いており，小田高原地区及び周域の袋原・長井地区では河岸段丘地形が発達している。

喜多方市の地質を見ると，盆地部の表層は主に礫・砂・泥層からなる。喜多方市街地は扇状地の末端部に位置付けられ，砂礫層に含まれていた良好な地下水の湧水域としても知られる。喜多方市西方の山地･丘陵地の基盤は，新第三期中新世に属するものとされる。慶徳町の阿賀川右岸は礫岩･砂岩・泥岩，左岸部の高郷地域が緑色凝灰岩や砂岩・泥岩などからなっている。阿賀川・只見川流域に発達する中位段丘面は，「会津シラス」とも呼ばれる沼沢火山起因の堆積物で覆われている。

喜多方市域の気候は，年較差・日較差が比較的著しい内陸性気候である。さらに日本海岸型気候にも属し，夏はフェーン現象，冬は日本海側からの季節風に伴う豪雪の影響を受ける。しかし，この気候的特徴が稲作には適しているため，喜多方市は米どころとしても有名である。

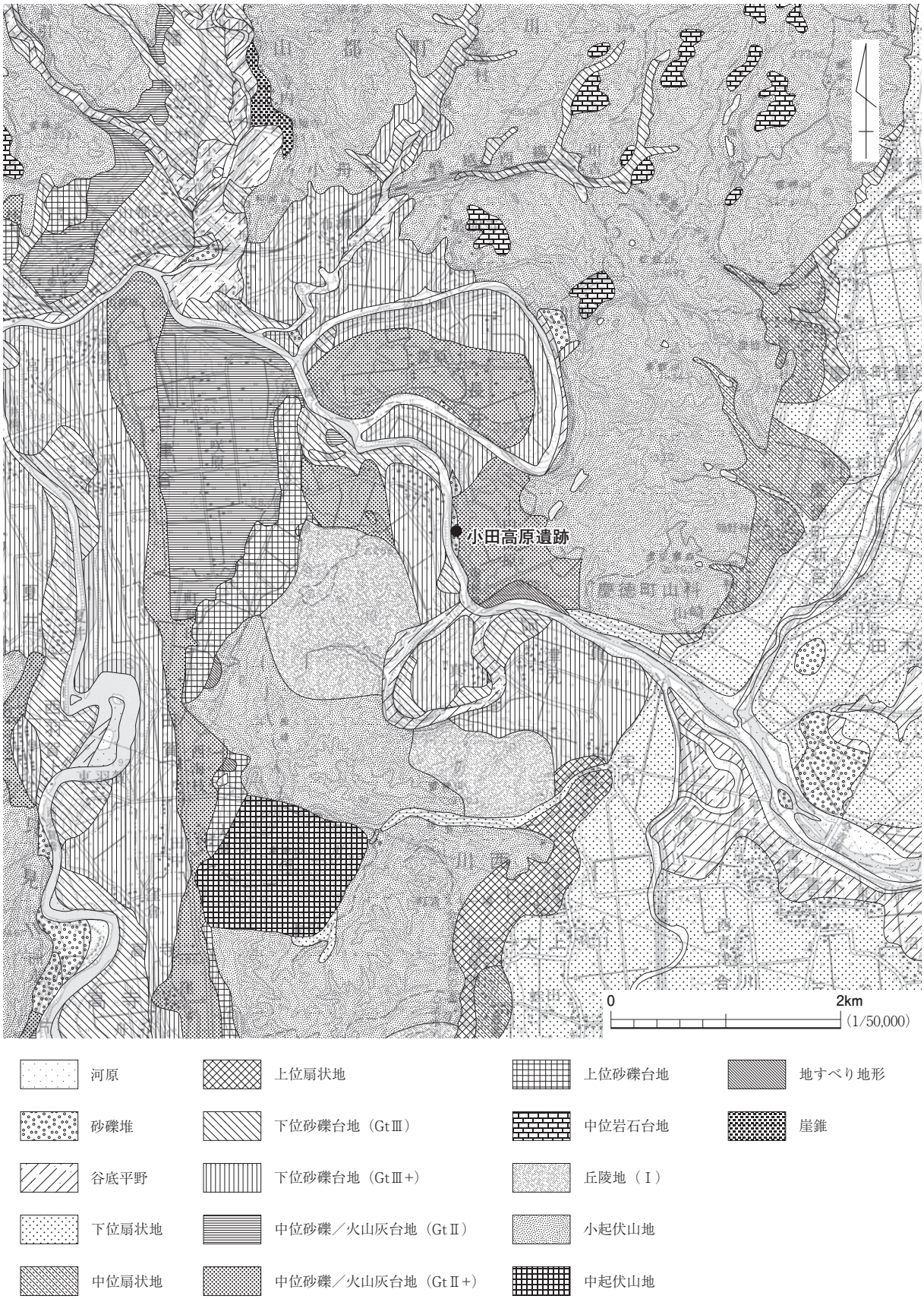


図２　遺跡周辺の地形分類（中村ほか1976を基に作成）

歴史的環境

喜多方市で確認された旧石器時代の遺跡は，市南西部の高郷町塩坪遺跡が知られる。阿賀川左岸の塩坪第１段丘面に立地し，遺跡は２ｍ以上の沼沢パミス層で被覆されている。1982年に福島県立博物館によって学術調査が行われており，福島県を代表する後期旧石器時代の遺跡である。

会津盆地域の縄文遺跡は，盆地内部よりも周縁部に立地するという分布傾向がすでに指摘されている。会津盆地北西域では，山間部に入った阿賀川・只見川流域に縄文遺跡が集中している。小田高原遺跡の北西約4.2㎞に所在する山都町の上林遺跡は，江戸時代の記録にも記されており，複式炉を持つ大木９・10式期の竪穴住居跡や，縄文時代晩期～弥生時代の遺構･遺物が確認されている。小田高原遺跡の北西２㎞に所在する会津坂下町の竈原遺跡は，戦前に行われた阿賀川蛇行部の捷水工事中に発見された遺跡で，縄文時代後期中葉に位置付けられる片口濾過型土器などの小型土器が多数出土している。竈原遺跡は不時の発見であるが，会津坂下町の北川前遺跡では，津尻地区河川改修工事関連の発掘調査が平成20年に行われ，中位河岸段丘面の突端部で複式炉を持つ大木９式期の竪穴住居跡が検出されている。また，小田高原遺跡対岸の花畑遺跡でも複式炉が多数確認されている。小田高原遺跡の北側にある袋原遺跡は縄文時代晩期の遺跡であり，土偶・石刀・独鈷石など出土遺物の多彩さで知られる。小田高原遺跡の周辺では，比較的古くから知られた縄文時代中期後葉～晩期の遺跡が目立つ。

喜多方市周辺では，弥生時代の遺跡数は比較的少ない。現在，JR 喜多方駅となっている長内遺跡では，駅工事の際に弥生時代中期の土器・石包丁が出土したとされる。この遺物も不時の発見であり，長内遺跡の詳細については不明である。

しかし，古墳時代に入ると喜多方市の遺跡数は増加する。古墳時代の前夜～黎明期に位置付けられる遺跡としては，阿賀川・日橋川の合流部付近に立地する塩川町の舘ノ内遺跡・内屋敷遺跡が上げられる。舘ノ内遺跡では，四隅突出墓の影響を受けたと考えられる周溝墓が確認されている。周溝内から出土した土器には北陸・北関東地方の影響と推測されるものも含まれており，他地域からもたらされた墓制の受容は前期古墳築造へと継承されていくようである。内屋敷遺跡では周溝内から赤彩の壺・器台などが出土したほか，周溝墓とほぼ同時期の竪穴住居跡も確認されている。慶徳町木曽原遺跡では，３～４世紀代と考えられる土器や，管玉の未成品が出土している。

会津盆地の西部は，会津坂下町の男壇・宮東遺跡など初現期古墳が集中している地域である。古墳時代前期前葉以降，会津盆地の約３ヵ所で比較的大型の古墳が築造されるが，その一つが喜多方市慶徳町～会津坂下町の一帯である。同集中域の中で最も有名な古墳が会津坂下町青津地区の亀ヶ森・鎮守森古墳である。亀ヶ森古墳は４世紀前半頃の築造と推測される前方後円墳であり，東北地方で２番目の規模を持つ。鎮守森古墳は，亀ヶ森古墳の南西約100ｍの地点にある前方後方墳である。小田高原遺跡に比較的近い会津坂下町の津尻地区では，阿賀川旧河道に面した段丘面の突端部で５世紀末葉～６世紀初頭期の古墳時代集落跡が発見されている。同集落跡は厚い洪水砂によってパックされ，周堤・土屋根の竪穴住居跡のほか，平地建物跡が確認された貴重な遺跡である。

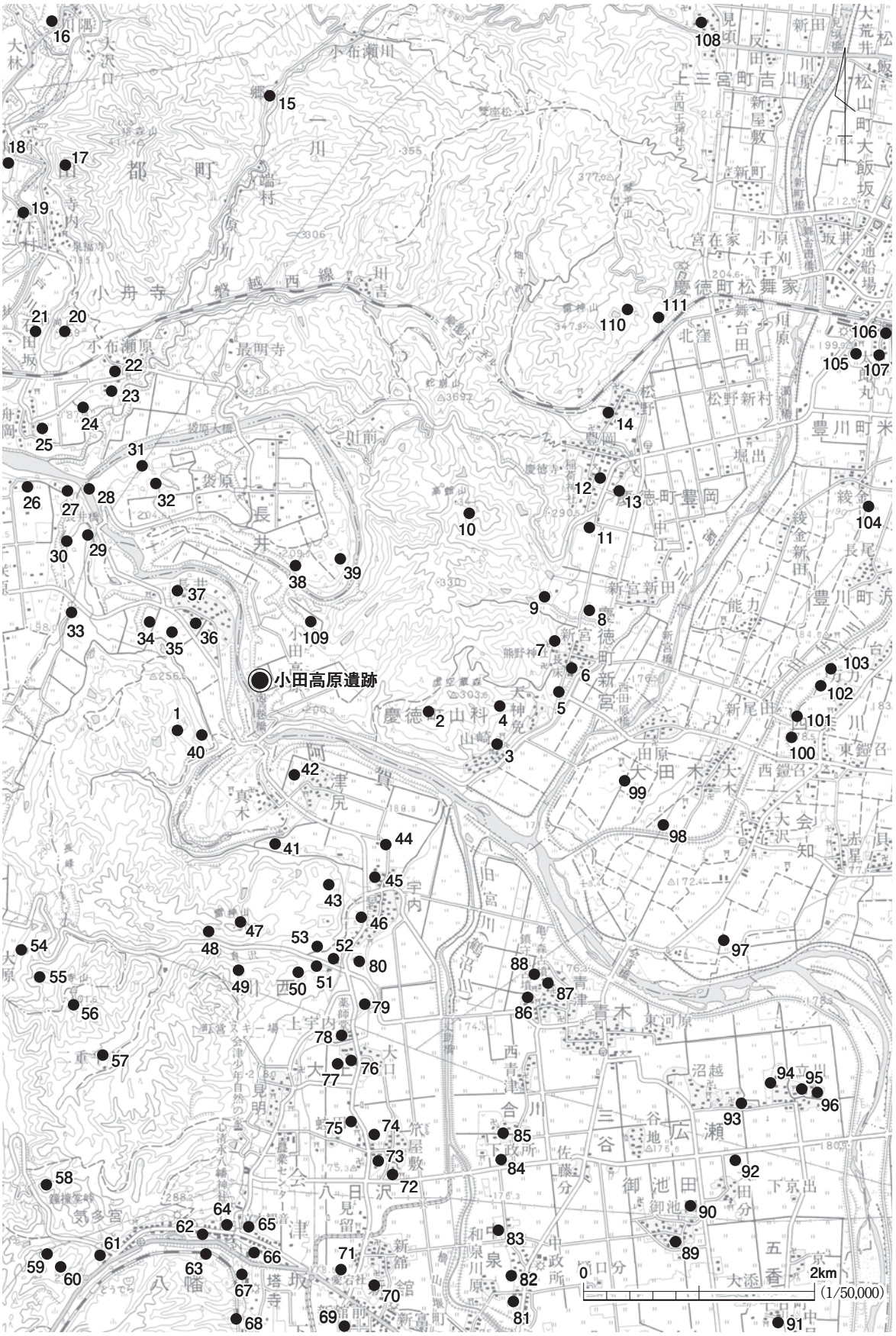


図３　小田高原遺跡と周辺の遺跡

表１　周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	種別	時期
1	萩ノ窪窯跡	(会)長井字松曽根国有林	窯跡	平安
2	虚空蔵森古墳群	(慶)新宮字虚空蔵森	古墳	古墳
3	山崎横穴古墳群	(慶)山科字墓東	古墳	古墳
4	天神免古墳群	(慶)新宮字虚空蔵森	古墳	古墳
5	招木遺跡	(慶)新宮字招木	散布地	平安
6	新宮中世墓地	(慶)新宮字畑中	墳墓	中世
7	駿河館跡	(慶)新宮字熊野	城館跡	中世
8	新宮城跡	(慶)新宮字館内	城館跡	中世
9	灰塚山古墳	(慶)新宮字小山腰	古墳	古墳・中世
10	高館山城跡	(慶)豊岡字館石	城館跡	中世
11	八幡館跡	(慶)豊岡字不動前	城館跡	中世
12	慶徳城跡	(慶)豊岡字今町	城館跡	中世
13	新館跡	(慶)新宮字館内	城館跡	中世
14	松野館跡	(慶)松舞家字稲荷前	城館跡	中世
15	一郷遺跡	(山)一川字一郷	散布地	平安
16	川隅塚	(山)木幡	塚	中世
17	高館館跡	(山)小舟寺字高館	城館跡	中世
18	日照田遺跡	(山)木幡字日照田	散布地	縄文
19	下村壇ノ越経塚	(山)木幡字壇ノ越	塚	近世
20	和尚山塚	(山)小舟寺字和尚山	塚	中世・近世
21	上ノ原平遺跡	(山)小舟寺字上ノ原平	散布地	平安
22	中条遺跡	(山)小舟寺字中条	城館跡	中世
23	小布瀬館跡	(山)小舟寺字舘ノ内	城館跡	中世
24	船岡道遺跡	(山)小舟寺字船岡道	散布地	縄文
25	舟岡遺跡	(山)小舟寺字松岡道南	散布地	縄文
26	古屋敷Ｂ遺跡	(山)三津合字瀬下	散布地	縄文
27	古屋敷Ａ遺跡	(山)三津合字古屋敷	散布地	縄文
28	竈原遺跡	(会)長井字竈原	散布地	縄文
29	板沢古墳	(会)長井字板沢	古墳	古墳
30	板沢遺跡	(会)長井字板沢	散布地	古墳・平安
31	竈館跡	(会)長井字竈	城館跡	平安
32	竈塚	(会)長井字竈	塚	平安
33	立子沼道下遺跡	(会)長井字立子沼道下	散布地	平安
34	山田遺跡	(会)長井字山田	散布地	縄文・平安
35	宮田遺跡	(会)長井字宮田	散布地	平安
36	極楽寺跡	(会)長井字宮田	社寺跡	中世
37	花畑遺跡	(会)長井字花畑	散布地	縄文
38	袋原窯跡	(会)長井字袋上	窯跡	平安
39	袋原遺跡	(会)長井字袋原	散布地	縄文
40	長井前ノ山古墳	(会)長井字七曲	古墳・塚	古墳・平安
41	山子遺跡	(会)宇内字山子乙	散布地	縄文・平安
42	中平遺跡	(会)津尻字鍛冶山	集落跡	古墳・平安
43	鍛冶山古墳群	(会)宇内字鍛冶山	古墳	古墳
44	北川前遺跡	(会)宇内字北川前	散布地	縄・古・平
45	宇内古屋敷遺跡	(会)大上字古屋敷他	散布地	縄文
46	五目遺跡	(会)宇内字五目	散布地	縄文
47	雷神山古墳群	(会)大上字次郎坂	古墳	古墳
48	勝負沢横穴群	(会)宇内字次郎坂	その他	中世
49	森北古墳群	(会)大上字森北	古墳	古墳
50	出埼山遺跡	(会)大上字森北	散布地	旧・縄・平
51	出埼山古墳群	(会)大上字森北	古墳	古墳
52	勝負沢遺跡	(会)宇内字勝負沢甲	散布地	縄文
53	次郎坂遺跡	(会)大上字次郎坂	散布地	縄
54	福富館跡	(高)大田賀字大原	城館跡	平安
55	二ノ平館跡	(高)大田賀字櫛ヶ峯	城館跡	中世
56	高寺山古墳	(会)高寺字高寺	古墳	古墳
57	高寺遺跡	(会)高寺字二重平	散布地	縄文・平安
58	鐘突堂館跡	(会)高寺字鐘突堂	城館跡	中世
59	堂平Ａ遺跡	(会)気多宮字堂平	散布地	縄文・平安
60	堂平Ｂ遺跡	(会)気多宮字堂平	散布地	平安
61	堂平Ｃ遺跡	(会)気多宮字堂平	散布地	平安
62	松原遺跡	(会)塔寺字松原	散布地	縄・平・中
63	上の山遺跡	(会)塔寺字上の山	散布地	縄文～平安
64	茶碗塚地蔵経塚	(会)塔寺	塚	近世
65	大門遺跡	(会)塔寺字大門	散布地	縄文・弥生
66	経塚遺跡・古墳群	(会)塔寺字経塚	散布地	旧・縄・弥・古
67	観音森古墳	(会)塔寺字上ノ山	古墳	古墳
68	稲荷森古墳	(会)塔寺字上野	古墳	古墳
69	稲荷塚遺跡	(会)稲荷塚・上柳田他	散布地	縄文～平安
70	大道遺跡	(会)大道	散布地	平安
71	森前遺跡	(会)新舘字森前	散布地	縄～古・平
72	天王遺跡	(会)八日沢字天王	散布地	平安
73	飯沼Ａ遺跡	(会)八日沢字飯沼	散布地	平安
74	飯沼Ｂ遺跡	(会)八日沢字飯沼	散布地	古墳・平安
75	八日沢遺跡	(会)八日沢字館ノ内	散布地	平安
76	柳ノ下Ｂ遺跡	(会)大上字柳ノ下	散布地	平安
77	柳ノ下Ａ遺跡	(会)大上字柳ノ下	散布地	平安
78	村北遺跡	(会)五ノ併字村北	散布地	弥生・平安
79	惣座原遺跡	(会)大上字惣座原	散布地	平安
80	陣ヶ峯城跡	(会)宇内字五目	城館跡	平安
81	中屋敷Ａ遺跡	(会)中泉字中屋敷	散布地	平安
82	中屋敷Ｂ遺跡	(会)中泉字中屋敷	散布地	平安
83	三本木遺跡	(会)合川字三本木	散布地	平安・中世
84	宮ノ北遺跡	(会)合川字宮ノ北・村前	散布地	弥生～平安
85	政所館跡	(会)合川字政所	城館跡	平安・中世
86	鎮守森古墳	(会)青津字館ノ越・中西	古墳	古墳
87	亀ヶ森古墳	(会)青津字館ノ越	古墳	古墳
88	男壇遺跡・石塔群	(会)青津字男壇	古墳・石造物	古墳・中世
89	旭田館跡	(会)御池田字旭田	城館跡	中世
90	御池田山ノ神遺跡	(会)御池田字山ノ神他	散布地	平安・中世
91	中目経塚	(会)五番字家ノ西	塚	中世
92	稲荷北遺跡	(会)沼越字稲荷北	散布地	平安・中世
93	辻田遺跡	(会)沼越字辻田	散布地	平安
94	高畑遺跡	(会)沼越字高畑	散布地	縄・弥・平・中
95	中立川遺跡	(会)立川字中立川	散布地	平安
96	東立川遺跡	(会)立川字東立川	散布地	平安
97	内屋敷遺跡	(塩)会知字内屋敷甲	散布地	奈良～平安
98	鶴塚遺跡	(塩)大田木字鶴塚・下屋敷	集落跡	縄文～平安
99	古屋敷遺跡	(塩)大田木字古屋敷	散布地	古墳
100	鏡ノ町遺跡Ｂ	(塩)四奈川字鏡ノ町	官衙関連	奈良～中世
101	鏡ノ町遺跡Ａ	(塩)四奈川字鏡ノ町	官衙関連	奈良～中世
102	牛塚	(塩)四奈川字墓ノ前	塚	近世？
103	墓ノ前遺跡	(塩)四奈川字墓ノ前	散布地	奈良・平安
104	塚田Ａ遺跡	(豊)沢部字塚田	散布地	奈良・平安
105	太郎丸西館跡	(豊)米室字館跡	城館跡	中世
106	長内遺跡	(豊)米室字長内	散布地	弥生～平安
107	太郎丸東館跡	(豊)米室字太郎丸	城館跡	中世
108	見頃館跡	(上)吉川字館中	城館跡	中世
109	西新田窯跡群	(慶)山科字西新田他	窯跡	奈良・平安
110	松野千光寺経塚跡	(慶)松舞家字金山	塚	平安・中世
111	松野千光寺跡	(慶)松舞家字大門	社寺跡	奈良

凡例　(慶)喜多方市慶徳町　(豊)喜多方市豊川町　(山)喜多方市山都町
(高)喜多方市高郷町　(塩)喜多方市塩川町
(上)喜多方市上三宮町　(会)河沼郡会津坂下町

慶徳町では，新宮・山科地区の丘陵上に築造された灰塚山古墳，虚空蔵森・天神免古墳群がある。各古墳は，福島県立博物館等によって測量調査が実施されているが，築造年代などの実態は不明である。灰塚山古墳は前方後円墳，虚空蔵森古墳群は前方後円墳２基，天神免古墳群は前方後円墳１基・円墳２基が確認されている。また慶徳町では，時期がやや離れるが７世紀前葉頃の造営と推測される山崎横穴古墳群がある。同横穴墓群は，明治26年に子供が偶然発見し，勾玉を見た村人によって発掘されている。当時の横穴墓や遺物の様子は，『山崎神霊山真図』・写真に残されている。

古墳時代の集落遺跡としては，塩川町大田木地区に所在する古屋敷遺跡が知られる。同遺跡は５世紀後半の「豪族居館」として国史跡に指定され，コ状に配置された倉庫群や方形区画施設・祭祀跡などが発見されている。古屋敷遺跡の西方には新宮・山科地区に分布する先の古墳群があるが，いずれかの前方後円墳に居館の主が埋葬されている可能性も指摘されている。弥生時代末～古墳時代の遺跡分布状況から，喜多方市南西部は比較的古い段階に開けた要衝の地と推測される。

しかし，奈良時代では遺跡数が減少するようである。小田高原遺跡内の小田高原窯跡は，出土須恵器から８世紀中葉頃の操業と推測されており，杯・蓋などの遺物が採取されている。なお，同窯跡はその後の削平によって消滅した可能性がある。

平安時代に入ると，喜多方市南西部でも遺跡数が増加する傾向にある。724年以降，阿賀川・日橋川を境界として会津郡から耶麻郡が分置されたとされる。平安時代の喜多方市域は概ね耶麻郡に属し，慶徳町付近は耶麻郡の南限に位置付けられる。小田高原遺跡の周辺部では，西新田窯跡や対岸の萩ノ窪窯跡など概ね９世紀前半代の須恵器窯跡が点在する。しかし，９世紀中葉を境に小田高原遺跡周辺部の須恵器生産は衰退していくようである。

慶徳町付近の平安時代を代表する遺跡には，塩川町鏡ノ町遺跡Ａ・Ｂ，内屋敷遺跡がある。鏡ノ町遺跡Ａ・Ｂでは多数の掘立柱建物のほか，柵列・周溝状遺構などが検出されており，規模・内容の大きさから官衙関連の可能性も指摘されている。内屋敷遺跡では，猿投産施釉陶器・瓦塔などの出土資料がある。小田高原遺跡でも瓦塔片・獣脚片など仏教関連の遺物が出土している。

中世では，江戸時代に発見された慶徳町の松野千光寺経塚が知られ，会津藩の『家世実記』に記録が残っている。東北地方最古の経塚遺物とされ，経筒・独鈷杵・五鈷鈴や大治５年(1130)の銘をもつ石櫃が出土している。新宮中世墓地は大正３年に発見されたもので，「諸行無常」と刻まれた出土蔵骨器は現在，東京国立博物館で見ることができる。新宮城跡は，新宮氏の中世城館であったが，1420年，蘆名氏によって落城する。平成18年に実施された発掘調査では，地下木組遺構が発見され，また景徳鎮産と推測される象型の青白磁が出土している。

江戸時代，慶徳地区に関連する大事件として，慶長16年(1611)の９月27日に発生した所謂「会津慶長地震」がある。この大地震で生じた旧山崎村の山崩れによって阿賀川が堰き止められて冠水し，東西４～５㎞・南北２～４㎞に及ぶ山崎新湖が形成された。この湖によって23の集落が水没したとされ，山崎新湖が完全に消滅したのは震災後34年以上と伝えられている。また山崎新湖によって，会津坂下町が越後街道筋の宿駅に変更されている。（香　川）

第１章　調 査 の 概 要

第１節　遺跡の位置と地形

小田高原遺跡は，喜多方市慶徳町山科字古屋敷・西新田に所在する。JR 磐越西線喜多方駅を基点としてその南西約6.4㎞の地点に位置し，県道61号の「泡の巻橋」東端から北側へ入った水田地帯の一画に小田高原遺跡はある。遺跡の西辺を阿賀川が緩やかに北流しているが，かつての河道は大きくＳ字状に蛇行しており，三日月形に残る旧河道が対岸の河沼郡会津坂下町（長井地区）との市・町境界になっている。

小田高原遺跡の立地は阿賀川の下流域右岸で，その地形は通称「小田高原台地」と呼ばれる河岸段丘面と，段丘崖下の河道に大きく分けられる。調査対象域の地区分けでは，調査Ⅰ区が河岸段丘面，調査Ⅱ・Ⅲ区が河道に位置付けられる。小田高原台地は火山灰で被覆された中位砂礫台地で，標高200ｍ前後のなだらかな地形が広がり，１～３次調査の成果から古代集落の中心は同台地で展開していたものと推測される。しかし，小田高原台地は，圃場整備等による土地改変が大規模に行われたため，部分的に旧地形が消失している。

一方，西方の調査Ⅱ・Ⅲ区では，土器焼成など生産活動の痕跡を確認した。河道部では２段前後の小段丘状地形が流路に沿って点在し，狭長なテラス状の平坦面が所々認められる。同地形は背部丘陵の崩壊性堆積物によって埋没した河床が再度侵食されたもので，基盤侵食による一般的な段丘形成とは異なる。調査Ⅱ・Ⅲ区の対岸は屹立した段丘崖であり，河道狭窄部の形成が小田高原遺跡側の側方堆積によって生じている。小田高原遺跡周辺では，河道狭窄によって他所よりも川の流速が増す。低水路と接する最下段の平坦面は，河川敷として畑地・山林などに利用されていた。

なお，調査Ⅲ区では，地震等の影響と推測される円弧状の地すべり痕が観察された。慶長期の阿賀川堰き止めによる被害は古記録で知られるが，古墳時代後期の一集落が大規模な冠水によって埋没したことが，中平遺跡（会津坂下町津尻地区）の発掘調査で明らかになっている。

第２節　調 査 経 過

平成24年度の３次調査は，調査Ⅱ区の継続調査である。調査Ⅱ区の平面積は7,100㎡であるが，複数の文化面・遺物包含層が重層していることから実面積12,100㎡相当の発掘調査が計画された。平成22年度の１次調査では上位文化面7,900㎡相当の発掘調査を行い，９世紀末葉～10世紀前葉・平安時代末期頃の遺構・遺物を確認した。今回の３次調査ではⅡ区未了部の下位文化面4,200㎡を対象として発掘調査を行い，主に９世紀後半と推測される遺構・遺物を確認した。

４月16日，調査員２名が現地入りし，同日から作業員の雇用を開始する。調査区中央部は，１

図４　調査範囲と工事計画

次調査で３次調査面（ＬⅢＥ上面）までの掘り下げが終了しており，４月17日から同中央部の遺構検出作業に着手する。４月19日，グリッド杭の打設が終了。４月25日，Ｉ９グリッドでＳＫ48を検出したが，遺構検出面が３次調査対象面よりも上層であったことが判明し，Ｉ９グリッド付近の土層確認を行う。４月26日，Ｉ10グリッドのＬⅢＥ面でＳＧ08を検出する。

５月11日，ＳＫ49・50を検出する。ＳＫ49は焼土面上に土師器が散布しており，土器焼成坑の可能性が考えられた。５月15日からバックホー等の重機を導入し，調査区西部に厚く堆積する洪水砂層の除去を行う。５月25日，喜多方市教育委員会がＧ８グリッド付近に設定した４号トレンチ（以後，４Ｔ）の土層確認を再度行い，４Ｔ－８層をＬⅢＥ相当層に比定した。５月30日，４Ｔ－11層の確認作業を行い，同層の直上でロクロ土師器が少量出土する。

６月１日，調査区北西部のＧ７グリッドでＬⅢＥ相当層の調査を行うが，遺構・遺物は確認できず。６月４日，重機を調査区北西部に移動し，ＬⅢＥ相当層上に厚く堆積する洪水砂層の除去作業

を開始する。６月６日，Ｇ６グリッドでＳＫ51・52を検出する。６月９日，福島県が梅雨入りする。６月11日，調査区南東部のＪ14グリッドで土器焼成坑のＳＫ53を確認するが，同南東部は斜面崩壊土が厚く堆積していたため重機による除去作業を行う。６月11～15日，調査区北西部のＨ５～９グリッドの遺構・遺物確認作業を行う。６月26日，ＳＩ17を検出する。

７月２～６日，ＳＫ54～ＳＫ57検出。７月10日，ＳＫ58検出。７月18日，ＳＩ17の床面から口縁部を合わせた長胴甕や瓦状の遺物が出土。７月23日にＳＫ59，翌24日にＳＸ04を検出する。７月26日，ようやく福島県も梅雨が明ける。比較的降雨量の少ない梅雨であった。

８月から，検出遺構の精査と併せてＬⅢＦ・Ｆ′面での遺構検出作業にも着手する。しかし，連日の猛暑で遺構検出面が乾き，遺構確認が容易でなかった。８月８日，Ｉ９・10グリッドにトレンチを設定し，ＬⅢＧ以下の遺構確認作業を行う。８月13日～17日はお盆期間として調査を休止し，20日から調査を再開する。８月23日，ＬⅢＦ′面でＳＧ10・13を検出する。８月29日，中断していたＳＫ51の調査を再開する。同日，ＳＸ04(新)の調査が終了する。

９月も気温の高い日が続き，また秋雨の時期に入っても降雨量の少ない年であった。９月５日，ＳＫ61を検出する。９月13日，ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。撮影終了後，遺構の各種断割りやＬⅢＧ以下での遺構確認作業を行う。９月18日～20日に調査区南半部，９月25・26日に調査区北半部の地形測量を実施する。９月26日，ＳＫ61・ＳＸ04(旧)を完掘し，検出遺構の調査が全て終了した。９月28日，発掘器材等の撤収が終わり，小田高原遺跡の３次調査が終了した。

平成24年４月16日～９月28日の期間において，作業ができなかった雨天日等を除く発掘調査の日数は延べ77日である。３次調査区の引き渡しは平成24年10月17日に行われ，３ヵ年に渡る小田高原遺跡の発掘調査のすべての工程が終了した。

第３節　調 査 方 法

１～３次調査区は，公共座標Ⅸ系 X=179,800，Y=-3,000を基点とする10ｍ四方グリッドで網羅している。グリッドの区画は，基点から東方向へＡ・Ｂ・Ｃ…の大文字アルファベットを，南方向へ１・２・３…の算用数字を付け，その組み合わせによってＡ１・Ｂ１・Ｃ１…と呼称した。標高は，平成22年度に設定した３級基準点をもとにしている。

調査対象範囲が広域であることから，便宜上，調査Ⅰ～Ⅲ区に分け，河岸段丘面側の東部地区を調査Ⅰ区，河道側の西部地区を調査Ⅱ・Ⅲ区とした。調査Ⅱ・Ⅲ区の境界は，沢地形を基準におよそ公共座標 X=179.640を東西軸として南北に分けた。

基本土層は，１次調査における調査Ⅱ区の基本土層を継続して適用している。基本土層の表記は大文字Ｌとローマ数字Ⅰ・Ⅱ…を組み合わせた。ＬⅡ・Ⅲをさらに細分したが，調査Ⅱ区の土層は地点によって複雑に異なるため，小文字・大文字アルファベット，カタカナを付してＬⅡｃ・ⅢＥ，

ＬⅡカのように表記して区別した。調査Ⅱ区の南端部についてはⅢ区北部の基本土層を一部適用したが，ＬⅡ・Ⅲの性格は調査Ⅱ・Ⅲ区で必ずしも一致しない。遺構内堆積土や複雑に重層する沢堆積土については，小文字ℓと算用数字でℓ１・ℓ２…のように表した。

河道部に立地する調査Ⅱ区はシルト質層と洪水砂層が交互に堆積していたが，トレンチ調査によって遺構・遺物がないと判断した洪水砂層については，作業効率を図るために重機類を用いて除去した。また，調査Ⅱ区東部に厚く堆積していた段丘斜面の崩落土についても，同様に重機類で除去した。

遺構番号は１次調査から継続し，また調査Ⅰ～Ⅲ区をとおして付けた。なお，竪穴住居跡は17号住居跡（ＳＩ01～17）まで付したが，16号住居跡（ＳＩ16）は欠番である。遺構調査は，四分割法を原則とした。しかし，狭小な土坑等については二分割法とし，補足的にエレベーションを付加した。遺構実測図の縮尺は，規模・細部状況に合わせて1/10・1/20である。遺構平面図の作成は，水糸の１ｍ方眼による実測を原則とした。地形測量図の縮尺は1/400で作成した。

遺構内出土遺物の内，特徴的なものについては，その出土状況を実測図・写真で記録した。遺構外出土遺物についてはグリッド単位で採取し，特徴的なものについては写真記録を行った。遺構内・外に散布していた炭化物については部分的に採取を行い，炭素年代測定法による自然科学分析を実施した。

写真記録は，35㎜・６×4.5判一眼レフカメラで行った。また，遺跡の立地や調査区の全景を記録するため，ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

発掘調査で得られた各種記録・出土遺物は，財団法人福島県文化振興財団遺跡調査部で整理作業を行った。報告書刊行後は各種台帳を作成し，閲覧可能な状態で福島県文化財センター白河館に収蔵・保管する予定である。　（香　川）

表２　竪穴住居跡一覧

遺構番号	報告書	位　置	平面形	規模（cm）			年　代	遺　物	備　考
				長軸	短軸	深さ			
SI01	『阿1』	Ⅰ区（P27･28）	方形	400	350	20	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器・須恵器	
SI02	『阿1』	Ⅰ区（P26･27）	方形	510	(410)	20	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器・須恵器	カマドから鈃具
SI03	『阿1』	Ⅰ区（P･Q28･29）	不明	400	－	20	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器・須恵器	
SI04	『阿1』	Ⅱ区（H･I10）	長方形	400	340	42	9Ｃ末～10Ｃ前	土師器	
SI05	『阿1』	Ⅱ区（I･J18）	方形	(327)	－	10	9Ｃ後半	土師器	SI05＞SI17
SI06	『阿1』	Ⅲ区（J17･18）	長方形	518	405	23	9Ｃ末	土師器	SI06＞SI11
SI07	『阿1』	Ⅰ区（Q27）	方形	220	190	30	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器・須恵器	土器焼成遺構？
SI08	『阿1』	Ⅱ区（I7）	長方形	(435)	353	23	9Ｃ末～10Ｃ前	土師器･刀子	
SI09	『阿1』	Ⅱ区（H･I9）	方形	244	(220)	14	9Ｃ末～10Ｃ前	土師器	土器焼成遺構？
SI10	『阿1』	Ⅰ区（P26･27）	長方形	360	300	20	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器･須恵器	竪穴状遺構
SI11	『阿1』	Ⅲ区（J17）	長方形	530	498	61	9Ｃ後半	土師器･須恵器	
SI12	『阿1』	Ⅱ区（H13）	長方形	550	520	40	平安時代	土師器･刀子	竪穴状遺構
SI13	『阿1』	Ⅱ区（H11）	長方形	438	350	30	9Ｃ後半	土師器･須恵器	竪穴状遺構
SI14	『阿2』	Ⅲ区（I･J27･28）	長方形	410	390	40	9Ｃ後半	土師器･須恵器	
SI15	『阿2』	Ⅲ区（I･J24）	長方形	(378)	(284)	13	9Ｃ末～10Ｃ前	土師器･土製品	土器焼成遺構？
SI17	『阿3』	Ⅱ区（I･J8）	方形	425	413	73	9Ｃ後半	土師器･須恵器	ロクロピット

※SI16は欠番。

表３　須恵器窯跡一覧

遺構番号	報告書	位　　置	平面形	規模（cm）			年　　代	遺　　物	備　　考
				長軸	短軸	深さ			
SR01	『阿 1』	Ⅱ区（K6）	羽子板状	(206)	124	－	9Ｃ後半	須恵器	SR01 ＞ SR03
SR02	『阿 1』	Ⅱ区（K6）	楕円形	(205)	(103)	－	9Ｃ後半	須恵器	
SR03	『阿 1』	Ⅱ区（J･K5･6）	台形	(195)	145	－	9Ｃ後半	須恵器	

表４　溝跡一覧

遺構番号	報告書	位　　置	平面形	規模（m）			年　　代	遺　　物	備　　考
				長さ	幅	深さ			
SD01	『阿 1』	Ⅰ区（N7 ～ O29）		21.3	1.4	0.4	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器・須恵器	排水溝
SD02	『阿 1』	Ⅰ区（P28･29）		10.0	0.6	0.6	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器・須恵器	排水溝
SD03	『阿 1』	Ⅰ区（O･P22）		6.4	0.6	0.5	8Ｃ末～9Ｃ前		排水溝
SD04	『阿 1』	Ⅱ区（K5 ～ 7）		28	0.9	0.2	平安時代～	須恵器	通路？
SD05	『阿 1』	Ⅲ区（J18）		6.0	1.7	0.2	平安時代	土師器	通路？
SD06	『阿 1』	Ⅰ区（O･P20）		4.4	0.4	0.1	奈良～平安		排水溝
SD07	『阿 1』	Ⅰ区（O15･16）		6.0	1.6	0.5	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器	排水溝
SD08	『阿 1』	Ⅰ区（O15）		3.2	1.1	0.3	8Ｃ末～9Ｃ前		排水溝
SD09	『阿 1』	Ⅱ区（H14）		(9.5)	1.9	1.0	平安時代～	土師器	

表５　土坑一覧（１）

遺構番号	報告書	位　　置	平面形	規模（cm）			年　　代	遺　　物	備　　考
				長軸	短軸	深さ			
SK01	『阿 1』	Ⅰ区（Q28）	楕円形	120	90	25	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器	
SK02	『阿 1』	Ⅰ区（Q28）	楕円形	110	90	25	奈良～平安		
SK03	『阿 1』	Ⅰ区（P27）	方形	300	270	35	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器・須恵器	土器焼成坑
SK04	『阿 1』	Ⅰ区（O29）	方形	(115)	100	35	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器・須恵器	焼成坑
SK05	『阿 1』	Ⅰ区（O28）	方形	(230)	215	20	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器・須恵器	土師器焼成坑
SK06	『阿 1』	Ⅰ区（P26）	円形	170	－	80	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器・須恵器	簡易水溜用施設
SK07	『阿 1』	Ⅰ区（O･P21）	方形	140	(110)	40	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器・須恵器	土器焼成坑
SK08	『阿 1』	Ⅰ区（L31）	長方形	115	55	75	縄文時代		落し穴
SK09	『阿 1』	Ⅰ区（P21）	楕円形	230	140	75	縄文時代		
SK10	『阿 1』	Ⅱ区（H10）	楕円形	192	140	18	平安時代	土師器	土師器焼成坑？
SK11	『阿 1』	Ⅰ区（Q27）	方形	135	80	20	奈良・平安		
SK12	『阿 1』	Ⅰ区（P27･28）	円形	80	－	20	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器	
SK13	『阿 1』	Ⅰ区（O28）	方形	180	(160)	15	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器	土師器焼成坑
SK14	『阿 1』	Ⅰ区（O28）	楕円形	120	(50)	20	8Ｃ末～9Ｃ前		SK14 ＞ SK15
SK15	『阿 1』	Ⅰ区（O28）	楕円形	100	(40)	15	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器	SK15 ＜ SK14
SK16	『阿 1』	Ⅰ区（P26）	楕円形	170	145	25	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器・須恵器	
SK17	『阿 1』	Ⅰ区（P26）	円形	250	－	95	8Ｃ末～9Ｃ前	土師器・須恵器	簡易水溜用施設
SK18	『阿 1』	Ⅲ区（J18）	楕円形	200	173	21	9Ｃ後～末	土師器・粘土塊	土師器焼成坑
SK19	『阿 1』	Ⅰ区（O19）	円形	90	－	25	奈良・平安	土師器	木炭焼成坑
SK20	『阿 1』	Ⅰ区（P26）	楕円形	160	(140)	70		土師器	SI02 ＞ SK20
SK21	『阿 1』	Ⅲ区（J18）	楕円形	95	85	30	9Ｃ末～	土師器	SI06 ＜ SK21
SK22	『阿 1』	Ⅲ区（I20）	楕円形	56	48	14	9Ｃ後半	土師器	
SK23	『阿 1』	Ⅲ区（J18）	円形	54	－	30	9Ｃ後半	土師器	ロクロピット
SK24	『阿 1』	Ⅲ区（J19）	円形	58	－	14	9Ｃ後半	土師器	
SK25	『阿 1』	Ⅱ区（I8）	円形	150	－	23	9Ｃ末～10Ｃ前	土師器	土器焼成坑
SK26	『阿 1』	Ⅱ区（H10）	不明	210	(84)	16	9Ｃ末～10Ｃ前	土師器・須恵器	
SK27	『阿 1』	Ⅰ区（O17）	長方形	(300)	90	15	奈良･平安	須恵器	木炭焼成坑
SK28	『阿 1』	Ⅱ区（J12）	円形	80	－	40	平安時代		
SK29	『阿 1』	Ⅲ区（I21･22）	長方形	(176)	(120)	26	9Ｃ	土師器	土師器焼成坑
SK30	『阿 1』	Ⅲ区（I20）	円形	68	62	20	8Ｃ末～9Ｃ初		
SK31	『阿 1』	Ⅲ区（I22）	円形	(90)	－	16	8Ｃ末～9Ｃ初		
SK32	『阿 1』	Ⅱ区（G12）	楕円形	213	150	14	9Ｃ後半	土師器・須恵器	土師器焼成坑？
SK33	『阿 1』	Ⅰ区（O17）	楕円形	100	(60)	15	奈良･平安		

表６　土坑一覧（２）

遺構番号	報告書	位　置	平面形	規模（cm）			年　代	遺　物	備　考
				長軸	短軸	深さ			
SK34	『阿１』	Ⅱ区（H9）	楕円形	115	98	32	平安時代		
SK35	『阿１』	Ⅱ区（J5）	方形	(95)	(53)	10	平安時代		木炭焼成坑
SK36	『阿２』	Ⅲ区（I24）	台形状	172	164	26	9Ｃ末～10Ｃ前	土師器・須恵器	土師器焼成坑
SK37	『阿２』	Ⅲ区（J25）	楕円形	83	73	13	9Ｃ末～10Ｃ前	土師器・土製品	土師器焼成坑
SK38	『阿２』	Ⅲ区（I･J24）	方形	(122)	(108)	8	9Ｃ後半	土師器・須恵器	土師器焼成坑
SK39	『阿２』	Ⅲ区（K24）	楕円形	118	86	13	平安時代		木炭焼成坑
SK40	『阿２』	Ⅲ区（K24）	楕円形	117	92	10	平安時代	土師器	
SK41	『阿２』	Ⅲ区（J･K35）	楕円形	130	79	78	縄文時代		落し穴
SK42	『阿２』	Ⅲ区（H33）	楕円形	98	85	13	9Ｃ後半	土師器	土師器焼成坑
SK43	『阿２』	Ⅲ区（K33）	長方形	124	69	86	縄文時代		落し穴
SK44	『阿２』	Ⅲ区（K34）	楕円形	148	102	86	縄文時代		落し穴
SK45	『阿２』	Ⅲ区（J36）	長方形	136	(113)	56	縄文時代		
SK46	『阿２』	Ⅲ区（K30）	楕円形	137	105	32	縄文時代		
SK47	『阿２』	Ⅲ区（K32）	長方形	136	69	89	縄文時代		落し穴
SK48	『阿３』	Ⅱ区（I9）	長方形	170	130	40	9Ｃ末～10Ｃ前	土師器	土師器焼成坑
SK49	『阿３』	Ⅱ区（H10）	楕円形	268	131	26	9Ｃ後半	土師器・須恵器	土師器焼成坑
SK50	『阿３』	Ⅱ区（I9）	方形	70	60	10	9Ｃ末～10Ｃ前	土師器	土師器焼成坑
SK51	『阿３』	Ⅱ区（G6）	楕円形	(187)	(150)	11	9Ｃ末～10Ｃ前	土師器	土師器焼成坑
SK52	『阿３』	Ⅱ区（H10）	楕円形	(146)	140	7	9Ｃ後半	土師器	
SK53	『阿３』	Ⅱ区（I14）	台形	240	200	25	9Ｃ後半	土師器	土師器焼成坑
SK54	『阿３』	Ⅱ区（H10）	楕円形	137	(100)	10	9Ｃ後半	土師器	SK54 ＞ SK59
SK55	『阿３』	Ⅱ区（I9）		(53)	(24)	6	古代		
SK56	『阿３』	Ⅱ区（I13）	楕円形	103	96	20			底面に焼け石
SK57	『阿３』	Ⅲ区（I8･9）	方形	120	116	55	古代		
SK58	『阿３』	Ⅱ区（I14）	長方形	112	(81)	13	9Ｃ後半	土師器	土師器焼成坑
SK59	『阿３』	Ⅱ区（H10）	楕円形	104	93	20	古代		
SK60	『阿３』	Ⅱ区（H8）	楕円形	132	95	16	古代		
SK61	『阿３』	Ⅱ区（J17）	方形	114	110	23	9Ｃ後半	土師器	土師器焼成坑

表７　焼土遺構一覧

遺構番号	報告書	位　置	平面形	規模（cm）			年　代	遺　物	備　考
				長軸	短軸	厚さ			
SG01	『阿１』	Ⅲ区（I20）		75	54	3	平安時代		
SG02	『阿２』	Ⅲ区（J24）		100	35	6	平安時代	土師器	土器焼成遺構？
SG03	『阿２』	Ⅲ区（I24）		106	59	7	平安時代	土師器	土器焼成遺構？
SG04	『阿２』	Ⅲ区（K35）		83	82	7	平安時代	土師器・須恵器	
SG05	『阿２』	Ⅲ区（K35）		60	59	6	平安時代	土師器	
SG06	『阿２』	Ⅲ区（K35）		59	46	6	平安時代	土師器	
SG07	『阿２』	Ⅲ区（I32）	楕円形	(206)	(43)	13			現代の木炭窯？
SG08	『阿３』	Ⅱ区（I10）	方形	84	(70)	2	平安時代		
SG09	『阿３』	Ⅱ区（G8）		153	69	1	9Ｃ中～後	土師器	
SG10	『阿３』	Ⅱ区（H8）		108	58	2	古代		焼け石を伴う
SG11	『阿３』	Ⅱ区（H10）		154	72	0.5	9Ｃ中～後	土師器	南東側に焼け石
SG12	『阿３』	Ⅱ区（I9）		165	150	0.5	古代		
SG13	『阿３』	Ⅱ区（H・I9）	楕円形	86	47	3	古代		焼け石を伴う

表８　その他の遺構一覧

遺構番号	報告書	位　置	平面形	規模（cm）			年　代	遺　物	備　考
				長軸	短軸	深さ			
SM01	『阿２』	Ⅲ区（K36）	円形	36	35	15	縄文後期中	縄文土器	土器埋設遺構
SX01	『阿１』	Ⅲ区（I19）	長方形	302	298	70	18Ｃ後～	磁器・鉄製品	竪穴遺構
SX02	『阿１』	Ⅱ区（G14 ～ 16）		(580)	－	－	近世？		畝状遺構
SX03	『阿２』	Ⅲ区（K36）		－	－	－	縄文早期末	石器・縄文土器	石器集中地点
SX04	『阿３』	Ⅱ区（H12･13）		－	－	－	古代	土師器	

※『阿１～３』…『阿賀川改修（長井地区）遺跡発掘調査報告１～３』，規模の（　）は遺存値，備考の＞は（新）＞（旧）を示す。

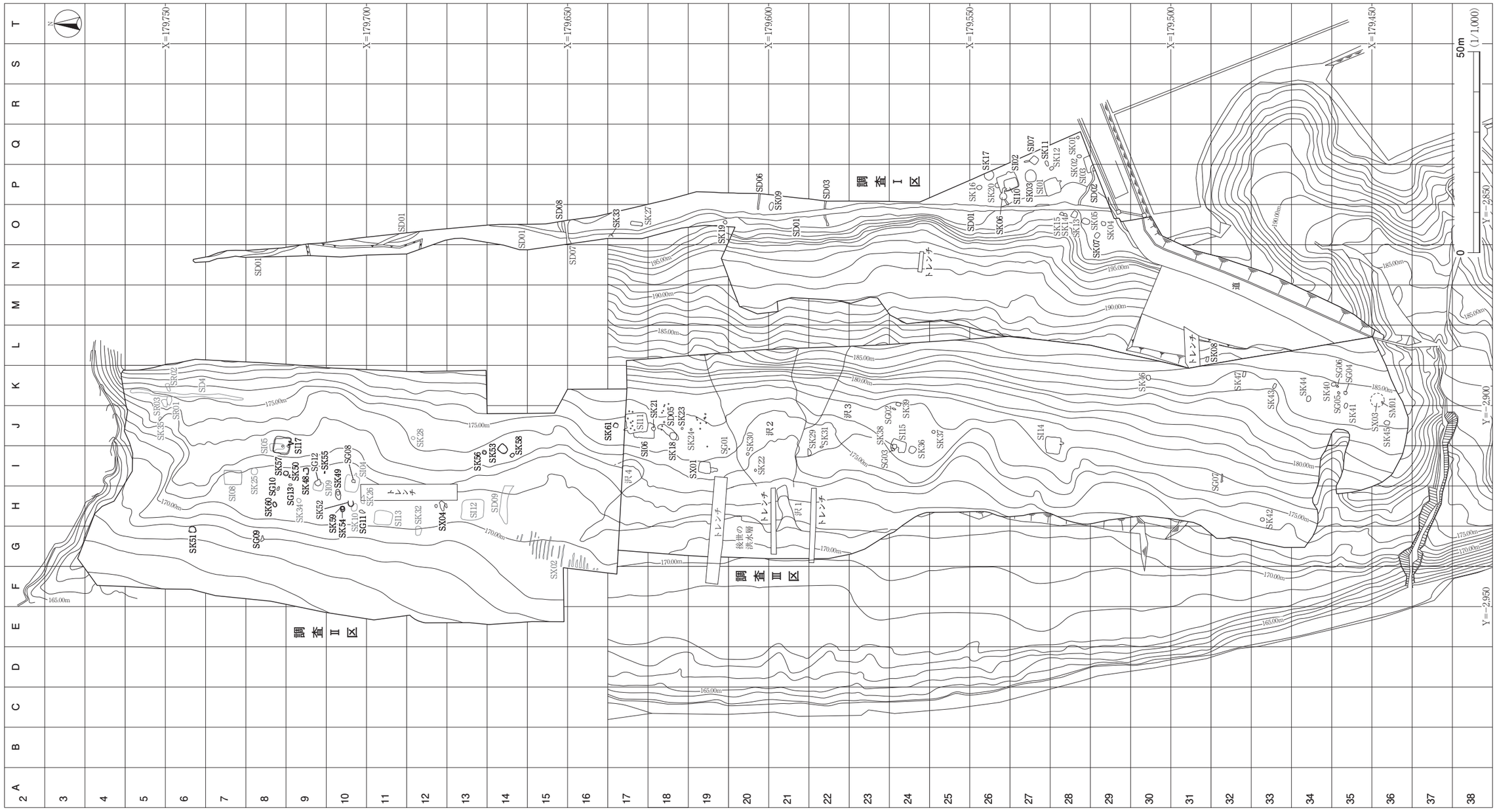

調査Ⅰ区
調査Ⅱ区
調査Ⅲ区
トレンチ
後世の排水層
道
X=179,750
X=179,700
X=179,650
X=179,600
X=179,550
X=179,500
X=179,450
Y=−2,850
Y=−2,900
Y=−2,950
50m
(1/1,000)

図5　遺構配置図

うら白

第２章　調 査 成 果

第１節　遺構・遺物の分布

平成24年度の３次調査は，調査Ⅱ区の継続調査である。３次調査で検出した遺構は，竪穴住居跡１軒（ＳＩ17）・土坑14基（ＳＫ48～61）・焼土遺構６基（ＳＧ08～13）・特殊遺構１基（ＳＸ04）である。３次調査における検出遺構・出土遺物の時期は，９世紀後半の平安時代に位置付けられるものが大半である。しかし，ＳＧ10・13，ＳＸ04は，検出面等から平安時代以前の可能性がある。

阿賀川の河道部に位置する調査Ⅱ・Ⅲ区は，標高175ｍ付近に河川敷状の狭長な平坦面が形成されており，平安時代の検出遺構は同平坦面を中心に分布している。平坦面東部では背部段丘の斜面崩落による粘土質の厚い再堆積層が観察され，その地盤は比較的硬質である。１次調査における調査Ⅱ区の北東部で，丘陵裾部の傾斜と粘土質の地盤を利用するように作られた須恵器窯跡ＳＲ01～03を確認している（図５）。ＳＲ01～03の時期は９世紀後半と考えられ，今回の３次調査で確認した遺構・遺物の時期に近い。

調査Ⅱ・Ⅲ区で確認した平安時代の竪穴住居跡の内，９世紀後半代に位置付けられるのはＳＩ11・14（Ⅲ区），ＳＩ17（Ⅱ区）である。各住居跡は背部段丘の斜面裾に接して立地し，概ね南北の一直線上に並ぶ。各住居跡間の距離はＳＩ11・17が約90ｍ，ＳＩ11・14が約105ｍで，上方の小田高原台地と呼ばれる中位河岸段丘面で確認された平安住居跡（調査Ⅰ区）の状況と比較すると分散的である。ＳＩ17ではロクロピット状の穴が検出されており，調査Ⅱ・Ⅲ区に展開する竪穴住居跡は工房を兼ねた施設の可能性も考えられる。

調査Ⅱ区の中央部（Ｈ・Ｉ８～12グリッド付近）には，概ね南北方向に陥入する溝状の窪地が形成されており，その東西断面は凹状の舟底地形を呈する。この窪地を中心とする範囲から，土坑・焼土遺構等（図６）が確認された。ＳＩ17とほぼ同時期と考えられる遺構は，同住居跡の南西側約20ｍのＨ10グリッド付近に集中する（ＳＫ49・52・54，ＳＧ08・11等）。同グリッド付近では舟底地形の斜面部で遺構が検出され，同最深部には各遺構から流入したと思われる土師器や炭化物・焼土が認められた。各遺構の遺存状態は全体的に悪いが，土器溜り状に集積した土師器片の状況などから，焼土面を伴う遺構については土器焼成に関連した可能性が考えられる。ＳＩ17の床面遺物とＳＫ54・Ｈ10グリッドの出土遺物が一部接合しており，同住居跡とＨ10グリッド付近の検出遺構は有機的に結びつく可能性がある。なお，ＳＫ48・50も焼土面を伴い土器焼成に関連した遺構と推測されるが，検出面からＳＩ17よりも新しい時期と考えられる土坑である。

９世紀後半代の遺構は粘土質の再堆積層を基盤とするが，Ｈ８・９グリッドのＳＧ10・13は同堆積層よりも下位の層から検出された遺構である。ＳＧ10・13は焼け石を伴う焼土遺構で，上層の土器焼成関連遺構と同様に舟底地形を利用した施設の可能性がある。ＳＧ10・13に類似する遺

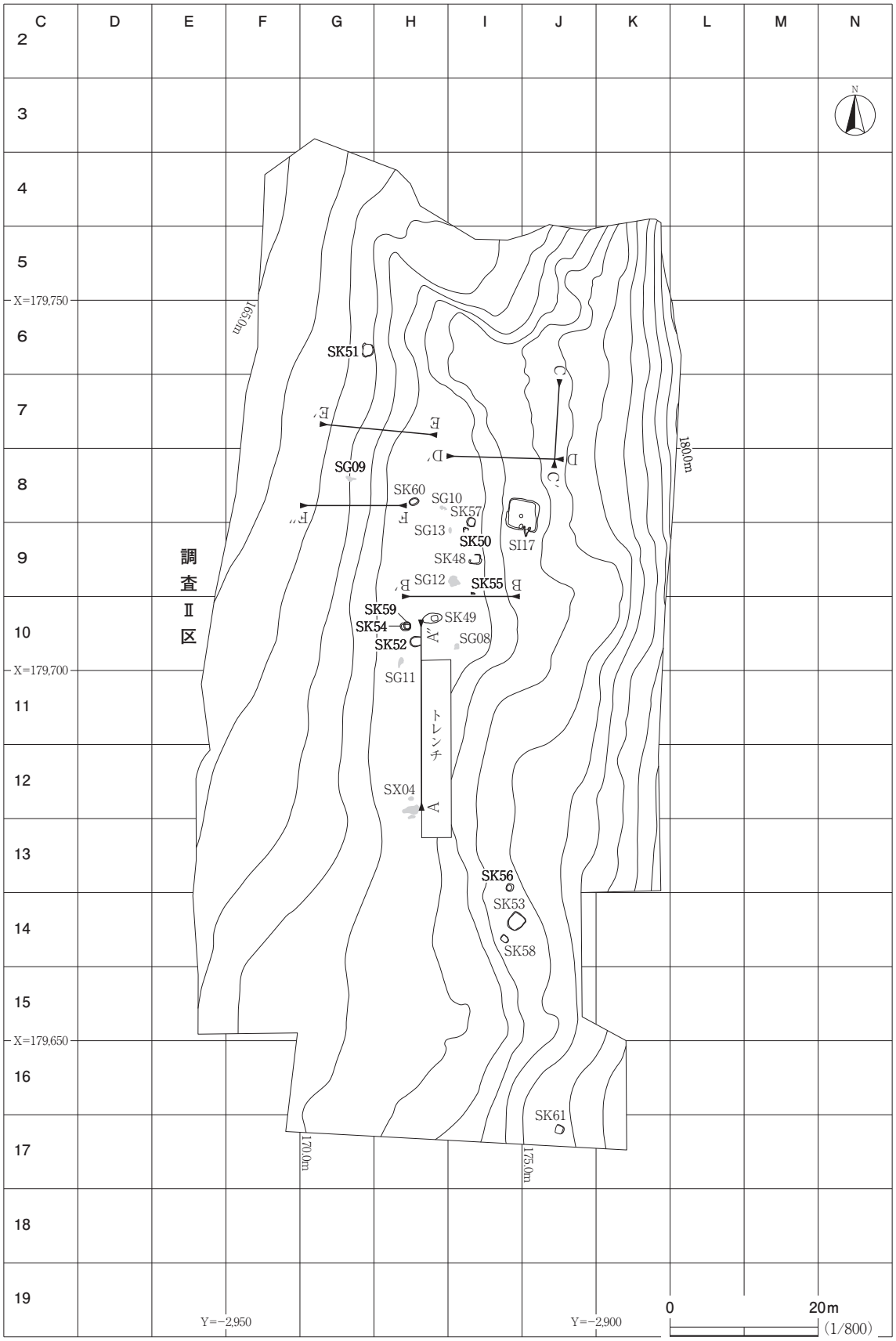

C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
X=179,750
X=179,700
X=179,650
Y=−2,950
Y=−2,900
N
調査Ⅱ区
SK51
SG09
SK60
SG10
SK57
SG13
SK50
SI17
SK48
SG12
SK55
SK59
SK54
SK52
SK49
SG08
SG11
SX04
トレンチ
SK56
SK53
SK58
SK61
165.0m
170.0m
175.0m
180.0m
0
20m
(1/800)

図６　Ⅱ区遺構配置図

構にはＨ12グリッドのＳＸ04がある。ＳＸ04の遺存状態は比較的良好と思われるが，出土遺物に乏しくその性格は不明である。なお，炭素年代測定によりＳＸ04の時期は，奈良時代以前の可能性がある。

およそＧグリッド列よりも西側は，阿賀川の現流路に向かって下る斜面地形になっている。調査Ⅱ区の地形は，標高175ｍ前後の平坦面と以西の斜面に大きく分けることができる。西斜面の一帯は，検出遺構・出土遺物が比較的希薄である。調査Ⅱ区北西部のＳＫ51は土器焼成坑と推測されるが，単独で同様の斜面に立地する遺構には調査Ⅲ区南西部のＳＫ42がある（図５）。

第２節　基 本 土 層

調査Ⅱ区が立地する河道部の土層は，阿賀川及び背部段丘の影響が複合している。西側の阿賀川からは洪水砂が供給され，調査Ⅱ区西半部の堆積土は，砂層・シルト質層が交互に連続している。平成21年度に喜多方市教育委員会が実施した小田高原遺跡試掘調査（『喜多方市文化財報告書第８集』）の２号トレンチ（２Ｔ，２Ｔ－２）がＨ10グリッドの平坦面，４号トレンチ（４Ｔ）がＧ８グリッドの斜面に位置する。２Ｔ－２の調査所見では４・６層が遺物包含層であり，中間に厚く堆積する５層は洪水砂層とされた。１次調査では４層をＬⅡｃ，６層をＬⅢＥとし，今回の３次調査においても踏襲している。１次調査ではＬⅡｃを主体に発掘調査を実施し，同層から９世紀末葉～10世紀前葉頃の土師器類が出土している。３次調査では主にＬⅢＥ以下の発掘調査を実施し，ＬⅢＥから９世紀後半頃の土師器・須恵器類が出土している。なお，２Ｔは安全面から９層で試掘調査が終了されているが，９層の直下にＬⅡｃが堆積する。

４Ｔの調査所見では，８・11層で遺物が確認されている。図９の基本土層観察用ベルトＦ－Ｆ”との対応ではℓ３が４Ｔ－８層，ℓ10が４Ｔ－11層に該当すると考えられる。Ｆ－Ｆ”では平坦面部に堆積するＬⅢＥが，西の斜面部のℓ３へと連続することが確認された。平坦面部の突端に近いℓ３内には炭化物が比較的多く含まれていたものの，西へ標高が下がるにつれて炭化物の含有量が減少する。ℓ３内から土師器・須恵器杯の出土も確認しているが，平坦部のＬⅢＥと比較して遺物量は非常に少ない。ＬⅢＥ関連の特徴的な遺構には土師器焼成坑があり，同遺構の後方斜面には土器溜まりや炭化物の散布が一般的に認められた。調査Ⅱ区の斜面部は極めて遺構密度の低い一帯であるが，ℓ３内の土器・炭化物量が希薄になっていくことと整合する。以上から４Ｔ－８層・ＬⅢＥ・Ｆ－Ｆ”のℓ３は９世紀後半の遺物包含層と考えられる。なお，ＳＧ09は，喜多方市教育委員会が４Ｔ－８層面で確認した遺構である。

４Ｔ－11層から平安時代の土師器が出土したとされる。しかし，Ｆ－Ｆ”のℓ10から遺物は確認できなかったが，澱状に堆積するℓ９から微細なロクロ土師器片が出土した。Ｇ６・７グリッドでもℓ10の類似層からロクロ土師器片を確認したが，その出土量は極めて少なく，遺物の出自は河川の氾濫等による影響が考えられる。ℓ10よりも下層の状況については，ボーリング（１次調査）・

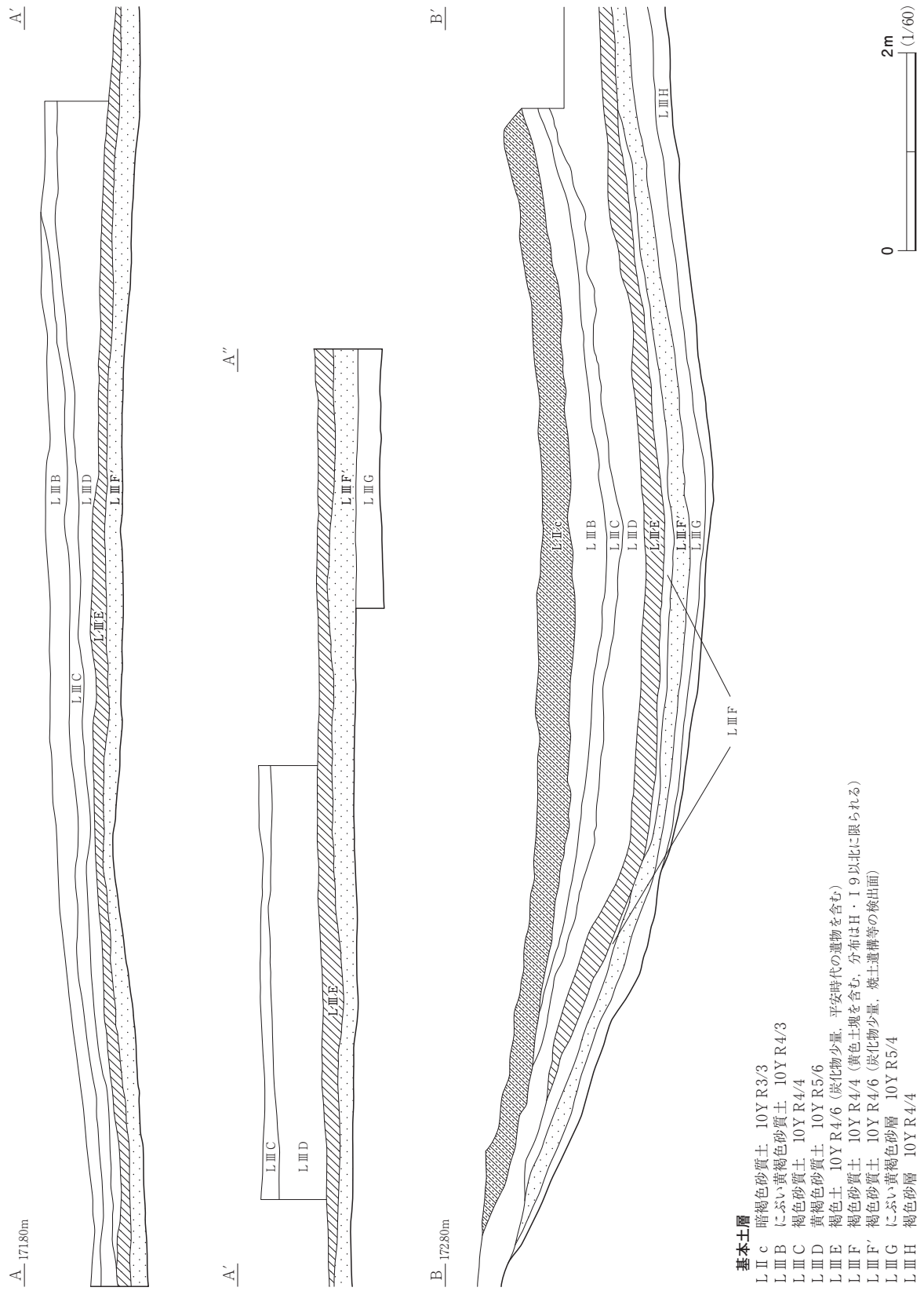

A
171.80m
A′
LⅢB
LⅢC
LⅢD
LⅢE
LⅢF′
A″
A′
LⅢC
LⅢD
LⅢE
LⅢF′
LⅢG
B
172.80m
B′
LⅡc
LⅢB
LⅢC
LⅢD
LⅢE
LⅢF′
LⅢG
LⅢH
LⅢF
0
2m
(1/60)
基本土層
LⅡc　暗褐色砂質土　10YR3/3
LⅢB　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
LⅢC　褐色砂質土　10YR4/4
LⅢD　黄褐色砂質土　10YR5/6
LⅢE　褐色土　10YR4/6（炭化物少量，平安時代の遺物を含む）
LⅢF　褐色砂質土　10YR4/4（黄色土塊を含む，分布はH・I９以北に限られる）
LⅢF′　褐色砂質土　10YR4/6（炭化物少量，焼土遺構等の検出面）
LⅢG　にぶい黄褐色砂層　10YR5/4
LⅢH　褐色砂層　10YR4/4

図7　基本土層（1）

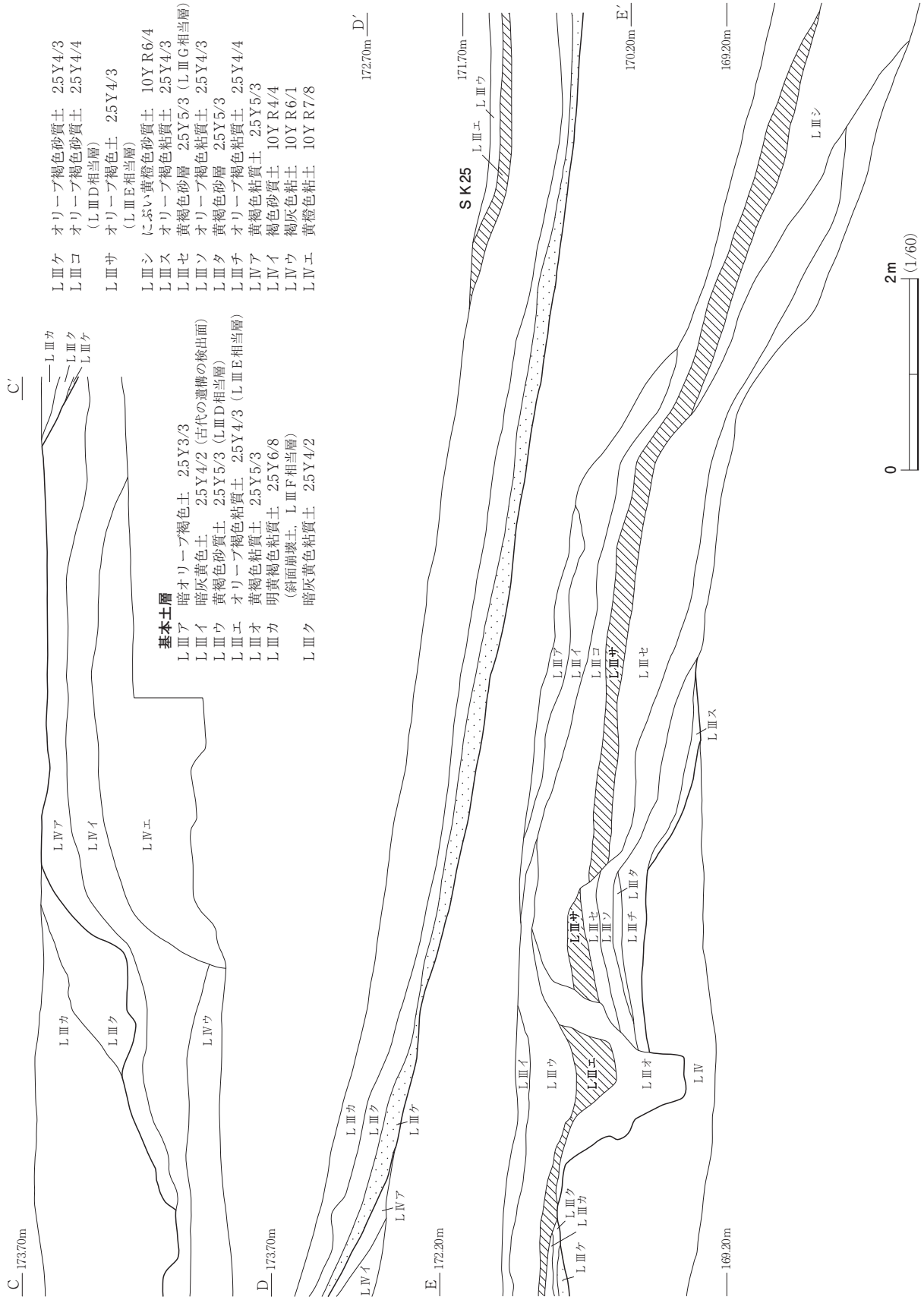

基本土層
ⅢＡ　暗オリーブ褐色土　2.5Y3/3
ⅢＩ　暗灰黄色土　2.5Y4/2（古代の遺構の検出面）
ⅢＵ　黄褐色砂質土　2.5Y5/3（ⅢＤ相当層）
ⅢＥ　オリーブ褐色粘質土　2.5Y4/3（ⅢＥ相当層）
ⅢＯ　黄褐色粘質土　2.5Y5/3
ⅢＫ　明黄褐色粘質土　2.5Y6/8
（斜面崩壊土，ⅢＦ相当層）
ⅢＱ　暗灰黄色粘質土　2.5Y4/2
ⅢＫ　オリーブ褐色砂質土　2.5Y4/3
ⅢＣ　オリーブ褐色砂質土　2.5Y4/4
（ⅢＤ相当層）
ⅢＳ　オリーブ褐色土　2.5Y4/3
（ⅢＥ相当層）
ⅢＳ　にぶい黄橙色砂質土　10YR6/4
ⅢＳ　オリーブ褐色粘質土　2.5Y4/3
ⅢＳ　黄褐色砂層　2.5Y5/3（ⅢＧ相当層）
ⅢＳ　オリーブ褐色粘質土　2.5Y4/3
ⅢＴ　黄褐色砂層　2.5Y5/3
ⅢＴ　オリーブ褐色粘質土　2.5Y4/4
ⅣＡ　黄褐色粘質土　2.5Y5/3
ⅣＩ　褐色砂質土　10YR4/4
ⅣＵ　褐灰色粘土　10YR6/1
ⅣＥ　黄橙色粘土　10YR7/8
C′
C 173.70m
D 173.70m
D′ 172.70m
E 172.20m
E′ 170.20m
171.70m
169.20m
169.20m
SK25
0
2m
(1/60)

図8　基本土層（2）

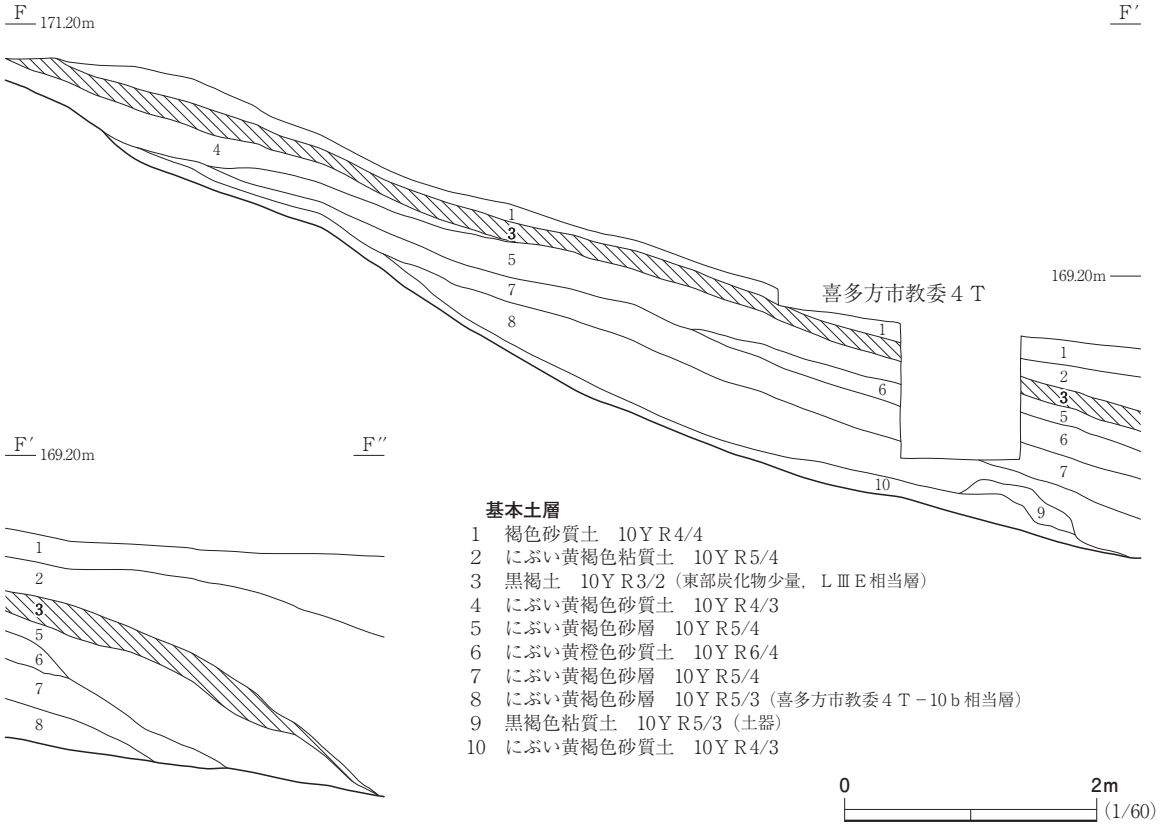


図９　基本土層（３）

トレンチ調査によってさらにシルト・砂の互層が連続していることを確認しているが，各層から遺物等は確認できなかった。

調査Ⅱ区東半部は，背部段丘の斜面崩落による再堆積が著しい。斜面崩落は小規模なものでは長雨等によって誘発され，１次調査中に発生した土砂崩れでは調査Ⅱ区の中央部に厚さ40㎝前後の再堆積層が形成された。しかし，喜多方市教育委員会が調査Ⅱ区北部の１号トレンチ（１Ｔ）で平安時代の基盤・地山とした再堆積層（３～５層）は大規模であり，層厚が２ｍを超える箇所もある。おそらく，調査Ⅱ区北東側の段丘崖付近が地震等によって地滑りを起こしたものと推測され，１次調査では１Ｔの３～５層をＬⅢカとした（Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′）。１次調査で発見したＳＲ01～03は，ＬⅢカ面で検出した須恵器窯跡である。ＬⅢカは，調査Ⅱ区中央部の溝状の窪地にも流入するが南方向に層厚が薄くなり，Ｈ10グリッド以南では殆ど観察されない。土層観察用ベルトＢ－Ｂ′では，ＬⅢＦがＬⅢカに該当する。

ＬⅢカ直上のＬⅢエは，１次調査でＬⅢＥ相当とした層である（Ｅ－Ｅ′）。ＬⅢエの西端は断面が漏斗状に寸断されており，地震による噴砂痕の可能性も考えられるという（卜部：2012）。ＬⅢサについても土質等の特徴からＬⅢＥ相当としたが，同層も段状のズレが観察された。なお，Ｄ－Ｄ′南端のＳＫ25は１次調査で10世紀初頭頃の土師器焼成坑とした遺構であるが，その底面はＬⅢエまで達していない。

喜多方市教育委員会は，１Ｔの調査所見で３～５層よりも下位の土層確認の必要性を指摘してお

り，１次調査の時点でＬⅢケ面から焼土遺構を確認している。ＬⅢケ内には炭化物・焼石を含み，層中の含有物の特徴などからＬⅢＦ′が該当するが，両層とも出土遺物に乏しい。Ｈ12グリッドのＳＸ04は，ＬⅢＦ′面で検出した遺構で焼石・焼土面を伴う遺構である。ＬⅢＦ′・Ⅲケは，調査Ⅱ区中央を南北に延びる溝状の窪地を中心に分布し，西の斜面部では殆ど認められなかった。ＬⅢＦ′直下のⅢＧ・ⅢＨは阿賀川起因の洪水砂層と推測される。

調査Ⅱ区の堆積土の状況は河川等の影響を受けて複雑であり，また一様ではないが，ＬⅡｃ・ⅢＥ・ⅢＦ・ⅢＦ′の各層について以下に要約する。

ＬⅡｃ　：　９世紀末葉～10世紀前葉の遺物包含層。喜多方市教委２Ｔ－２の４層が該当する。

ＬⅢＥ　：　９世紀後半代の遺物包含層。ＬⅢエ・Ⅲサ，喜多方市教委２Ｔ－２の６層，４Ｔの８層が該当する。

ＬⅢＦ　：　丘陵斜面の崩落による再堆積層。ＬⅢカ，喜多方市教委１Ｔの３～５層が該当する。

ＬⅢＦ′：　ＳＸ04等の検出面。ＬⅢケが該当する。　（香　川）

第3節　竪穴住居跡

今回の３次調査で検出した竪穴住居跡は，ＳＩ17の１軒である。遺構番号は１次調査でＳＩ01～13が，２次調査でＳＩ14，15が付けられており，本来ＳＩ16とすべきである。しかし，１次調査時の不確定部分について，ＳＩ16として調査を実施したが，竪穴住居跡ではなく土坑と判断されたため，ＳＫ61に名称を変更した。そのため，同時期に調査したＳＩ17の名称をそのまま残し，ＳＩ16を欠番とした。

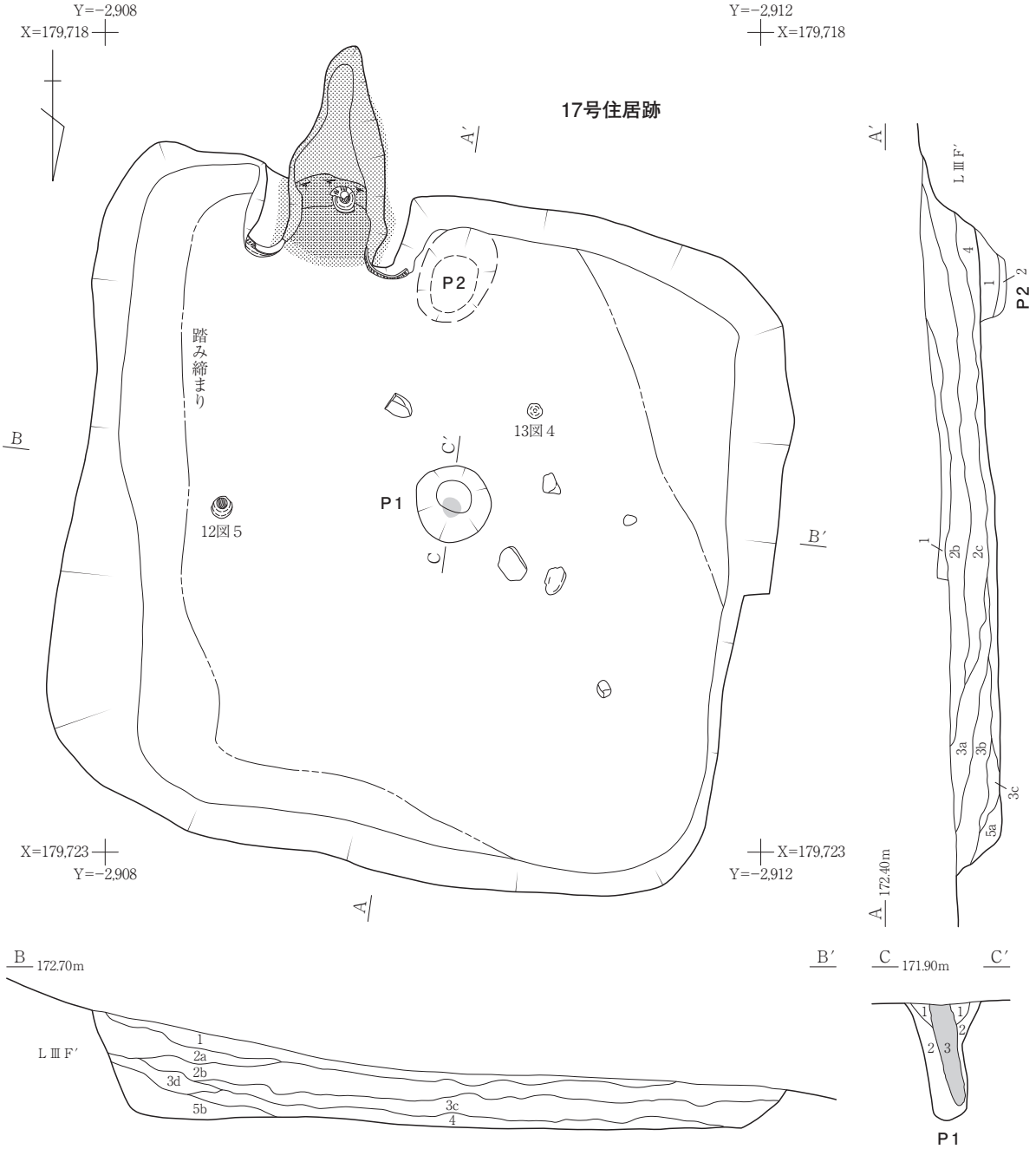
調査Ⅱ・Ⅲ区において，ＳＩ17の時期に近い住居跡にはＳＩ11・14があるが，いずれも立地が丘陵裾部に接し，また竪穴の形状が正方形に近いことが共通する。

17号住居跡　ＳＩ17

遺　　構（図10・11，写真８～11）

Ｉ・Ｊ８グリッドに位置する竪穴住居跡である。ＳＩ17はテラス状の平坦面に立地し，東背部には比較的急斜度の段丘崖が迫る。ＳＩ17の西側は，東西断面が舟底状の窪地になっている。遺構検出状況は，当初ＬⅢＦ上面で煙出し穴・遺物を確認したが撹乱として取り扱ってしまい，ＳＩ17の全体形が把握できたのはＬⅢＦ′上面である。遺構検出面の標高は約172.5ｍである。１次調査のＳＩ05と重複するが，ＳＩ17の方が古い。ＳＩ17の床面と煙出し穴の周辺から出土した土師器が，南西側約20ｍに位置するＳＫ54の出土遺物と接合している。

遺構内堆積土はℓ１～５に分け，さらにℓ２･３･５をそれぞれℓ２ａ～ｃ，ℓ３ａ～ｄ，ℓ５ａ・ｂに細分した。ℓ２は褐色系の層で，遺構検出面から床面近くまで堆積する。ℓ２ｂ・ｃ内には炭化物を含むが，含有量はℓ２ｃの方が多い。ℓ３は黄褐色系の層で，ＳＩ17の西部で観察される。



17号住居跡堆積土

1　黄褐色砂質土　2.5Y5/3
2a　褐色砂質土　10YR4/4
2b　褐色粘質土　10YR4/6（黄褐色粘土塊少量，炭化物やや多量）
2c　褐色砂質土　10YR4/4（炭化物少量）
3a　にぶい黄褐色粘質土　10YR5/3（黄褐色粘土塊少量）
3b　にぶい黄褐色粘質土　10YR5/4（黄褐色粘土塊やや多量）
3c　黄褐色粘質土　10Y5/6（黄褐色粘土塊多量）
3d　にぶい黄褐色砂質土　10YR5/3
4　暗褐色粘質土　10YR3/4（焼土粒・炭化物粒多量）
5a　にぶい黄褐色粘質土　10YR5/3（黄褐色粘土粒少量）
5b　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3（炭化物粒微量）

Ｐ１堆積土

1　にぶい黄褐色砂　10YR5/4
2　褐色粘質土　10YR4/4
3　暗褐色土　10YR3/4

Ｐ２堆積土

1　暗赤褐色土　2.5YR3/3（焼土塊・焼土粒・炭化物多量）
2　黄褐色砂質土　2.5Y5/4（黄色粘土塊やや多量）

0　1m（1/40）

図10　17号住居跡（１）

ℓ３内には，黄褐色粘土塊を含む。ＳＩ17の基盤は背部段丘の斜面崩落による粘土質の再堆積層であり，ℓ３内に混入する粘土塊についても同基盤に由来するものと推測される。ℓ４は床面のほぼ全面を被覆する層で，焼土粒・炭化物粒を多量に含む。ℓ５は，北・西辺の床面上に三角堆積する黄褐色系粘質土である。各層はレンズ状堆積を呈し，人為的に埋め戻されたような痕跡も確認できなかったことから，ℓ１～５は自然堆積土と考えられる。

ＳＩ17の平面形は概ね方形である。西壁の北半を事前のトレンチ調査で一部破壊してしまった。南北軸の方向は，Ｎ７°Ｅである。上端の平面規模は，東西4.25ｍ・南北4.13ｍである。各壁は床面から急角度で立ち上がり，北壁の傾斜は67°を測る。検出面から床面までの深さは，最深部の北壁沿いで73㎝を測る。

ＳＩ17の床面は地山を直接利用しており，貼床は確認できなかった。床面のほぼ全面で踏み締まりが確認され，特にカマド付近が著しい。床面の東西方向はほぼ水平であるが，南北方向はやや北側に下っている。

南壁の東寄りの地点で，作り付けのカマドを検出した。カマド奥壁～南壁の中心間距離は約72㎝である。カマド内の堆積土はℓ１～４に分けたが，土質等から各層はカマド廃絶後の流入土と推測される。ℓ１・２は堆積状況から煙出し穴付近に対応する層と考えられるが，同穴を破壊してしまったため詳細は不明である。

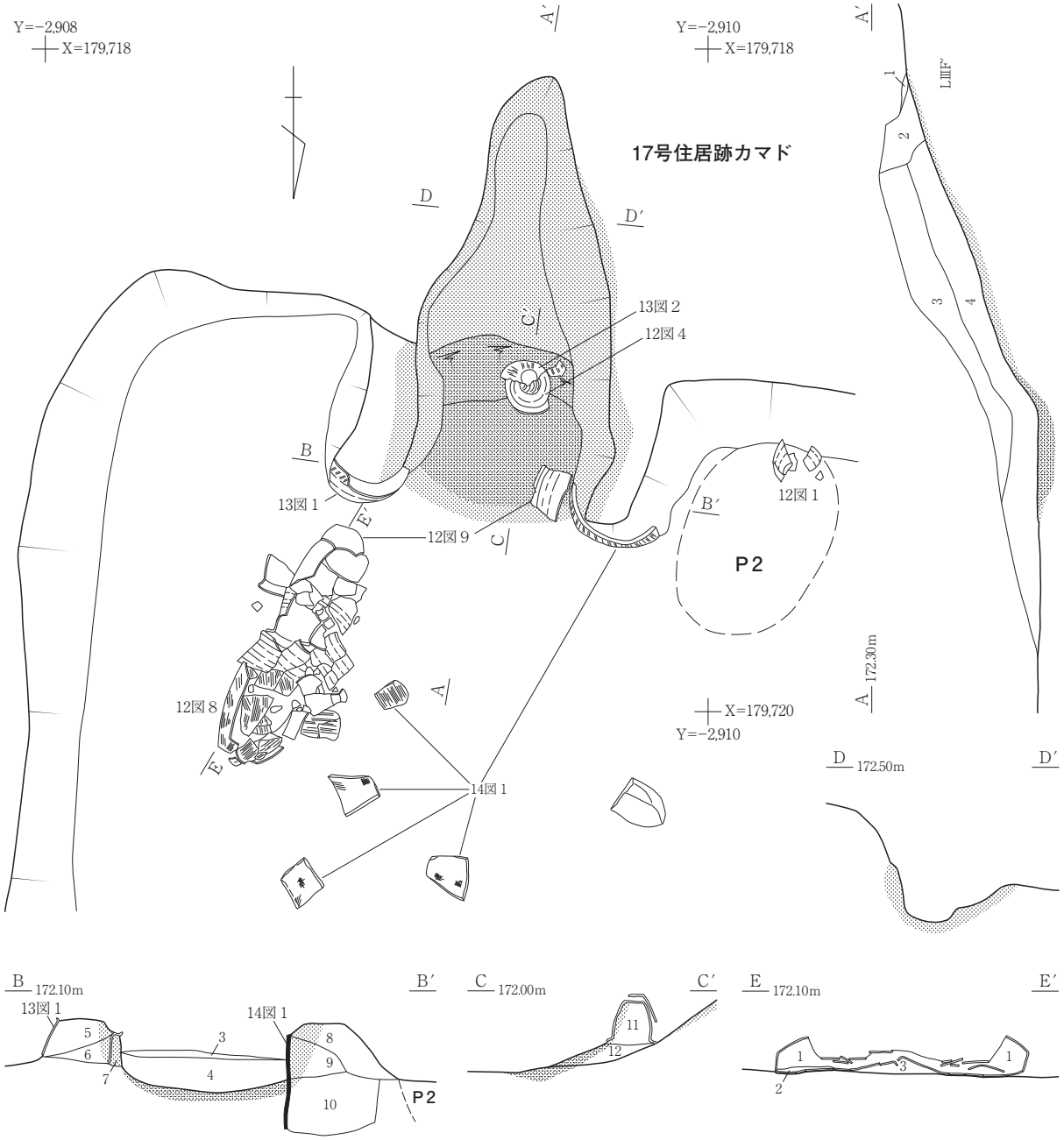
カマドの両袖端部に，土器・土製品を付設している。左袖側には口縁部を上に向けた半截状の長胴甕上半部(図13－１)，右袖側には平瓦状の土製品(図14－１)が据えられ，各器面の凸側が北に向く。図14－１の下半部は，床下に埋設されている。図14－１の上部破片がカマドの北側で出土したが，カマドの崩壊方向に流れたと思われる。カマドの構築土は黄褐色系の粘土が主体であるが，袖基底部にはℓ６のように砂質シルトも使用されている。

カマドの火床面は，東西方向が舟底状，南北方向が焚口～奥壁までほぼ水平である。火床面は受熱が著しく，約５㎝の深さまで橙色に変色していた。カマドの奥壁は南壁線上に重なり，燃焼部が外部に張り出していない。奥壁の角度は約40°，南側に続く煙道部の傾斜は約20°である。煙出し穴は赤褐色土が詰まった小穴として一度確認したが，不手際から削平してしまった。煙道部の東西断面を見ると西部に波状の段差が生じているが(Ｄ－Ｄ′)，その断面形状から，地下式に掘り込まれた煙道が崩落等によって半地下式に作り替えられた可能性も考えられる。

カマド袖の北方向の長さは，左袖53㎝・右袖50㎝である。カマド左・右袖端部の中央を結んだ東西幅は75㎝である。火床面の規模は，東西44㎝×南北57㎝である。カマド煙道部の遺存長は82㎝，煙道部底面の東西幅は13～44㎝である。煙道と竪穴の東西軸の方向は一致している。

奥壁寄りの火床面から，土師器の小胴甕(図12－４)が倒立状態で出土した。小胴甕は粘土質のℓ12によって概ね水平に据えられ，また内部全体にℓ11が詰められていた。ℓ11も受熱が著しく，特に燃焼部側は赤褐色に変色していた。小胴甕の底部には，長胴甕(図13－２)の底部破片が載る。

カマド左袖の北側から，長胴甕の口縁部を合わせたように２個の土師器(図12－８・９)が出土



カマド堆積土

1　暗赤褐色砂質土　５ＹＲ3/2（焼土粒・炭化物粒少量）
2　褐色砂質土　10ＹＲ4/4
3　にぶい褐色砂質土　7.5ＹＲ5/4（焼土粒・炭化物粒微量）
4　にぶい赤褐色土　2.5ＹＲ4/4（焼土塊・焼土粒・炭化物粒やや多量）
5　明黄褐色粘土　2.5Ｙ6/8
6　暗灰黄色砂質土　2.5Ｙ4/2
7　赤褐色粘土　2.5ＹＲ4/6
8　黄褐色粘土　2.5Ｙ6/6
9　黄褐色粘質土　2.5Ｙ5/4
10　オリーブ褐色砂質土　2.5Ｙ6/3
11　暗赤褐色土　5ＹＲ3/2
12　にぶい赤褐色粘質土　2.5ＹＲ4/4

長胴甕堆積土（Ｅ－Ｅ′）

1　褐色土　10ＹＲ4/4
2　赤褐色土　2.5ＹＲ4/6（焼土粒多量）
3　褐灰色砂質土　10ＹＲ4/1（焼土粒・炭化物粒少量）

0　1m（1/20）

図11　17号住居跡（２）

した。ＳＩ17の廃絶後に長胴甕が埋設された可能性も考えられたが，カマド右袖付近から出土した口縁部破片が同図９と接合したため，２個の長胴甕はＳＩ17の共伴遺物の可能性が高い。同図８内には一部焼土化したℓ２が堆積しており（Ｅ－Ｅ′），熱を強く受けた可能性がある。

ＳＩ17の床面からＰ１・２を検出した。Ｐ１の位置は，床面のほぼ中心である。Ｐ１内の堆積土は３層に分けた。ℓ３は概ね柱状に垂下し，土の締まりが非常に弱い。ℓ３の下半は緩やかに窄まり，その下端は丸みを帯びている。ℓ３の計測値は深さ62㎝・最大幅14㎝である。ℓ２は均一の粘質土で，土の締まりは比較的強いが強固ではない。ℓ１は締まりがなく，流入したような砂である。堆積土の状況からＰ１内に柱状の物質をℓ２で固定し，ℓ１部分については鉢状に開放していた可能性がある。Ｐ１の掘形規模は，上端の直径46㎝・底面の直径20㎝・深さ70㎝である。Ｐ１は，堆積土の状況等からロクロピットの可能性もある。

カマドの西隣に位置するＰ２は，カマドの崩落土がＰ２のℓ１上に堆積していたことから，比較的早い段階で埋め戻された可能性が高い。ℓ１は多量の焼土・炭化物を含み，土師器・須恵器の破片が出土した。ℓ１から出土した土師器の長胴甕が，カマド燃焼部で出土した13図２と接合している。ℓ２は粘土塊を含む砂質土である。Ｐ２の平面形は南北61㎝×東西22㎝の楕円を呈し，床面からの深さは16㎝を測る。

遺　　物（図12～14，写真17～20）

ＳＩ17から土師器杯類72点･甕類360点，須恵器杯類22点，土製品２点が出土した。出土地点は，カマド周辺が多い。図12－１はＰ２上の床面で出土したもので，器高が比較的深めの土師器杯である。体部は内湾気味に開き，口唇部でわずかに外方に開く。体部下端～底部全面に回転ヘラケズリが施されており，底部切り離し痕は観察できない。１の内面には黒色処理・ヘラミガキが施されている。１の底径／口径比・器高／口径比は，0.40・0.47である。

図12－２は，同図１と比べて浅い器形の須恵器杯である。ロクロからの切り離しは回転糸切りで，体部下端がわずかに柱状になっている。体部は内湾気味に立ち上がる。器面は黄味を帯びた灰白色で，焼成は比較的良くない。口縁部には重焼痕が認められる。体部外面には墨書が確認されるが，判読できなかった。２の底径／口径比・器高／口径比は，0.43・0.28である。同図３も須恵器杯で，カマド右袖の西側から出土した。ロクロからの切り離しは回転ヘラ切りで，底部外面に軽いナデの再調整が施されている。３の器面も黄味を帯びた灰白色である。３の底径／口径比・器高／口径比は0.49・0.28である。

図12－４～７，図13－３～５は，土師器の小胴甕である。４はカマドの燃焼部から出土したもので，器面の受熱が著しく，図13－２と共に支脚として使用された可能性がある。図12－４は比較的胴長の器形で，口唇部の屈曲が比較的著しい。口唇部を上方に摘み上げている。図13－３の器形は球胴に近く，口唇部の摘み出しはわずかである。底部が遺存する小胴甕は，すべてに回転糸切り痕が観察される。図13－５の切り離し痕は外側に流れており，開き気味に糸を引っ張った可能性がある。底部～胴部の再調整は施されていない資料が大半であるが，図12－５の胴部下端に

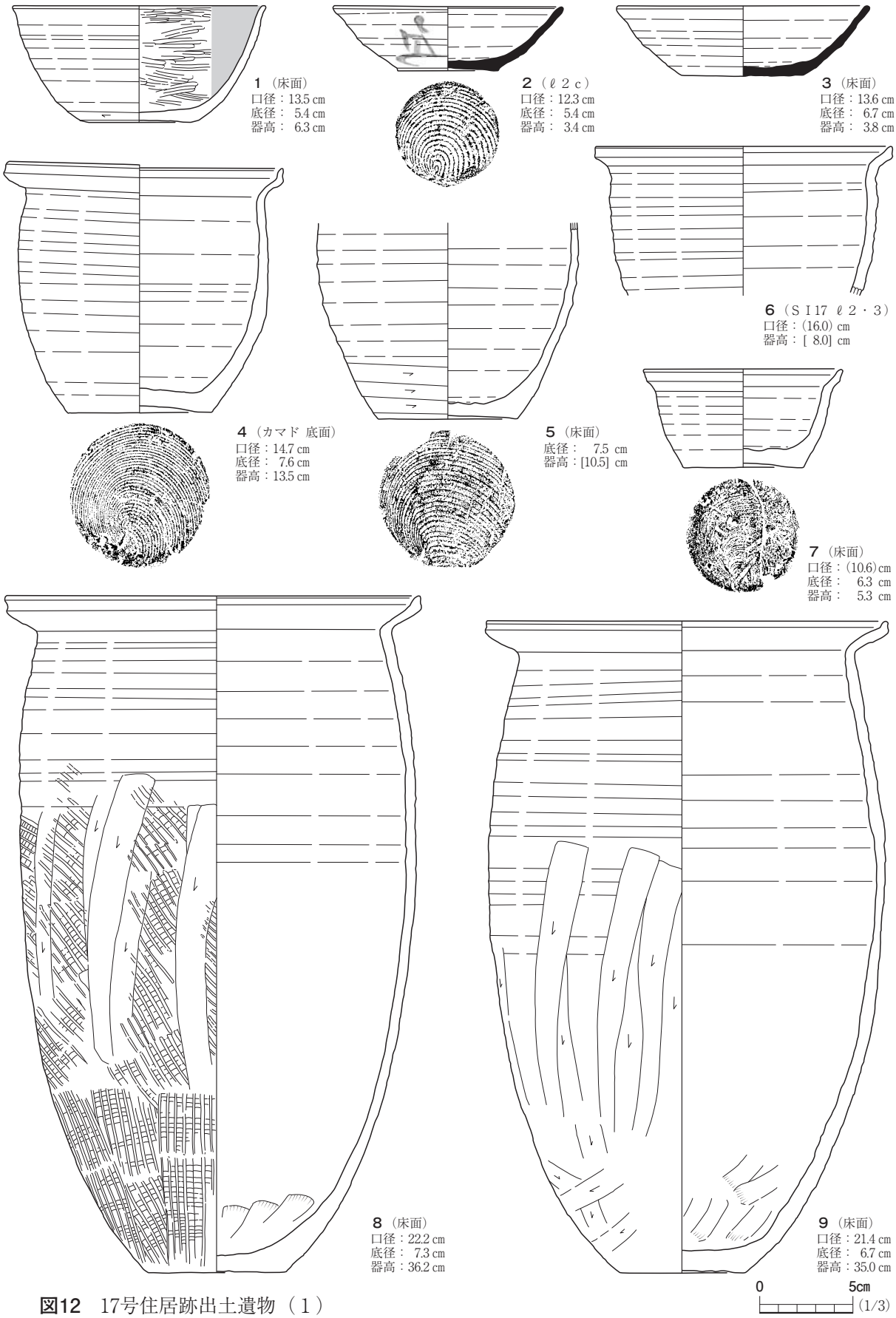


図12　17号住居跡出土遺物（１）

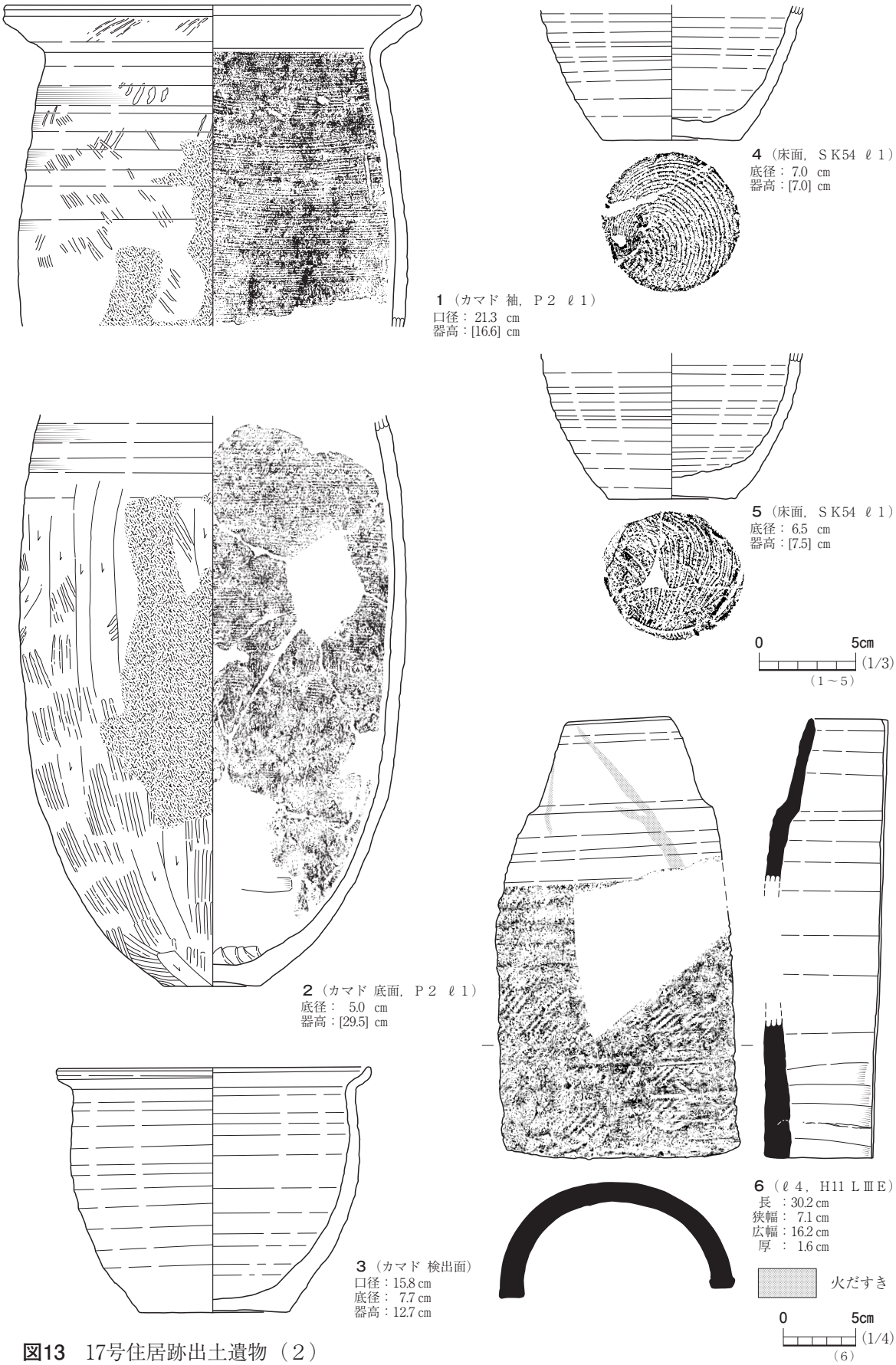


図13　17号住居跡出土遺物（２）

図14　17号住居跡出土遺物（３）

は回転ヘラケズリが施されている。図12－７の口径は器高の丁度２倍である。口縁部は面取りされ，口唇部も上方に摘み上げられている。なお，図13－４・５はＳＫ54の出土遺物と接合している。

図12－８・９は，カマド左袖の北側で，口縁部を合わせた状態で出土した土師器の長胴甕である。両長胴甕の胴部最大径は中心よりもやや上位にある。口縁部の屈曲は顕著で，その口唇部は上方に摘み上げられている。８の胴部はタタキ→ロクロナデ後，中位付近に縦位のヘラケズリが施されている。９はタタキ痕が認められない。

図13－１は，カマド左袖の端部に据えられていた土師器長胴甕の上半部で，Ｐ２のℓ１から出土した小破片と接合している。外面はタタキ後にロクロナデ，内面はカキメが施されている。胴部外面には炭化物の付着が認められる。同図２の底部は図12－４の上に重ねられていたが，Ｐ２のℓ１から出土した破片と接合し，胴部上位まで復元することができた。２の胴部最大径は概ね中位と推測され，底径は比較的小さい。図13－１・２は土器の特徴が類似しており，接合しなかったが同一個体の可能性が高い。他にカマドの煙出し穴付近から出土した土師器の長胴甕が，ＳＫ54の出土資料と接合している(図20－７)。

図13－６は須恵質の土製品で，内・外面とも黄味を帯びた灰白色である。床面直上のℓ４から出土したが，Ｈ11グリッドのＬⅢＥ出土破片と接合している。６の器形は，玉縁付きの丸瓦状である。外面の調整痕は，タタキ→ロクロナデである，外面上部には火だすき痕，下半には非常に細い十字の刻線が確認される。内面はロクロナデ･ナデが施されている。両側縁は面取りされている。内・外面の調整方法は，当該期の長胴甕とほぼ同様である。

図14－１は，カマドの右袖端部に据えられていた平瓦状の土製品で，器面の色調は暗灰～灰色である。凹部には布目・タタキ痕が認められるが，タタキ痕が先行している。両側縁は面取りされるが，部分的に布目痕が残っている。凸部はタタキ痕が認められるが，布目痕は観察できない。以上から，同図１は台を利用して１枚作り風に成形されたと推測される。しかし，器面から粘土切り

出しの糸切り痕は認められず，また複数枚の粘土板を継ぎ足したような痕も観察されることから，いわゆる平瓦の成形とは異なっている。

ま　と　め

ＳＩ17は，南壁にカマドが付設された竪穴住居跡である。カマド両袖の端部には，長胴甕片・平瓦状土製品が据えられている。カマドの北側で出土した図12－８・９も，熱を受けた痕跡等から焚口の天井部付近の部材であった可能性も考えられる。図13－１・２は同一個体と考えられる資料で，カマドの部材･支脚として再利用したが，残りは廃材としてＰ２内に埋めた可能性がある。

床面中央で検出したＰ１は，他に同様の小穴が確認できなかったことから，ＳＩ17の中央で単独に存在したものと推測される。Ｐ１の堆積土の状況を，回転台を支える軸木の埋設痕(抜取痕)とするならば，Ｐ１はロクロピットの可能性が十分考えられる。

なお，ＳＩ17の床面遺物が20ｍ以上離れたＨ10・11グリッドの出土遺物と接合したが，地形から自然発生的な流出の可能性は考えにくく，人為的に土器が移動した可能性が高い。ＳＩ17の時期は，出土遺物から９世紀後半と推測される。　（香　川）

第４節　土　　坑

３次調査で確認した土坑は計14基で，遺構番号はＳＫ48～61である。検出土坑の７基から壁～底面の焼土化が観察され，また土坑の周囲に土師器片・炭化物等の散布が認められた。なお，ＳＫ61は，１次調査におけるＳＩ11(調査Ⅲ区)の精査中，偶然見つかった遺構で，発見当初は住居跡としたが，今回の調査によって土坑に変更した。

48号土　坑　ＳＫ48（図15，写真12）

本遺構はＩ９グリッドに位置し，検出面はＬⅢＣ上面である。ＬⅢＥの範囲確認のためサブトレンチを設定したところ，熱硬化した周壁の一部を確認し，形状から焼成坑と判断して調査を行った。そのため，トレンチの掘り込みを行った遺構の北半部分では旧状が保たれていない。本遺構は，河川に沿って形成された狭長な平坦面から河川側へと緩やかに落ち込む緩斜面上に立地しており，同様の遺構としては北に約４ｍのところにＳＫ50，さらにそこから北に約12ｍのところに１次調査で検出されたＳＫ25が配置されている。

遺構内堆積土は焼土粒や炭化物粒を含み，含有量の違いなどにより３層に分層した。それらは自然堆積とみられ，ℓ２が周壁際に三角堆積した窪みにℓ１が堆積するようである。ℓ２は，東周壁際では熱変した壁面の一部とみられる焼土塊の含有が顕著である。

平面形は隅丸長方形で，規模は上端で長軸約170㎝・短軸約130㎝，下端で長軸約120㎝・短軸約110㎝である。主軸方向はＮ89Ｅ°とほぼ東西方向を示す。周壁は，斜面上方の東周壁では底面から約40㎝を測るが，対辺の西周壁では底面から15㎝ほどの弱い立ち上がりしか認められない。

東周壁は開口部分が崩落するが，底面から20㎝ほどはほぼ直立する。底面は，若干の凹凸があるものの，ほぼ平坦である。西周壁の一部を除いた遺構全体で熱変が認められ，特に東周壁の壁面およびその部分に接する底面では熱硬化が著しく，断ち割った部分では厚さ数㎝にわたっている。また，遺構の北西隅には，遺存する周壁部分を結んだ想定範囲の外側から底面と同様に熱変した面的な広がりが認められるが，サブトレンチの掘り込みにより遺構との関係が判断できなかった。

本遺構からは土師器片３点が出土するものの，細片のため図示できなかった。そのうち２点は杯の口縁部，１点は小型の甕の口縁部とみられる。杯は内面にミガキ調整が施されるが，黒色処理は認められなかった。

本遺構からは出土遺物が殆ど認められないものの，形状から周辺で検出された遺構と同様に土師器焼成坑と推察され，遺構検出面から９世紀末葉以降と考えられる。（廣　川）

49号土　坑　ＳＫ49（図15・19，写真12・20）

Ｈ10グリッドに位置する遺構である。ＳＫ49の立地は緩斜面である。検出面はＬⅢＥ中面である。ＳＫ49と重複する遺構はない。ＳＫ49の西側２ｍにはＳＫ54がある。遺構内堆積土は４層に分けた。ℓ１内には土師器片等が含まれ，ＳＫ49の北西～西部を中心にℓ３上面が焼土化していた。ℓ２は，斜面下方へ流出したように堆積する炭化物層である。ℓ４内から土器は出土していない。

ＳＫ49の平面形は，東西に長い楕円形である。上端の平面規模は，長軸長2.68ｍ・短軸長1.31ｍである。長軸方向はＷ12°Ｓで，立地斜面の等高線とほぼ直交する。掘形断面は，東西・南北とも舟底状を呈する。検出面から掘形底面までの深さは，中央部で26㎝を測る。

ℓ１から，土師器杯類１点，土師器甕・鉢類78点，須恵器杯１点が出土している。出土遺物の大半が細片であるが，図19－１～５を図示した。１は土師器杯で，２次的に強く熱を受けており，内面の黒色処理が殆ど消失している。１の底部外面には１条の線刻が認められる。２は全体の80％が遺存する須恵器杯である。ロクロからの切り離しは回転ヘラ切りで，体部下端～底部全面に手持ちヘラケズリが施されている。２の口縁部には重焼痕が認められる。２の底径／口径比・器高／口径比は，0.52・0.33である。３は土師器鍋で，２次的受熱により器面の劣化が著しい。口縁部は受け口状に内傾している。底部付近にはタタキ後，ケズリの調整痕が認められる。４は土師器長胴甕の胴部下位である。外面には，タタキ痕が顕著に認められる。内面にはタタキメのほか，部分的に布目も認められる。５は土師器長胴甕の口縁部で，内外面にロクロナデが施されている。

ＳＫ49の性格については，ℓ１の状況から土師器焼成関連の遺構と推測される。しかし，掘形底面では，焼土面等の確認はできず土師器を焼成した可能性は低い。ＳＫ49の時期については，出土遺物から９世紀後半と考えられる。（香　川）

50号土　坑　ＳＫ50（図15・19，写真12・20）

本遺構はＩ９グリッドに位置し，検出面はＬⅢＣ上面である。形状から小型の土師器焼成坑とみ

られる。重機でのＬⅢＥ面までの掘削中に確認したため，遺構の周囲を島状に残して精査を行った。遺構の周囲は，河川による炭化物や遺物を含んだ複雑な堆積状況を示しており，遺構はその部分を掘り込んで造られるようである。本遺構の周辺にはいくつかの土師器焼成坑が認められ，どれも調査Ⅱ区東側の平坦部分から河川側へと緩やかに傾斜する緩斜面上に立地しており，約４ｍ南にＳＫ48が隣接し，北に約12ｍ離れて１次調査で検出されたＳＫ25が存在する。また，約４ｍ北にはＳＩ17が検出されている。

遺構内堆積土は２層に分層し，ℓ１がレンズ状に堆積することから自然堆積とみられる。底面上に堆積するℓ２には焼土粒や炭化物を少量含んでいる。

遺構の平面形は隅丸方形を基調とするものの，南周壁は確認できなかった。遺存部分での規模は，上端で長軸約70㎝・短軸約60㎝である。主軸方向はＮ１Ｗ°とほぼ真北方向を示す。周壁は，遺存状態のよい北周壁では底面から約10㎝を測る。底面は平坦であるが，自然地形に沿ってやや傾斜する。ほぼ遺構全体に熱変が認められ，特に底面の北周壁寄りでは熱硬化が顕著である。

遺物は，土師器甕類を中心に破片数で79点が出土した。そのうち杯類は６点ほどであるが，どれも赤焼き土器とみられる。図示したものは，図19－６・７の土師器甕２点である。６は，口縁部片で，口唇部に丸みがあり，やや内湾気味に立ち上がっている。７は，出土状況についても示したロクロ整形の甕で，口唇部がわずかに張り出し，最大胴径が体部上方にあるものである。底部は平底であるが，周縁にはケズリが施され，高台風に仕上げられている。外面には化粧土が認められ，胴部下半はその上を目の粗いタタキが施されている。内面は，胴部上半にはロクロナデが認められ，下半には部分的にヘラナデが施されている。

７の出土状況は，遺構の北西隅に土器の形状に沿って張り出すように置かれており，底面をわずかに掘り窪めて口縁部を下にして倒置されていた。７の器面には煮炊き時のものとみられる煤が付着しており，本遺構での焼成時には使用済のものが据えられていたようである。７と接する底面および周壁部分には熱を受けた痕跡が認められないが，燃焼部側の７の器面では被熱で煤が消失している。６は，７の東側で出土した。

本遺構は，小型の土師器焼成坑と考えられるが，出土遺物から焼成品の判断はできなかった。図示した再利用とみられる土師器甕の役割も不明であるが，その形態的な特徴から９世紀末葉以降のものと推察され，本遺構もほぼ同時期に構築されたものとみられる。（廣　川）

51号土　坑　ＳＫ51（図15・19，写真12）

Ｇ６グリッドに位置する遺構である。ＳＫ51の立地はステップ状に形成された狭小な平坦面で，ＳＫ51の東・西側は急斜面である。ＳＫ51の発見は平成22年度の１次調査時で，トレンチ調査によって遺構の一部を破壊してしまった。遺構検出面はＬⅢコ上面である。ＳＫ51と重複する遺構はない。ＳＫ51に最も近い遺構は，西側約17ｍのＳＧ09である。

遺構内堆積土は４層に分けた。ℓ１は砂層に近く，雨水に伴って流入したような層である。ℓ２・

３は北壁の崩落後に堆積した層である。ℓ４は底面に被る層で，焼土粒・炭化物粒を多量に含む。ℓ１～４の状況から，ＳＫ51は自然に埋没したものと推測される。

ＳＫ51の平面形は，遺存部から南北に長い楕円形であったと考えられる。平面上端の遺存規模は，南北1.87ｍ・東西1.50ｍである。長軸方向はＮ５°Ｅで，ＳＫ51の東側に迫る丘陵斜面の等高線とほぼ平行している。

底面の標高は西高・東低で，東壁から底面中央部まで舟底状に窪んだ後，西壁に向かって約17°の角度で立ち上がる。底面の南北方向はほぼ水平である。検出面から底面までの深さは，中央部で11㎝を測る。底面のほぼ全面が受熱によって焼土化しており，中央部では約５㎝の深さまで赤褐色に熱変していた。北壁の崩落については，ＳＫ51の南東側から浸入した流水が北方向に抜けたものと考えられ，ＳＫ51の北側で沢状に崩れた窪地から土師器・炭化物等が採取された。

ＳＫ51から，土師器杯類160点・甕類93点が出土した。土師器類は２次的受熱が著しく，図化できたのは図19－８～11の杯類４点である。８・９・11が床面直上のℓ４，10が底面から出土した。８～11は器面の劣化が著しく，内面の調整痕が不明瞭である。いずれの杯も胎土に米粒大の石が含まれており，器面に亀裂や石の剝落穴が生じている。９の体部下端は手持ちヘラケズリが施されているが，８・10は無調整と思われる。各杯の口唇部は外方に開き，11は肥厚気味に短く外反している。他に図化しなかったが，ℓ４出土資料から長さ３㎝前後の扁平な焼けた粘土塊を３点確認した。同粘土塊の片面，または両面に稲藁状の圧痕が観察される。

ＳＫ51の性格については，焼土化した底面や出土遺物の状況から土師器焼成坑と推測される。ＳＫ51の操業については出土遺物から９世末葉以降と考えられ，３次調査で確認した遺構の中では比較的新しい時期のものである。（香　川）

52号土　坑　ＳＫ52（図15・20，写真12）

Ｈ10グリッドに位置する遺構である。遺構検出面はＬⅢＦ′上面である。ＳＫ52の南部はトレンチ調査によって破壊してしまった。ＳＫ52と重複する遺構はない。ＳＫ52の北東側約３ｍの地点にＳＫ49がある。

遺構内堆積土は２層に分けた。ℓ１内には微量の焼土粒を含む。ℓ１・２から人為的に埋め戻したような痕跡は確認できなかったことから，ＳＫ52は自然に埋没したものと推測される。

ＳＫ51の平面形は，遺存部の形状から東西に長い楕円形であったと推測される。上端の平面規模は南北が1.40ｍ，東西が遺存長で1.46ｍである。長軸方向はＷ７°Ｓで，立地斜面の等高線とほぼ直交する。壁の形状は曲線的である。検出面から底面までの深さは，東端部で７㎝を測る。底面はほぼ平坦に作られ，約５°の傾斜で西方向に立ち上がる。

ＳＫ52から，土師器杯類28点・甕類10点が出土した。いずれも細片で，図化できたのは図20－１の１点である。１はℓ１から出土した土師器杯である。２次的受熱により，黒色処理の一部が消失している。底部外面はケズリが施され，糸切り痕が殆ど消失している。

ＳＫ52は不明点が多く，その性格は分からない。ＳＫ52の時期については出土遺物などから９世紀後半と考えられる。（香　川）

53号土　坑　ＳＫ53（図16・20，写真12・20）

Ｉ14グリッドに位置する遺構である。ＳＫ53の立地は緩斜面地形の突端部で，ＳＫ53の南西側は急斜面になっている。遺構検出面はＬⅢＦ′上面である。底面の一部が植物によって撹乱を受けていた。ＳＫ53と重複する遺構はない。ＳＫ53の南西側約１ｍの地点にＳＫ58がある。

遺構内堆積土は３層に分けた。ℓ１の土質は砂に近く，雨水等による流入土と思われる。ℓ２・３はレンズ状堆積を示し，いずれも炭化物を含む。ℓ４は焼けた粘土で，底面に貼られた可能性もある。ℓ１～３の状況から，ＳＫ53は自然に埋没したものと考えられる。

ＳＫ53の平面形は，斜面上方側に開く台形である。規模は，長軸長が2.40ｍ，北東壁が2.00ｍ，南西壁が1.45ｍである。長軸方向はＮ49°Ｅで，立地斜面の等高線とほぼ直交する。壁の形状は，南西壁を除いて約60°の角度で直線的に立ち上がる。南西壁は遺存状態が悪く，壁の立ち上がりも曲線的である。検出面から底面までの深さは，最深部の北西壁中央で25㎝を測る。底面は，長軸側が約４°の角度で北東方向に，短軸側が約３°の角度で南東側に傾斜している。壁～底面は熱を受けてにぶい赤褐色に変色し，特にℓ４の粘土部分は明赤褐色に強く焼土化している。

ＳＫ53から，土師器杯・鉢類34点・甕類80点，須恵器甕類15点が出土した。２次的に熱を受け，また細片状態の資料が大半であるが，図20－２～６の５点を図示した。２は全体の90％が遺存する土師器杯である。器形は，体部～口縁部まで内湾気味に開く。体部下端～底部全面に回転ヘラケズリが施され，回転糸切り痕が殆ど消失している。内面のヘラミガキは比較的丁寧で，底部付近は亀甲状に施されている。２の底径／口径比・器高／口径比は，0.44・0.33である。３の土師器杯も体部～口縁部が内湾気味に開く器形である。４・５は土師器鉢であるが，体部下端に回転ヘラケズリを施すなど２の再調整と類似している。６は須恵器甕の胴部破片で，タタキ・アテ具痕が観察される。

なお，ＳＫ53南西側の斜面から，炭化物等に混じって土師器片が多量に出土したが，比較的遺構が希薄な一帯でありＳＫ53から排出された遺物の可能性がある。

ＳＫ53の性格は，底面～壁の焼土化や出土土器の状況などから土師器焼成坑と考えられる。３次調査で検出した同様の土坑の中では最も大型である。ＳＫ53の時期については出土遺物などから９世紀後半と考えられる。（香　川）

54号土　坑　ＳＫ54（図16・20，写真12）

Ｈ10グリッドに位置する遺構である。ＳＫ54は，平成21年度の喜多方市教育委員会による試掘調査において，２号トレンチで確認された遺構である。遺構検出面はＬⅢＥ中面である。ＳＫ54の東・西部は検出作業中に破壊してしまった。ＳＫ59と重複するが，ＳＫ54の方が新しい。ＳＫ54の出土土師器が，北東側約20ｍに位置するＳＩ17の出土資料と接合している。遺構内堆積土は

ℓ１の単層とした。ℓ１内には微量の焼土粒・炭化物と土器を含む。ℓ１の成因は不明である。

ＳＫ54の平面形は，遺存部の形状から東西に長い楕円形であったと推測される。上端の平面規模は南北が1.37ｍ，東西が遺存長で1.00ｍである。長軸方向はＷ１°Ｓで，立地斜面の等高線とほぼ直交する。壁の立ち上がりは直線的である。検出面から底面までの深さは，中央部で10㎝を測る。底面はほぼ水平である。底面は，熱を強く受けて赤褐色に焼土化している。

ＳＫ54から，土師器杯類10点・甕類106点，須恵器杯類３点・甕類４点が出土した。細片状態の資料が大半であるが，図20－７・８の２点を図示した。７は，ＳＩ17の煙出し穴付近から出土した資料と接合した土師器の長胴甕である。底面～胴部中位付近までタタキ痕が明瞭に観察される。なお，ＳＩ17の図13－４・５の小胴甕も，ＳＫ54の出土遺物と接合している。８は須恵器甕の胴部破片であるが焼成は不良で，器面が赤黒色を呈する。

ＳＫ54の性格は，底面の焼土化や出土土器の状況などから土師器焼成坑と考えられる。ＳＫ54の時期については出土遺物の状況から９世紀後半と考えられる。（香　川）

55号土　坑　ＳＫ55（図16，写真12）

Ｉ９グリッドに位置する遺構である。遺構検出面はＬⅢＦ′上面である。ＳＫ55の西部は撹乱を受けている。また南部を破壊してしまい，ＳＫ55の遺存状態は非常に悪い。遺構内堆積土はℓ１の単層としたが，ℓ１の成因は不明である。

ＳＫ55の平面形は不明である。上端の平面規模は，遺存長で東西53㎝・南北24㎝を測る。壁の立ち上りは直線的である。検出面から底面までの深さは，東部で６㎝を測る。底面は，約15°の角度で東方向に傾斜している。北壁が焼土化しているが，底面には及んでいない。

ＳＫ55から遺物は出土していない。ＳＫ55は壁の一部が熱を受けた遺構であるが，破壊が大きくその性格は不明である。また，時期についても不明である。（香　川）

56号土　坑　ＳＫ56（図16，写真13）

Ｉ13グリッドに位置する遺構である。遺構検出面は，調査Ⅲ区のＬⅢｇ相当層上面である。ＳＫ56と重複する遺構はない。ＳＫ56の北側約３ｍの地点にＳＫ53がある。遺構内堆積土はℓ１の単層とした。ℓ１の成因は不明であるが，人為的に埋め戻された可能性もある。

ＳＫ56の平面形は，南北に長い楕円形である。上端の平面規模は，長軸長103㎝・短軸長96㎝である。長軸方向はＮ19°Ｅで，立地斜面の等高線とほぼ平行する。壁の立ち上がりは曲線的である。検出面から掘形底面までの深さは，中央部で20㎝を測る。底面は丸底風で，北方向に傾斜している。底面から５～25㎝の石が多数検出された。石の中には，焼けた石も認められた。なお，ＳＫ56の壁～底面から熱を受けたような痕跡は確認できなかった。

ＳＫ56から遺物は出土していない。ＳＫ56の性格を明らかにすることはできなかったが，焼石はＳＸ04等で確認されており，相互に関連していた可能性もある。ＳＫ56の時期については，出

土遺物がなく不明である。　（香　川）

57号土　坑　ＳＫ57（図16，写真13）

Ｉ８・９グリッドに位置する遺構である。ＳＫ57の立地は，急斜面の裾部である。遺構検出面はＬⅢＦ′上面である。ＳＫ56と重複する遺構はない。ＳＫ57の西側２ｍの地点にＳＧ13がある。

遺構内堆積土は３層に分けた。ℓ１・２は炭化物を含む。各層はレンズ状堆積を呈していることから，ＳＫ57は東斜面からの土砂流入によって自然に埋没した可能性が高い。

ＳＫ57の平面形は，概ね方形である。上端の平面規模は，南北120㎝・東西116㎝である。南北軸の方向は，Ｎ15°Ｅで，立地斜面の等高線とほぼ平行する。壁の立ち上がりは比較的急であり，特に北壁はほぼ直立している。検出面から底面までの深さは，最深部の北壁中央で55㎝を測る。底面は平坦で，わずかに西方向へ傾斜している。

ＳＫ57から遺物は出土していない。ＳＫ57は不明点が多く，その性格は分からない。また，時期についても不明である。　（香　川）

58号土　坑　ＳＫ58（図16，写真13）

Ｉ14グリッドに位置する遺構である。遺構検出面はＬⅢＦ′上面である。ＳＫ58の南西部が消失しているが，比較的急斜面の端部に立地しているため自然崩落の可能性もある。ＳＫ58と重複する遺構はない。ＳＫ58の北東側約１ｍの地点にＳＫ53がある。

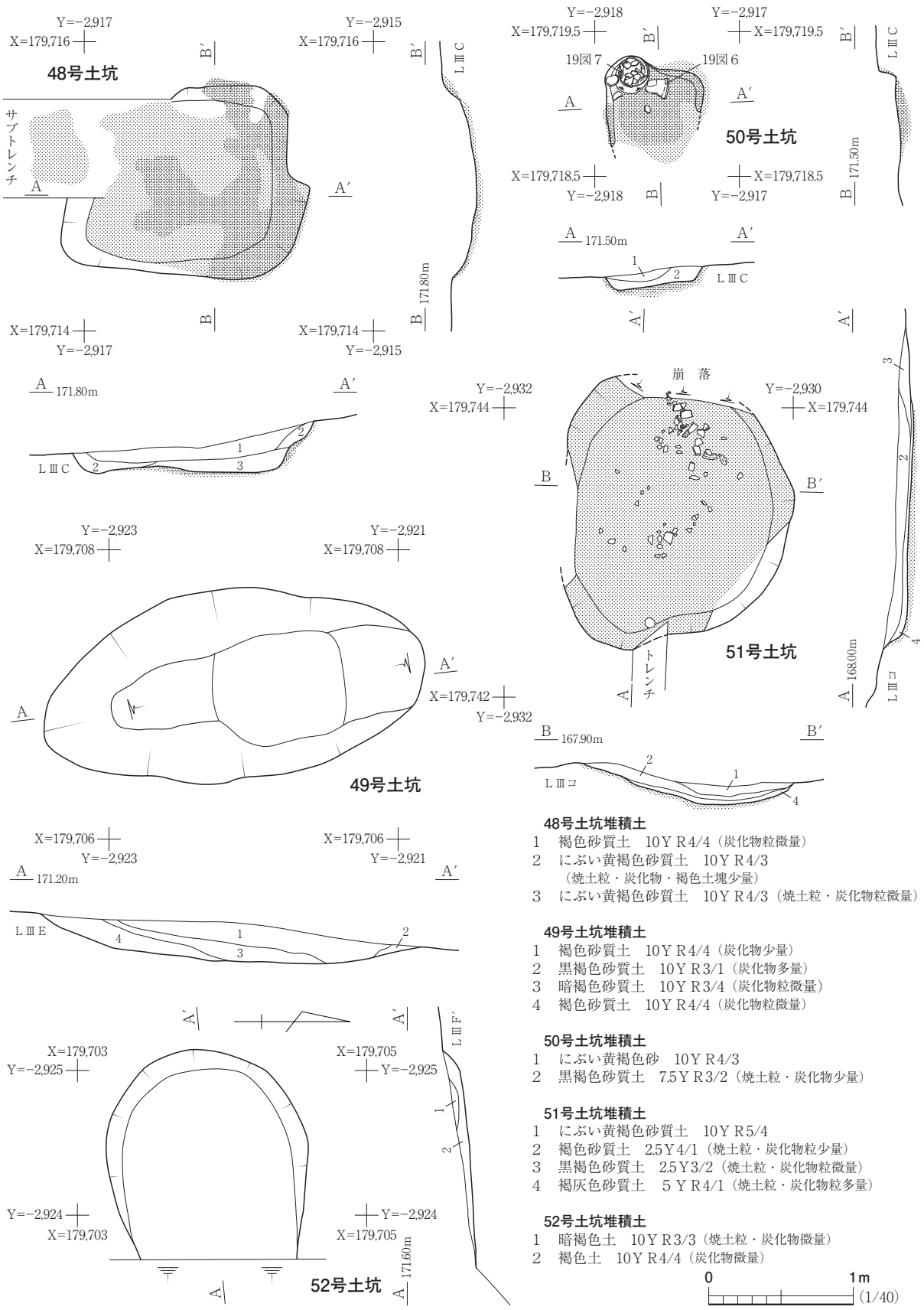
遺構内堆積土は２層に分けた。ℓ１・２はいずれも焼土・炭化物を含むが，含有量はℓ２の方が少ない。ℓ１・２の観察から人為的に埋め戻されたような痕跡は認められず，ＳＫ58は自然に埋没したものと考えられる。

ＳＫ58の平面形は，遺存部の形状から北西方向に長い長方形であったと推測される。上端の平面規模は長軸長が112㎝，短軸側が遺存長で81㎝である。長軸の方向は，Ｗ41°Ｎで，立地斜面の等高線とほぼ平行する。壁の立ち上がりは北東壁が直立に近いが，長軸方向の両壁は緩やかである。検出面から掘形底面までの深さは，最深部の北東壁中央で13㎝を測る。底面は中央部がわずかに窪み，長軸方向の断面形は舟底状を呈している。北東壁～底面の中央は，熱を受けて明赤褐色に焼土化していた。

ＳＫ58から土師器杯類１点・甕類12点が出土したが，いずれも細片のため図化できなかった。ＳＫ58の性格は，壁～底面の焼土化から火が強く焚かれており，近接するＳＫ53と同様の土器焼成関連遺構の可能性がある。ＳＫ58の時期については，出土土器や近接遺構などから９世紀後半頃の可能性がある。　（香　川）

59号土　坑　ＳＫ59（図17，写真13）

Ｈ10グリッドに位置する遺構である。遺構検出面はＬⅢＦ′上面である。ＳＫ57と重複するがＳ



48号土坑堆積土
1　褐色砂質土　10Ｙ Ｒ4/4（炭化物粒微量）
2　にぶい黄褐色砂質土　10Ｙ Ｒ4/3
（焼土粒・炭化物・褐色土塊少量）
3　にぶい黄褐色砂質土　10Ｙ Ｒ4/3（焼土粒・炭化物粒微量）

49号土坑堆積土
1　褐色砂質土　10Ｙ Ｒ4/4（炭化物少量）
2　黒褐色砂質土　10Ｙ Ｒ3/1（炭化物多量）
3　暗褐色砂質土　10Ｙ Ｒ3/4（炭化物粒微量）
4　褐色砂質土　10Ｙ Ｒ4/4（炭化物粒微量）

50号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂　10Ｙ Ｒ4/3
2　黒褐色砂質土　7.5Ｙ Ｒ3/2（焼土粒・炭化物少量）

51号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10Ｙ Ｒ5/4
2　褐色砂質土　2.5Ｙ4/1（焼土粒・炭化物粒少量）
3　黒褐色砂質土　2.5Ｙ3/2（焼土粒・炭化物粒微量）
4　褐灰色砂質土　５Ｙ Ｒ4/1（焼土粒・炭化物粒多量）

52号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3（焼土粒・炭化物微量）
2　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4（炭化物微量）

図15　48～52号土坑

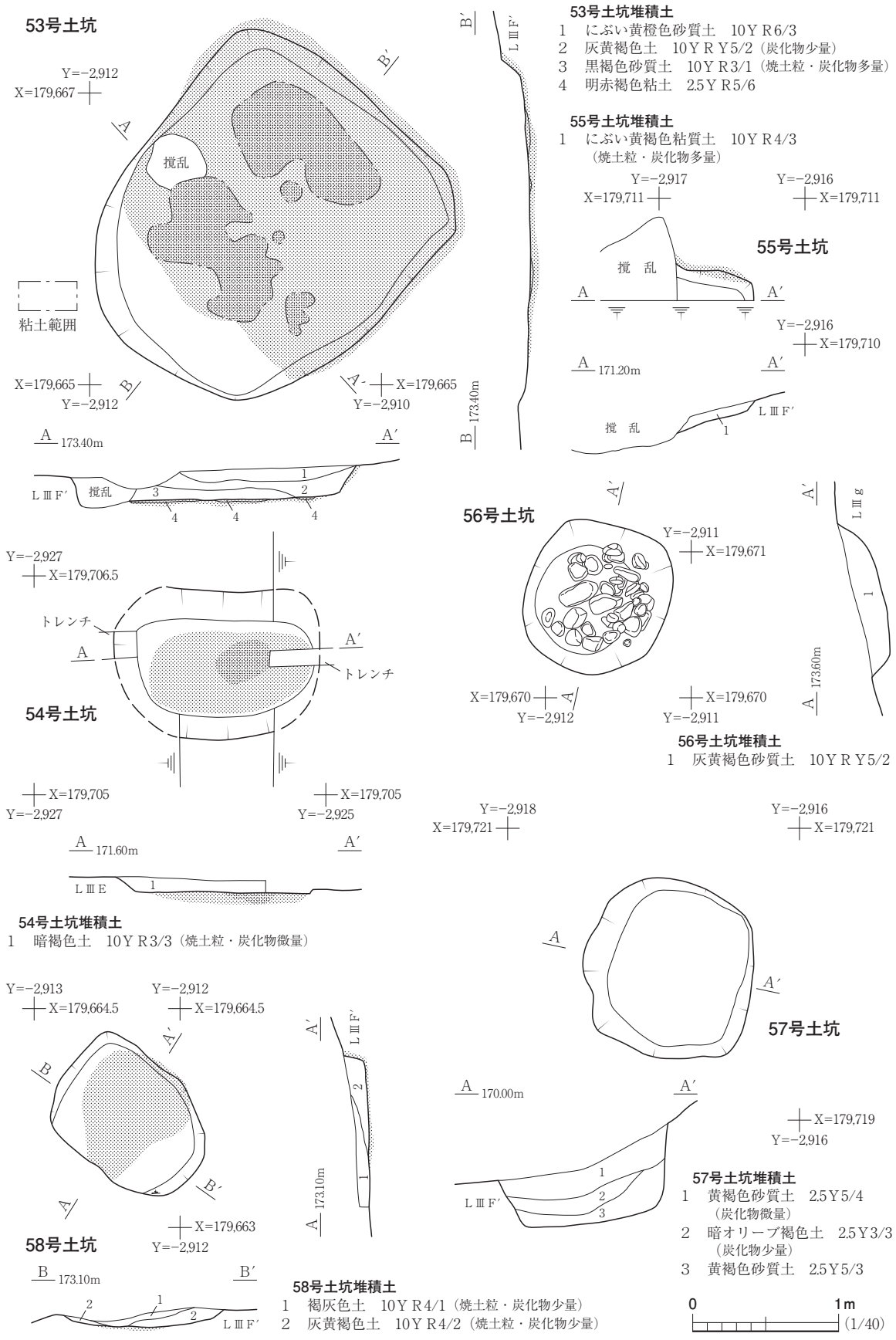

53号土坑
Y=−2,912
X=179,667
A
B′
撹乱
粘土範囲
X=179,665
Y=−2,912
B
A′
X=179,665
Y=−2,910
A
173.40m
A′
L Ⅲ F′
撹乱
1
2
3
4
4
4
B′
L Ⅲ F′
B
173.40m
53号土坑堆積土
1　にぶい黄橙色砂質土　10Ｙ Ｒ6/3
2　灰黄褐色土　10Ｙ Ｒ Ｙ5/2（炭化物少量）
3　黒褐色砂質土　10Ｙ Ｒ3/1（焼土粒・炭化物多量）
4　明赤褐色粘土　2.5Ｙ Ｒ5/6
55号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色粘質土　10Ｙ Ｒ4/3
（焼土粒・炭化物多量）
Y=−2,917
X=179,711
Y=−2,916
X=179,711
55号土坑
撹　乱
A
A′
Y=−2,916
X=179,710
A
171.20m
A′
撹　乱
L Ⅲ F′
1
Y=−2,927
X=179,706.5
トレンチ
A
A′
トレンチ
54号土坑
X=179,705
Y=−2,927
X=179,705
Y=−2,925
A
171.60m
A′
L Ⅲ E
1
54号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3（焼土粒・炭化物微量）
A′
56号土坑
Y=−2,911
X=179,671
X=179,670
Y=−2,912
X=179,670
Y=−2,911
A′
L Ⅲ g
1
A
173.60m
56号土坑堆積土
1　灰黄褐色砂質土　10Ｙ Ｒ Ｙ5/2
Y=−2,918
X=179,721
Y=−2,916
X=179,721
A
A′
57号土坑
A
170.00m
A′
X=179,719
Y=−2,916
1
2
3
L Ⅲ F′
57号土坑堆積土
1　黄褐色砂質土　2.5Ｙ5/4
（炭化物微量）
2　暗オリーブ褐色土　2.5Ｙ3/3
（炭化物少量）
3　黄褐色砂質土　2.5Ｙ5/3
Y=−2,913
X=179,664.5
Y=−2,912
X=179,664.5
A′
B
B′
A
X=179,663
Y=−2,912
58号土坑
B
173.10m
B′
2
1
2
L Ⅲ F′
A′
L Ⅲ F′
2
1
A
173.10m
58号土坑堆積土
1　褐灰色土　10Ｙ Ｒ4/1（焼土粒・炭化物少量）
2　灰黄褐色土　10Ｙ Ｒ4/2（焼土粒・炭化物少量）
0
1m
(1/40)

図16　53～58号土坑

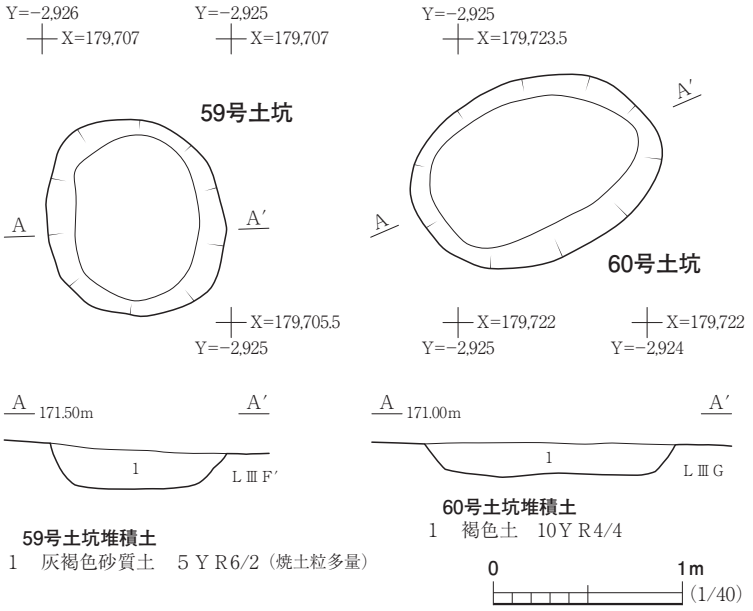


図17　59・60号土坑

Ｋ59の方が古い。ＳＫ59の南東側約1.5ｍの地点にＳＫ52がある。

土坑堆積土はℓ１の単層とした。ℓ１内には焼土粒を多量に含む。ℓ１の観察から人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できなかったことから，ＳＫ59は自然に埋没した可能性がある。

ＳＫ59の平面形は，南北に長い楕円形である。上端の平面規模は，長軸長104㎝・短軸長93㎝である。長軸方向はＮ５°Ｗで，立地斜面の等高線とほぼ平行する。壁の立ち上がりは曲線的で，東西方向の断面形は舟底状を呈する。検出面から底面までの深さは，中央部で20㎝を測る。壁～底面から，熱を受けたような痕跡は確認できなかった。

ＳＫ57から遺物は出土していない。ＳＫ57はℓ１内に焼土粒を含むが，その性格は分からない。また，時期についても不明である。（香　川）

60号土　坑　ＳＫ60（図17，写真13）

Ｈ８グリッドに位置する遺構である。ＳＫ60は平坦面に立地し，その西・東側は斜面地形になっている。遺構検出面はＬⅢＧ上面である。ＳＫ56と重複する遺構はない。ＳＫ57の西側２ｍの地点にはＳＧ13がある。

遺構内堆積土はℓ１の単層とした。ℓ１の観察から，人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できなかった。ＳＫ60の平面形は楕円形である。上端の平面規模は，長軸長132㎝・短軸長95㎝である。長軸の方向は，Ｅ24°Ｎである。壁の立ち上がりは直線的である。検出面から掘形底面までの深さは，中央部で16㎝を測る。底面はほぼ水平である。

ＳＫ60から遺物は出土していない。ＳＫ60は不明点が多く，その性格は分からない。また，時期についても不明である。（香　川）

61号土　坑　ＳＫ61（図18・20・21，写真13・20・21）

Ｊ17グリッドに位置する遺構である。同グリッド付近は，当初，調査区外であったが，ＳＫ61の発見によって新たに調査Ⅱ区の範囲に加えられた箇所である。遺構検出面は，調査Ⅲ区北部の基本土層のＬⅢｂ上面である。ＳＫ61と重複する遺構はない。ＳＫ61の南側約２ｍの地点にＳＩ06・11（調査Ⅲ区）がある。

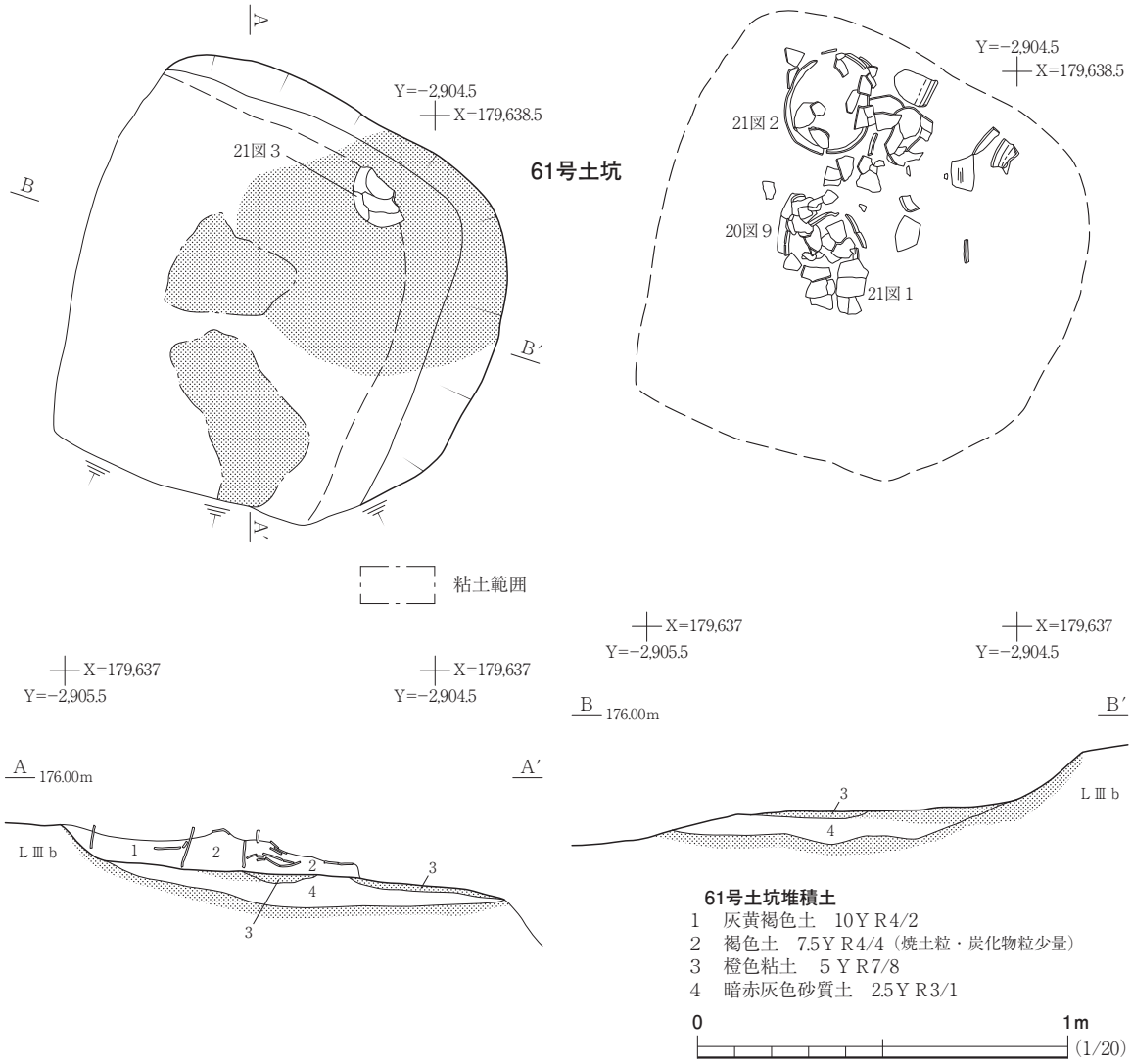


図18　61号土坑

遺構内堆積土は４層に分けた。ℓ１・２は自然堆積土と推測され，いずれも土師器片を含む。図21－２は甕胴部の上半部分で，ℓ４上面に置かれた可能性もある。ℓ３は焼けた粘土で，ℓ４上面に貼られた可能性がある。ℓ４上面が暗赤灰～明赤褐色に熱変しており，同面で強く火が焚かれている。ℓ４は全体的に硬化しており，ℓ４上面で火が焚かれた影響と思われる。ℓ４は，人為的に埋められた整地土の可能性もある。

ＳＫ61の南・西壁は後世の撹乱によって破壊されていたが，遺存部の形状から平面形は方形であった可能性がある。上端規模は，遺存長で東西114㎝・南北110㎝である。南北軸の方向はＮ26°Ｅで，立地斜面の等高線とほぼ平行する。北～東壁の立ち上りは緩やかで，曲線的である。壁面は全体的に熱を受けているが，特に北西部の焼土化が著しい。ℓ４上面は平坦に整地され，南方向へわずかに傾斜している。検出面からℓ４上面までの深さは15㎝を測る。掘形底面はやや凹凸があり，平坦に作られていない。掘形底面は，その全面が明赤褐色に焼土化しており，強く火が焚かれている。検出面から掘形底面までの深さは23㎝を測る。

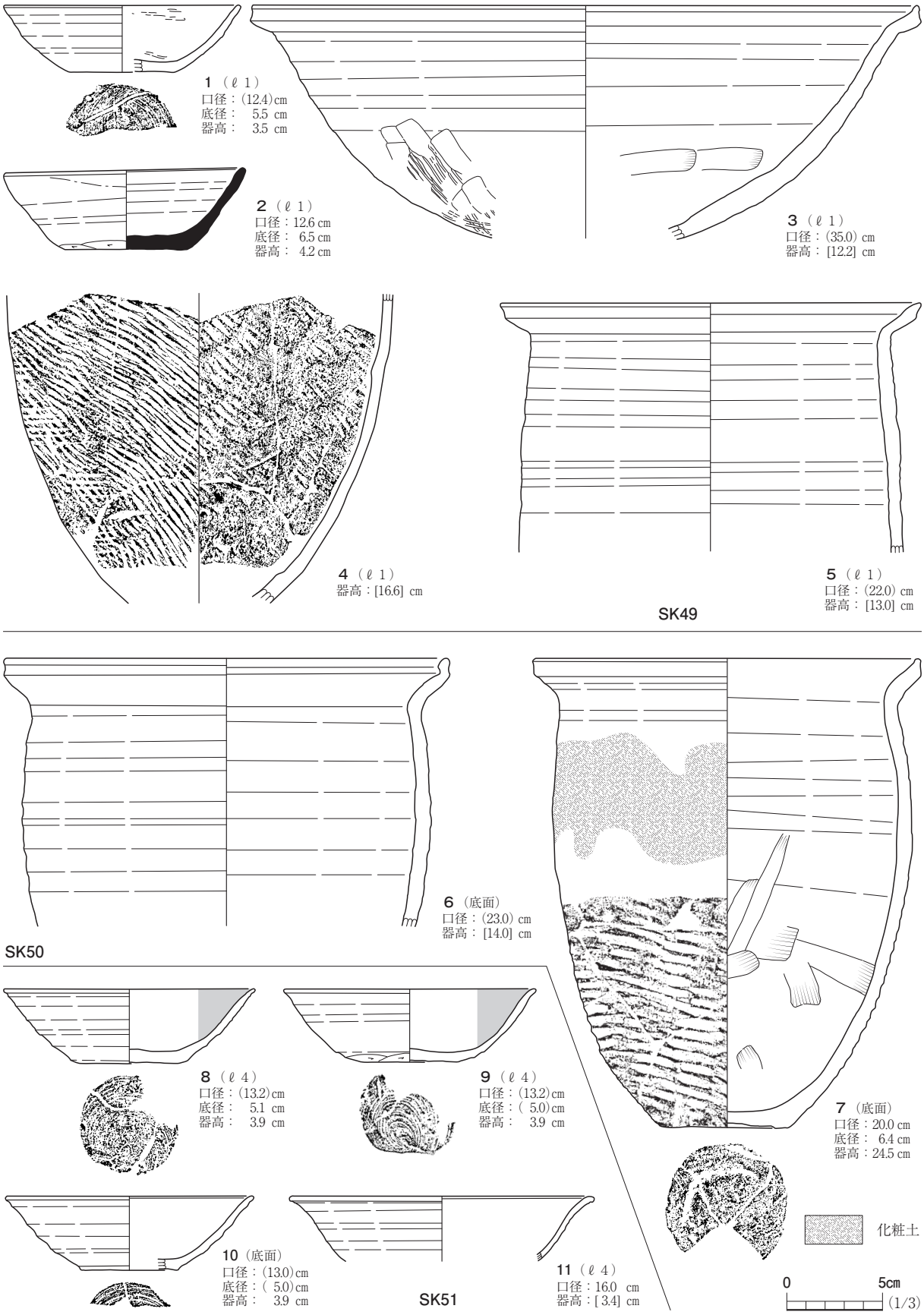

1（ℓ1）
口径：(12.4)cm
底径：　5.5 cm
器高：　3.5 cm
2（ℓ1）
口径：12.6 cm
底径：　6.5 cm
器高：　4.2 cm
3（ℓ1）
口径：(35.0) cm
器高：[12.2] cm
4（ℓ1）
器高：[16.6] cm
5（ℓ1）
口径：(22.0) cm
器高：[13.0] cm
SK49
6（底面）
口径：(23.0) cm
器高：[14.0] cm
SK50
7（底面）
口径：20.0 cm
底径：　6.4 cm
器高：24.5 cm
8（ℓ4）
口径：(13.2)cm
底径：　5.1 cm
器高：　3.9 cm
9（ℓ4）
口径：(13.2)cm
底径：(5.0)cm
器高：　3.9 cm
10（底面）
口径：(13.0)cm
底径：(5.0)cm
器高：　3.9 cm
SK51
11（ℓ4）
口径：16.0 cm
器高：[3.4] cm
化粧土
0
5cm
(1/3)

図19　土坑出土遺物（1）

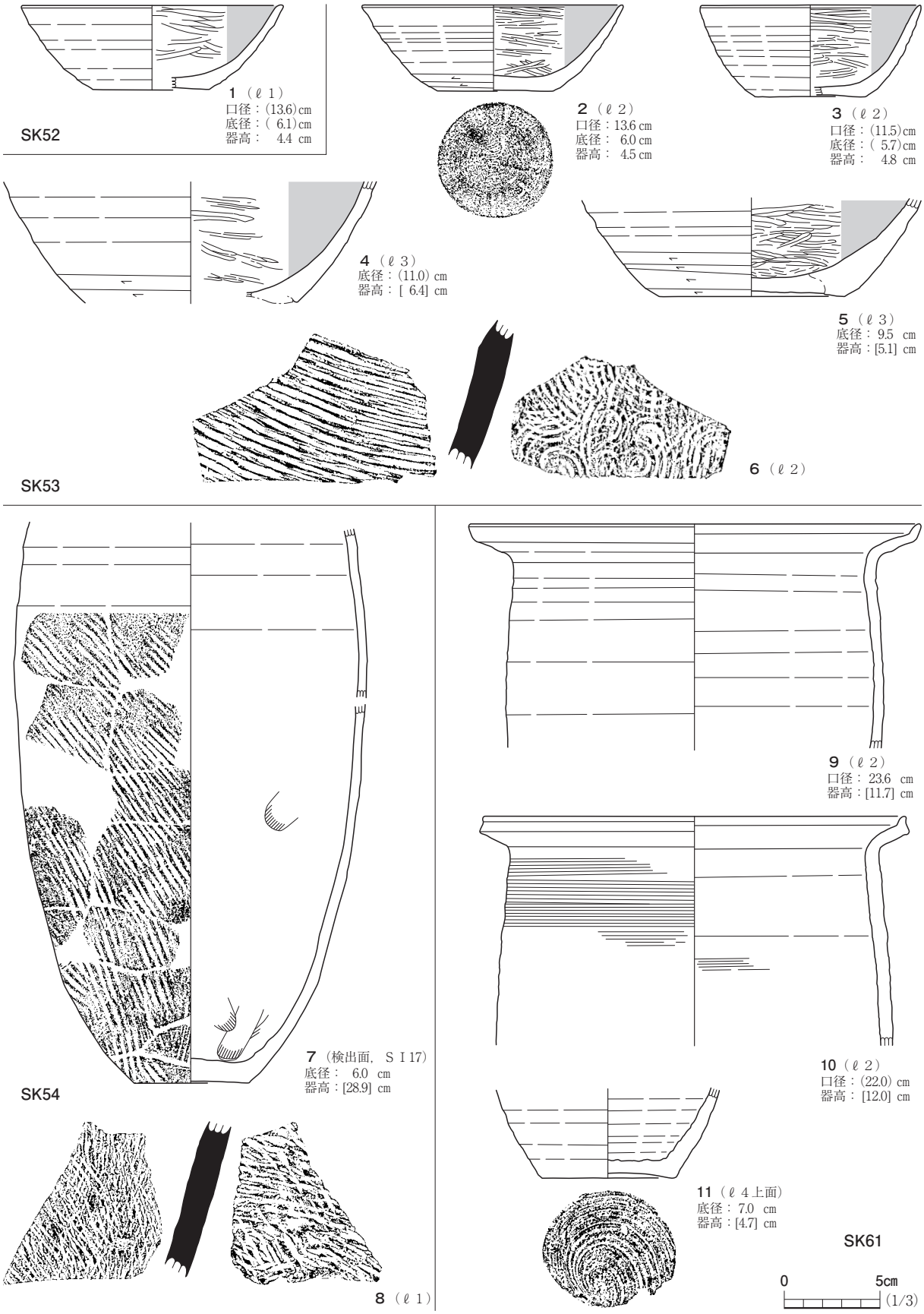

SK52
1（ℓ１）
口径：(13.6)cm
底径：(6.1)cm
器高： 4.4 cm
2（ℓ２）
口径：13.6 cm
底径： 6.0 cm
器高： 4.5 cm
3（ℓ２）
口径：(11.5)cm
底径：(5.7)cm
器高： 4.8 cm
4（ℓ３）
底径：(11.0) cm
器高：[6.4] cm
5（ℓ３）
底径： 9.5 cm
器高：[5.1] cm
SK53
6（ℓ２）
SK54
7（検出面，ＳＩ17）
底径： 6.0 cm
器高：[28.9] cm
8（ℓ１）
9（ℓ２）
口径： 23.6 cm
器高：[11.7] cm
10（ℓ２）
口径：(22.0) cm
器高：[12.0] cm
11（ℓ４上面）
底径： 7.0 cm
器高：[4.7] cm
SK61
0
5cm
(1/3)

図20　土坑出土遺物（２）

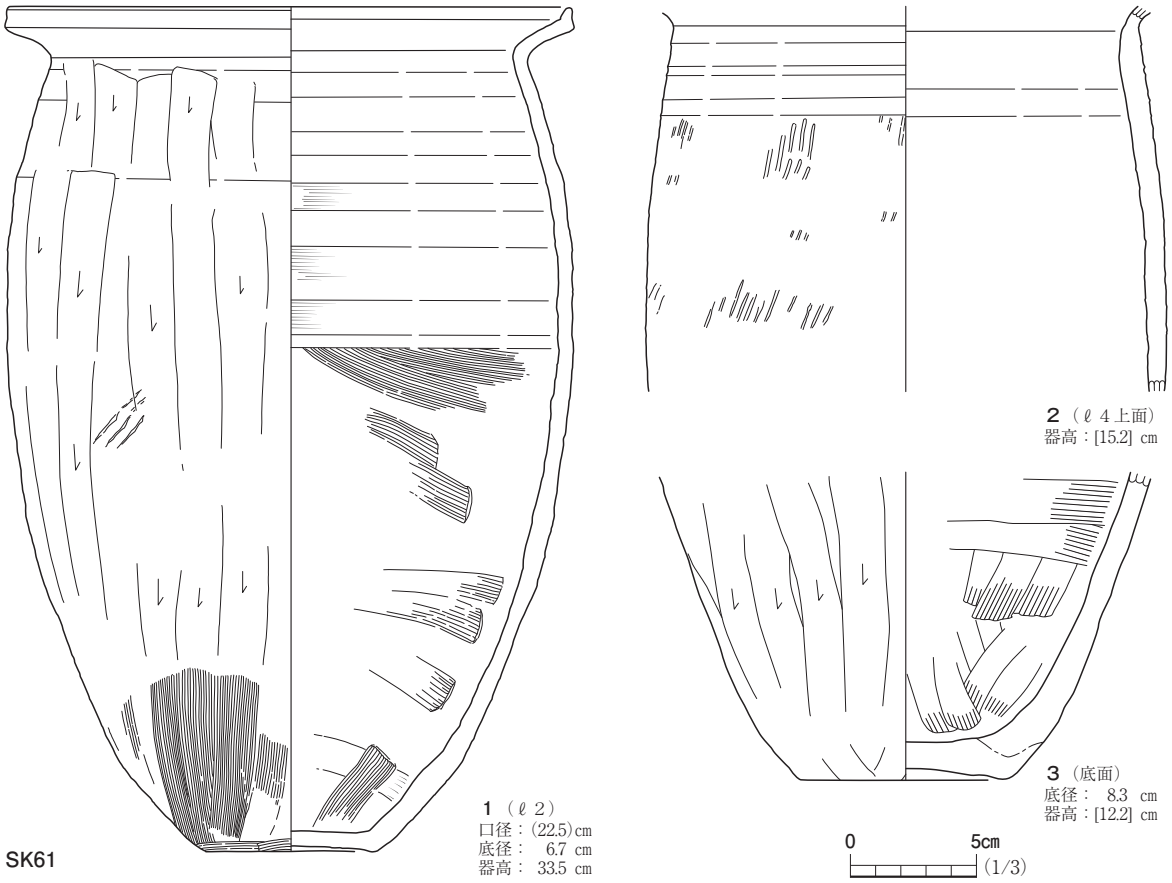


図21　土坑出土遺物（３）

ＳＫ61から土師器杯類30点・甕類404点が出土した。遺出土層位は，ℓ２・ℓ４上面の資料が大半である。出土土器の器面は，２次的に熱を強く受けて脆くなった資料が多い。

図20－９～11・図21－１～３に示したＳＫ61の資料は，すべて土師器甕類である。図20－９は，ＳＫ61の検出面で確認した長胴甕の口縁部破片で，口唇部が上外方に摘み出されている。同図10は口唇部が受け口状に内傾し，胴部にカキメ状のナデが施されている。同図11は小胴甕と推測される底部破片で，再調整は施されておらず底部外面に回転糸切り痕が明瞭に観察される。

図21－１は，ＳＫ61の検出面で確認した長胴甕である。口縁部は面取りされ，口唇部は内傾気味に摘み出されている。胴部の最大径は中位よりもやや上方にくる。胴部外面にタタキ痕がわすかに認められるが殆ど消失しており，ロクロナデ後，頸部から縦位方向にケズリが施されている。１の胴部下端はハケメ状に調整が残る。同図２はℓ４上面に置かれたような状態で出土した胴部上半の資料である。器面の劣化が著しいが，胴部外面にはタタキ・ロクロナデの痕跡が観察される。

ℓ４以下では遺物が殆ど確認できなかったが，図21－３は掘形底面の北東部で出土した資料で，比較的厚手の底部破片である。

ＳＫ61は，出土遺物の状況から土師器焼成坑の可能性があり，焼土化したℓ４上面が最終操業面と考えられる。掘形底面の焼土化については初期の操業面の可能性もあるが，やや起伏があり不明である。ＳＫ61の時期については，出土土器から９世紀後半と考えられる。　　（香　川）

第５節　焼 土 遺 構

３次調査で確認した焼土遺構は計６基で，遺構番号はＳＧ８～13である。焼土遺構の検出面は，ＬⅢＥ面・ＬⅢＦ′面に分かれる。ＬⅢＦ′面で検出した焼土遺構は，斜面崩落土のＬⅢＦに被覆されており，ＬⅢＥ面の焼土遺構よりも明らかに古い。

８号焼土遺構　ＳＧ08（図22，写真14）

Ｉ10グリッドに位置する遺構である。ＳＧ08は，西側に下る斜面に立地する。検出面はＬⅢＥ中面である。ＳＧ08と重複する遺構はない。ＳＧ08の北西側約４ｍの地点にＳＫ49がある。ＳＧ08の遺存状態は悪く，斜面下方側の西部が浸食されている。

ＳＧ08の平面形は，東～南辺の形状から方形，または長方形であった可能性がある。ＳＧ08の規模は，南北84㎝・東西70㎝を測る。受熱は，斜面上方側の南東部が著しい。焼土化は，検出面から最深２㎝まで赤変しているのが観察された。南北軸の方向はＮ２°Ｗで，立地斜面の等高線とほぼ平行する。

ＳＧ08から遺物は出土していない。ＳＧ08の平面形が比較的整っていることから，元は土坑であった可能性があり，ＳＧ08の周囲で検出された土器焼成関連遺構の可能性もある。ＳＧ08の時期は，検出面等から９世紀後半以降と考えられる。（香　川）

９号焼土遺構　ＳＧ09（図22，写真14）

Ｇ８グリッドに位置する遺構である。ＳＧ09は，喜多方市教育委員会が４号トレンチで発見した遺構である。検出面はＬⅢＥ上面である。ＳＧ09と重複する遺構はない。ＳＧ09の南東側約10ｍの地点にＳＫ60がある。

ＳＧ09の上面は薄い炭化物層に覆われ，下部の焼土化は顕著ではない。ＳＧ09の平面形は，東西に長い不定形である。ＳＧ09の規模は東西153㎝・南北69㎝を測り，検出面から最深１㎝まで赤変しているのが観察された。ＳＧ09の東西方向は，立地斜面の等高線に概ね直交する。

ＳＧ09から土師器の細片が３点出土したが，図化できなかった。ＳＧ09は不明点が多く，その性格は分からない。ＳＧ09の時期は，検出面等から９世紀後半以降と考えられる。（香　川）

10号焼土遺構　ＳＧ10（図22，写真14）

Ｈ８グリッドに位置する遺構である。ＳＧ10は，東側に下る斜面に立地する。検出面はＬⅢＦ′中面である。ＳＧ10と重複する遺構はない。ＳＧ10の南側約３ｍの地点にＳＧ13がある。

ＳＧ10の平面形は東西に長い不定形で，西部に焼けた小石が焼土面に乗る。ＳＧ10の規模は東西108㎝・南北58㎝を測り，検出面から最深２㎝まで赤変しているのが観察された。ＳＧ10の東

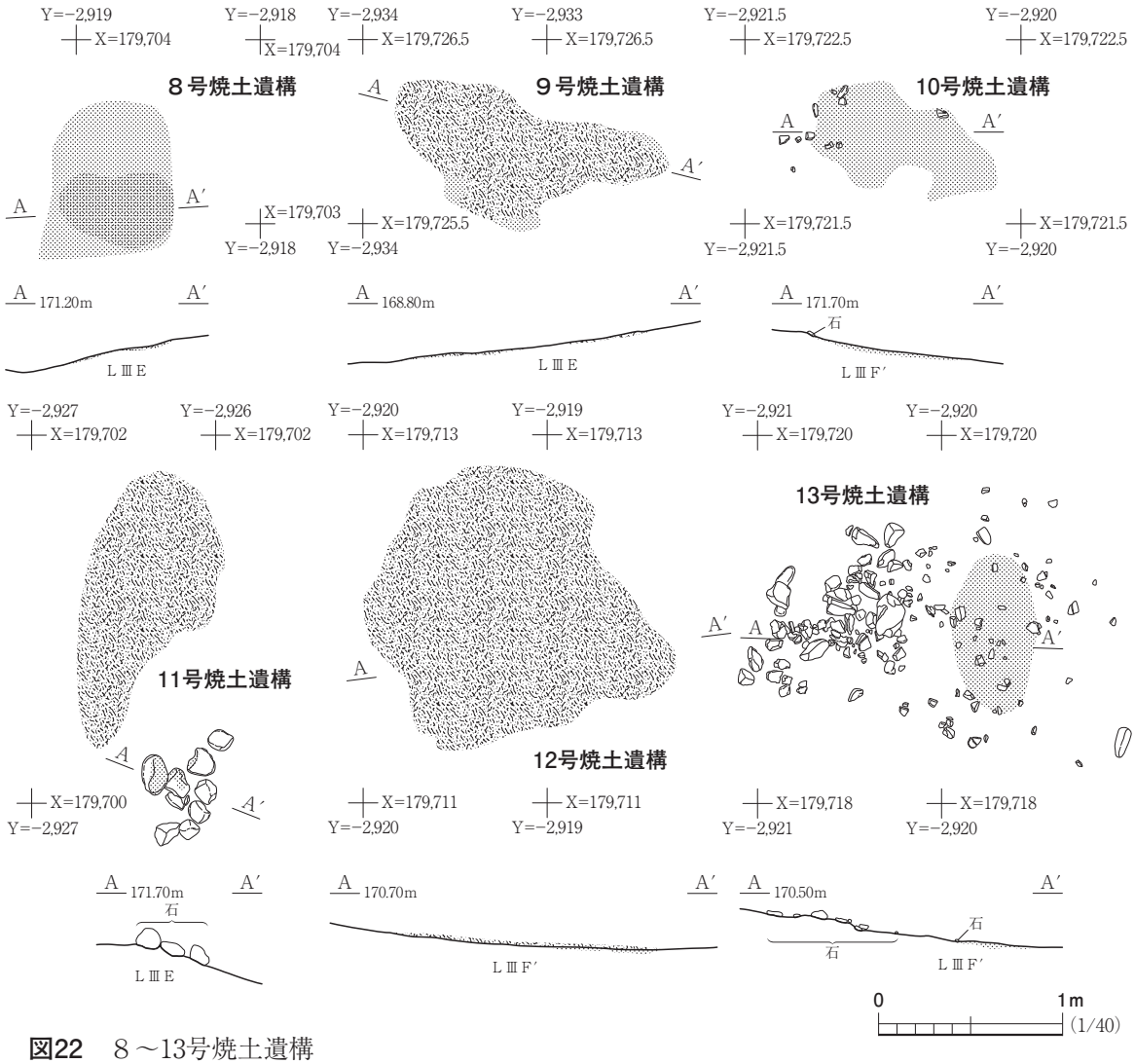


図22　８～13号焼土遺構

西方向は，立地斜面の等高線に概ね直交する。

ＳＧ10から遺物は出土していない。ＳＧ09は不明点が多く，その性格は分からない。ＳＧ10の時期は，検出面から奈良時代以前の可能性がある。（香　川）

11号焼土遺構　ＳＧ11（図22・23，写真14・21）

Ｈ10グリッドに位置する遺構である。検出面はＬⅢＥ上面である。ＳＧ11と重複する遺構はない。ＳＧ11の北東側約３ｍの地点にＳＫ52がある。

ＳＧ11は楕円状の焼土面で，南東側から焼け石が検出された。焼土面の受熱は弱く，薄い炭化物・焼土層に被覆されていた。焼土面の規模は，東西154㎝・南北72㎝である。焼土面の東西方向は，立地斜面の等高線に概ね平行する。焼け石の長さは約10～20㎝で，計10個確認された。焼け石とＳＧ11の関係は不明である。

ＳＧ11から土師器杯類３点・甕類４点が炭化物等に混じって出土した。図23－１は，器形が深めの土師器杯である。体部下端～底部全面に回転ヘラケズリが施されている。体部立ち上がりは，

口縁部まで内湾気味に開く。内面には黒色処理・ヘラミガキが施され，底部のヘラミガキは放射状である。ＳＧ11は不明点が多くその性格は分からないが，土師器生産に関連した可能性がある。ＳＧ11の時期は，出土土器から９世紀後半と考えられる。　（香　川）

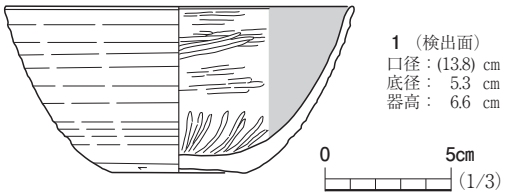


図23　11号焼土遺構出土遺物

12号焼土遺構　ＳＧ12（図22，写真14）

Ｉ９グリッドに位置する遺構である。ＳＧ12は，東西断面が弧状に窪む地形の最深部に立地する。検出面はＬⅢＦ′上面である。ＳＧ12と重複する遺構はない。ＳＧ12の北側約６ｍの地点にＳＧ13がある。ＳＧ12の上面は薄い炭化物層に覆われ，下部の焼土化は顕著でない。ＳＧ12の平面形は不定形で，その規模は東西165㎝・南北150㎝である。

ＳＧ12から遺物は出土しなかった。ＳＧ12は不明点が多く，その性格は分からない。ＳＧ12の時期は，検出面等から奈良時代以前の可能性がある。　（香　川）

13号焼土遺構　ＳＧ13（図22，写真14）

Ｈ・Ｉ９グリッドに位置する遺構である。ＳＧ13は，東西断面が舟底状に窪む地形の西側斜面～最深部に立地する。斜面崩落土のＬⅢＦを除去し，さらに掘り下げたＬⅢＦ′中面でＳＧ13を検出した。ＳＧ13と重複する遺構はない。ＳＧ13の北側約３ｍの地点にＳＧ10がある。

ＳＧ13は，地形の最深部に楕円状の焼土面，西側斜面に焼け石の集中が認められ，地形的にほぼ連続していることから同一の遺構と考えられる。楕円状の焼土面の規模は南北86㎝・東西47㎝で，その長軸方向はＮ３°Ｗである。

ＳＧ13から遺物は出土しなかった。ＳＧ13で石が焼かれた理由は分からない。ＳＧ13の時期については，検出面等から奈良時代以前の可能性がある。　（香　川）

第６節　特 殊 遺 構

本節のＳＸ04は焼け石・焼土面で構成され，前節のＳＧ13にも類似する遺構である。しかし，ＳＸ04の規模が大きく，また(新)・(旧)の時間差が認められたことから特殊遺構として一括した。ＳＸ04はＨ12グリッドに位置し，東西断面が舟底状に窪む地形の西側斜面～最深部に立地する。同グリッド付近では斜面崩落土のＬⅢＦは観察されず，ＬⅢＥ直下にＬⅢＦ′が堆積する。

４号特殊遺構（新）　ＳＸ04（新）

遺　　構（図24，写真15・16）

遺構検出状況は，ＬⅢＦ′中面で石集中地点(礫群１～４)を確認した。礫群１は，最も西側の標

礫群１
礫群２
礫群３
礫群４
４号特殊遺構（新）
４号特殊遺構（旧）
25図１
X=179.679
Y=−2.927
X=179.682
Y=−2.927
Y=−2.924
X=179.679
B
B′
C
C′
D
D′
A
A′
170.90m
170.80m
石
ＬⅢＦ′
（旧）
（新）
１
４号特殊遺構堆積土
１　にぶい黄褐色砂質土　10ＹＲ4/3（焼土粒微量・炭化物やや多量）
0
1m
(1/20)

図24　４号特殊遺構（新）

高が高い地点に位置している。比較的大形の石が集まり，最も大きい石で長さ15㎝を測る。石の間隔は比較的疎らである。殆どの石の表面が風化している。また爆ぜたように割れた石も見られ，強く熱を受けたと考えられる。礫群１の周囲には消し炭状の木炭や焼土の散布が認められた。礫群１の広がりは東西約110㎝・南北約80㎝で，石が西方向へ流れたような状況である。なお，礫群１はＳＸ04(旧)に属する可能性もある。

礫群２は，礫群１から東側へ約50㎝離れている。礫群２の石は比較的小形で，長さ５㎝程度の石が最も多い。石の間隔は，礫群１よりも密である。礫群２の石も熱を受けているのが観察され，周囲には炭化物・焼土が散布していた。礫群２の広がりは，直径70㎝程度の円内に概ね納まる。

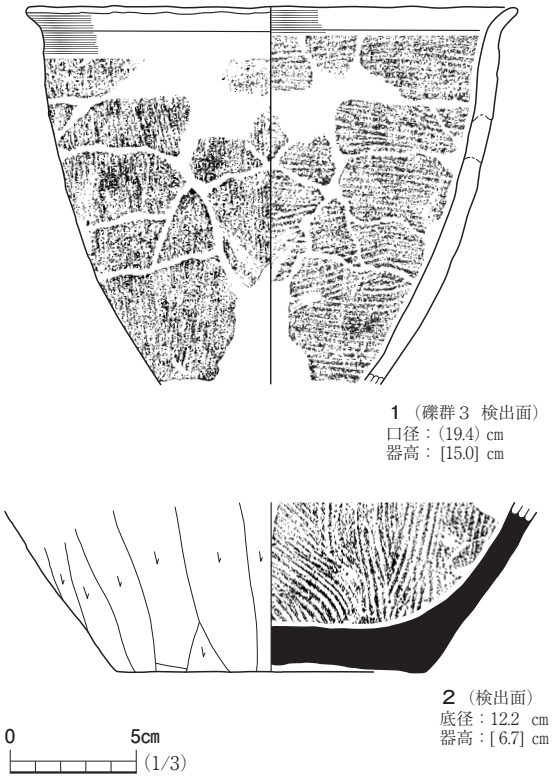


図25　４号特殊遺構（新）出土土器

礫群３は最も東側に位置し，傾斜が最も緩やかとなる舟底状地形の最深部付近に立地する。西側の礫群２との間隔は約70㎝である。礫群３の石は，長さ10㎝前後の石の隙間に３㎝前後の石が入り込んだように集積し，礫群の中では石の間隔が最も密である。また，受熱による石の風化が最も著しく，石の隙間に多量の炭化物・焼土が堆積していた。このことから礫群３の上でも火が焚かれ，また礫群３の石の殆どが原位置を保っている可能性がある。礫群３の広がりは，直径80㎝程度の円内に概ね納まる。

礫群４は，礫群２・３の北側に位置する。礫群４の広がりは東西約180㎝・南北約40㎝で，西方向に石が流れている。なお，礫群２・４の約４㎝下で，ＳＸ04(旧)を確認した(Ａ－Ａ′)。ℓ１は人為堆積土の可能性があり，ＳＸ04(旧)を埋めた後にＳＸ04(新)が営まれた可能性がある。

遺　　物（図25，写真21）

礫群３の南隣で，図25－１の土師器が出土した。同図１の器形は底部が失われているが小甕形で，内湾気味の胴部から口縁部が短く外反している。器面は２次的に熱を受けた可能性があり，脆く劣化している。胴部はハケメ調整で，外面が縦位，内面が横位に施されている。口縁部の内外に横ナデが施されている。同図２は，礫群２の南側で出土した須恵器甕の底部破片である。２の焼成は比較的悪く，器面の色調は赤灰色である。調整は，外面が縦位のケズリ，内面がハケメ状工具によるナデである。

ま　と　め

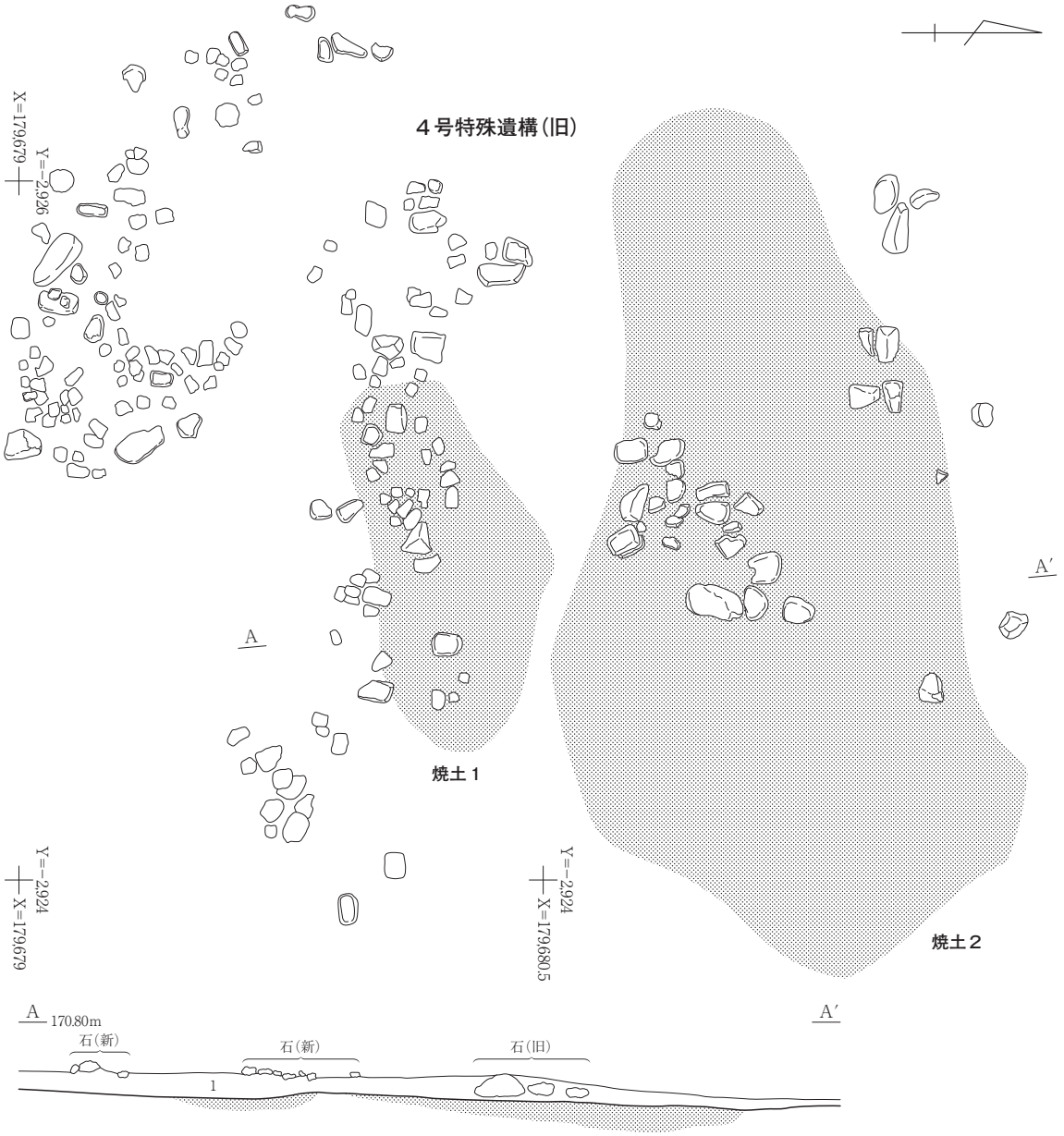
ＳＸ04(新)は，緩やかな斜面地形で焼け石の集積が確認された遺構である。焼け石の分布から礫群１～４に分けたが，原位置が保存されているのは礫群３のみの可能性がある。礫群３の状況か

ら石の上でも火が焚かれた可能性が高いが，その目的は分からない。礫群３の時期は，出土遺物や放射性炭素年代等から古墳～奈良時代の可能性がある。　（香　川）

４号特殊遺構（旧）　ＳＸ04（旧）

遺　　構（図26・27，写真16）

ＳＸ04(旧)は，ＳＸ04(新)の約４㎝下で検出された。ＳＸ04(旧)上には，炭化物を多量に含むℓ１(Ａ－Ａ′)が堆積する。ℓ１は人為堆積土の可能性があり，ＳＸ04(旧)は埋めて廃棄された可能性がある。



４号特殊遺構堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10ＹＲ4/3（焼土粒微量・炭化物やや多量）

図26　４号特殊遺構（旧）〔１〕

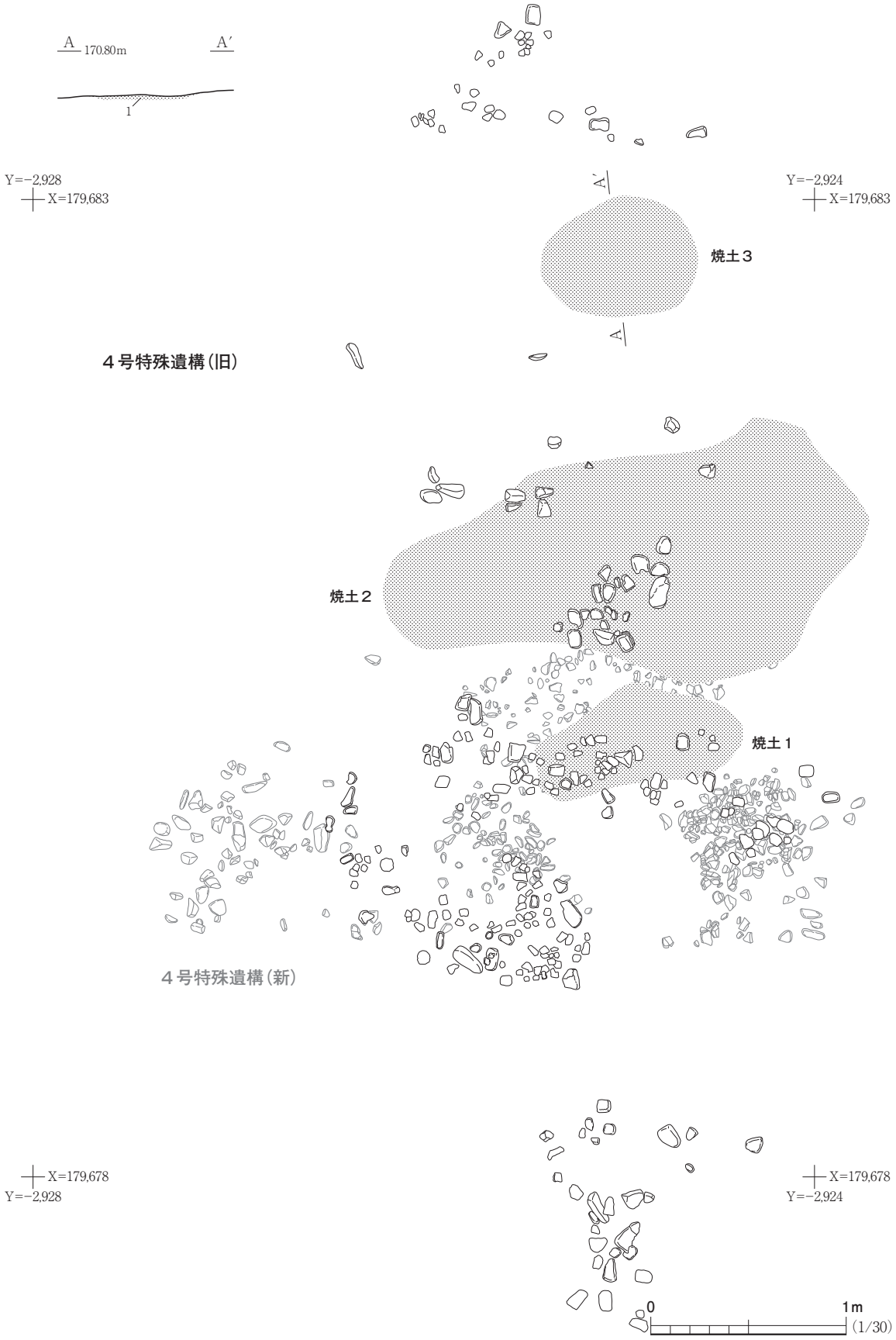


図27　４号特殊遺構（旧）〔２〕

ＳＸ04(旧)の石は，ℓ１を挟んで礫群３の南隣下と礫群４の北・南隣下に位置するものが多く，ＳＸ04(新)の石と上下で重なるものは少ない。ＳＸ04(旧)の石も熱を受けており，石表面の劣化が著しい。ＳＸ04(旧)の石は比較的大形で，ＳＸ04(新)の礫群１に類似する。

ＳＸ04(旧)において，石の下から３基の焼土面(焼土１～３)を検出した。焼土１・２は隣接するが，南北方向に断割りした各焼土面の断面状況(Ａ－Ａ′)から時間差があった可能性がある。焼土２は，約７㎝の深さまで赤褐色に熱変していた。焼土３は，焼土２から北側へ約70㎝離れている。焼土１・２の平面形は東西に長く，その長軸方向は概ね立地斜面の等高線と直行する。焼土３の平面形は，東西に長い楕円形である。各焼土面の規模は，焼土１が東西107㎝・南北52㎝，焼土２が東西252㎝・南北108㎝，焼土３が東西80㎝・南北61㎝である。

なお，ＳＸ04(旧)では，ℓ１を含め遺物を確認することができなかった。

ま　と　め

ＳＸ04(旧)は，石の下から比較的大形の焼土面を確認した。

各焼土面の受熱は顕著で，事前に火が強く焚かれた可能性がある。ＳＸ04(旧)は堆積土の状況から埋められたと考えられ，同様のＳＸ04(新)が継続する。このことから，ＳＸ04(新)・(旧)は近接した時期が考えられる。なお，ＳＸ04(新)・(旧)の性格は祭祀に関連した遺構の可能性もあるが，出土遺物等に乏しくその性格は不明である。　(香　川)

第７節　遺構外出土遺物

今回の３次調査において，遺構外から土師器類4,897点・須恵器類219点が出土し，その大半が平安時代に位置付けられる土器である。出土層位の内訳ではＬⅢＥが最も多く，土師器類4,078点・須恵器類184点である。ＬⅢＥから出土した土器類の内訳は，土師器杯類764点・甕類3,301点・その他13点，須恵器杯類112点・甕類66点・その他６点である。須恵器類のその他には，ＳＩ17出土資料と接合したＨ11グリッド出土の丸瓦状土製品が含まれる。ＬⅢＥから出土した土器類の出土地点は調査Ⅱ区中央部のＨ・Ｉ８～12グリッドが中心で，ＬⅢＥ全体の約84％が同グリッドから出土している。

土　師　器（図28・29－１～４，写真21・22）

図28－１～５は杯類である。１はＬⅡｃ相当層から出土した資料で，全体の約80％が遺存する。器形は口縁部まで内湾気味に開き，体部下端～底部全面に回転ヘラケズリが施されている。１の底径／口径比・器高／口径比は0.44・0.29である。２はＳＫ61に近接した地点のＬⅢＥ相当層から出土した資料で，全体の85％が遺存する。内面に施された黒色処理は２次的に熱を受けて，殆ど消失している。２の底径／口径比・器高／口径比は0.43・0.33である。３は，全体の約70％が遺存する土師質の杯である。底部の状況から回転ヘラ切りの可能性があるが，ケズリ等の再調整によって

切り離し痕を観察することができなかった。３の底径／口径比・器高／口径比は0.50・0.39である。４・５は，体部下端～底部外周に回転ヘラケズリが施されている。図28－６は，ＳＩ17の北東側で出土した鉢である。２次的に熱を強く受けたらしく，器面が著しく劣化している。

図28－７は全体の約80％が遺存する長胴甕であるが，細片状態で散らばっていたものが接合した資料である。７の器面は劣化しており，２次的に熱を受けた可能性がある。胴部の最大径は，ほぼ中央で測る。胴部上半にロクロナデ，下半に縦位のヘラケズリが施されているが，タタキメの痕跡が比較的器面全体に残る。底部外面はケズリが施され，わずかであるが凹状に窪んでいる。口縁部は面取りされ，その口唇部は受け口状に内傾している。同図10・11は，長胴甕の底部破片である。10は凹状に窪み，同図７の底部と類似する。11は丸みを帯びた平底の資料で，その底径は比較的小さい。

図28－１は正立の状態から押し潰れたような状態で出土した小胴甕で，全体の80％が遺存する。１の出土状況から遺構に伴う遺物の可能性が考えられたが，周囲から関連遺構を確認することはできなかった。１の器面は非常に劣化しており，強く熱を受けたようである。１の器形は球胴に近く，内外面にカキメ状のロクロナデが施されている。口縁部は短く外傾し，その端部は面取りされている。底部外面はケズリが施され，ロクロからの切り離し痕は観察できなかった。同図９の小胴甕は，８よりも胴長の器形である。底部には回転糸切り痕が観察される。口縁部はやや丸みを帯びるが面取りされ，口唇部が上外方に摘み出されている。図29－３・４も小胴甕の胴部～底部資料で，底部外面に回転糸切り痕が明瞭に観察される。図28－12は甕口縁部の破片資料と思われ，口縁部が屈曲し，その端部が面取りされている。内面は黒色処理・ヘラミガキが施され，同調整は面取りされた口縁端部にまで及んでいる。

図29－１は，ＳＫ51の北側で出土した土器である。小破片のため全体形は不明であるが，長胴器形の可能性もある。口縁部がわずかに外傾し，口唇部が横位に突き出ている。１の外面はロクロナデ後，上・下方向にケズリを施している。

図29－２は，甑と考えられる土器である。底部はハ状に開き，その端部は面取りされている。外面はタタキメ・ロクロナデが観察される。内面の調整は概ね横位方向のナデが施されている。

須　恵　器（図29－５～12・図30，写真22・23）

図29－５～10は杯である。５は全体の約90％が遺存する。比較的小形の杯であるが，器厚が厚めである。部外面には回転ヘラ切り痕が観察され，軽いナデが施されている。体部は内湾気味に開き，口縁部外面には重焼痕が認められる。５の底径／口径比・器高／口径比は0.55・0.30である。９も５と同様の杯である。６は器厚が比較的薄めの杯で，ロクロからの切り離し痕は回転糸切りである。２方向の糸切り痕が観察され，粘土の貼り付けも認められることから，ロクロからの切り離しに一度失敗し，再度修復して回転糸切りを行ったと思われる。７の底部にも回転糸切り痕が観察される。８は胎土に多量の砂粒を含む。器面の色調は浅黄橙の酸化色であるが，焼成は須恵質のように堅緻である。体部下端～底部前面に回転ヘラケズリが施されている。10は深めの杯で，ロクロからの

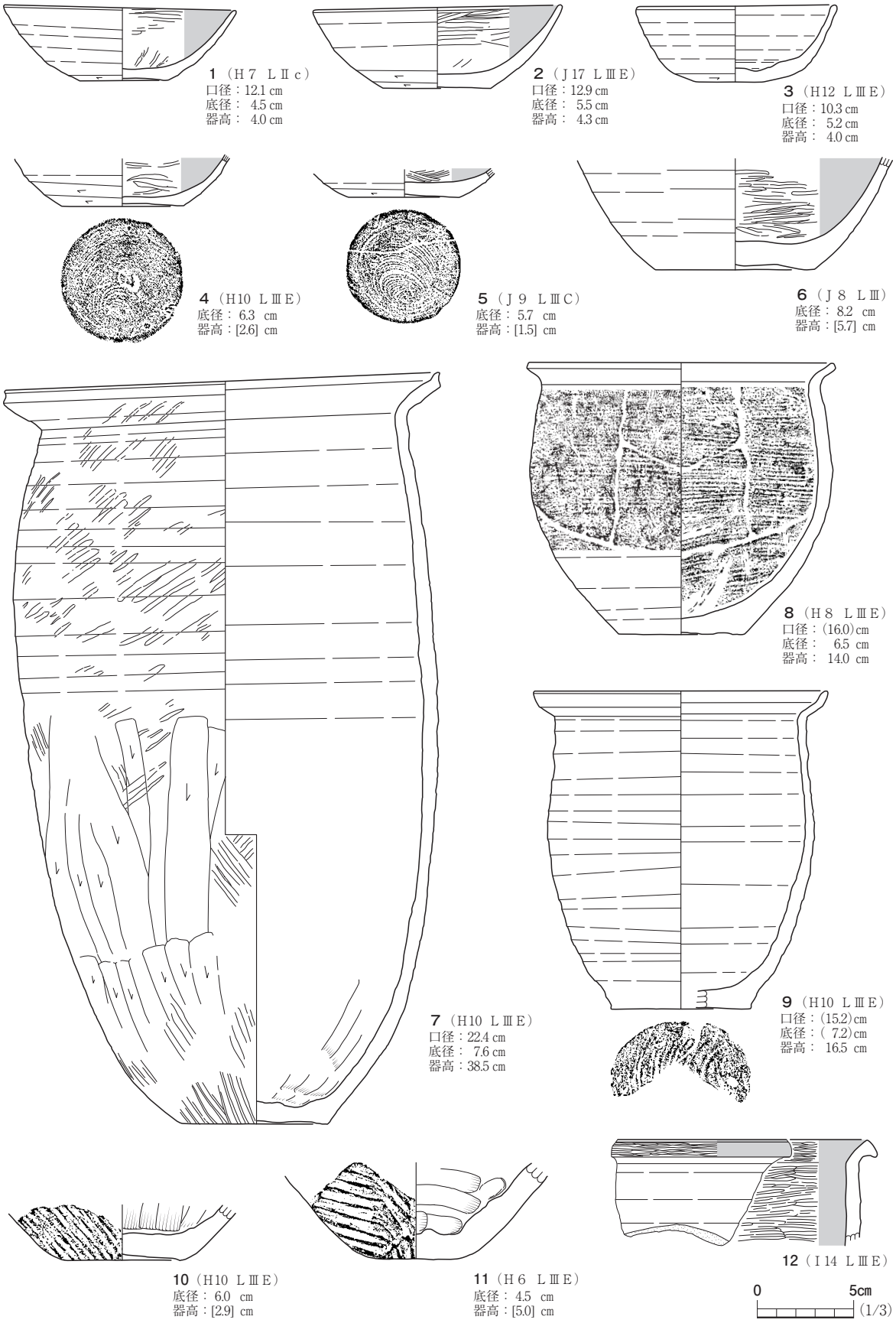


図28　遺構外出土遺物（1）

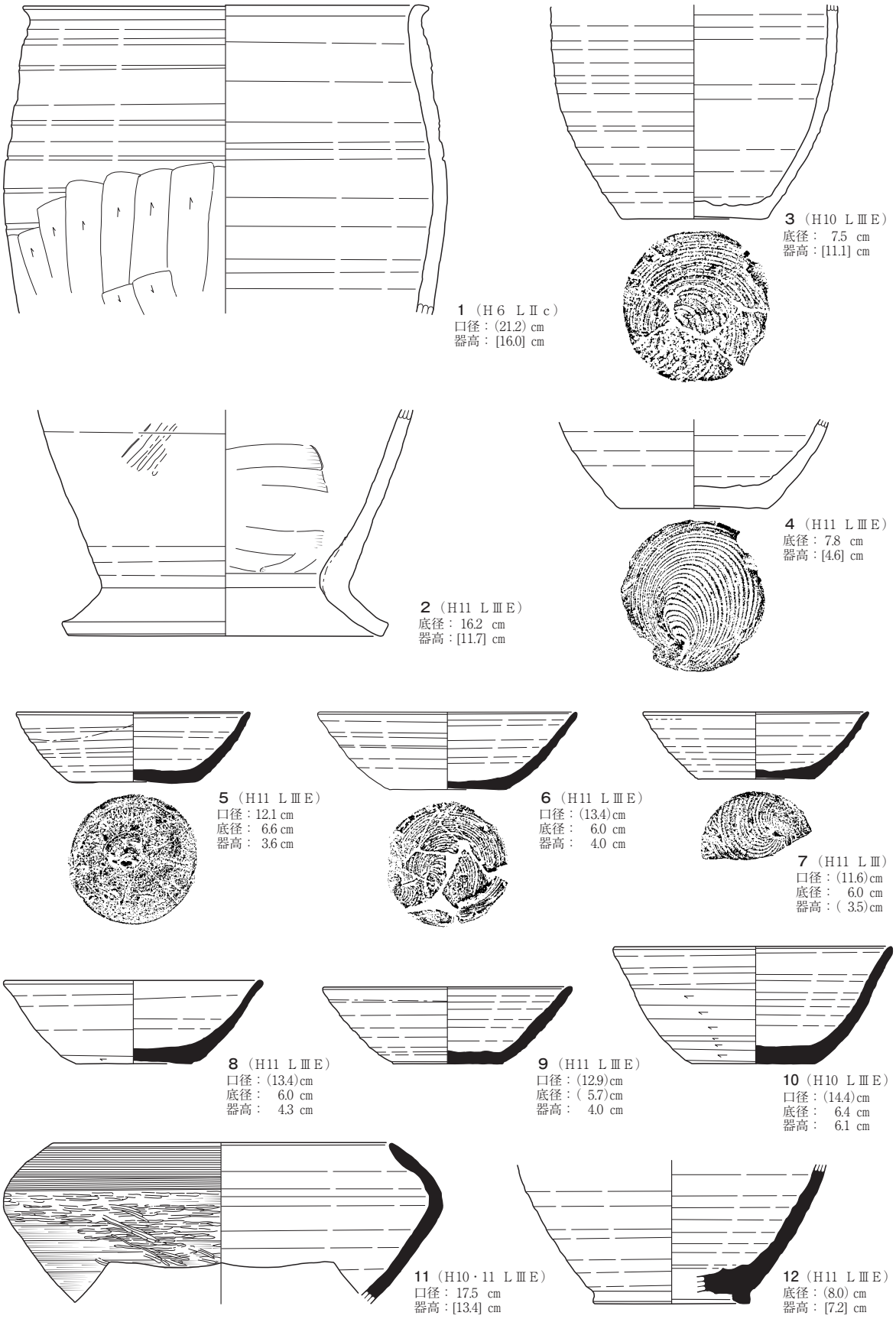


図29　遺構外出土遺物（２）

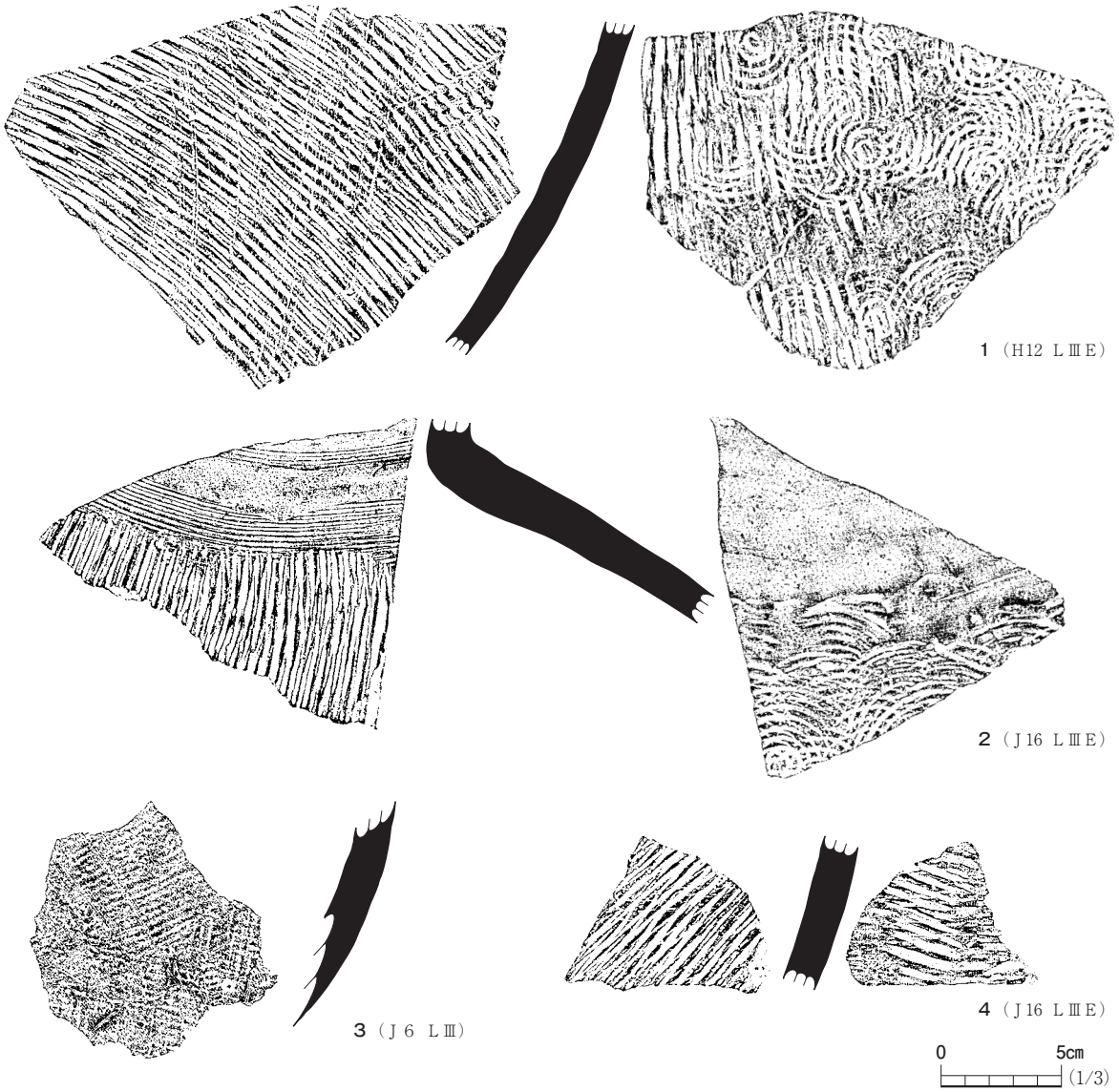


図30　遺構外出土遺物（３）

切り離しは回転糸切りと思われる。焼成は不良でやや軟質であるが，器面は灰白色に還元している。体部中央～底部全面に回転ヘラケズリが施されている。

図29－11は鉄鉢形の土器で，底部付近を欠損する。焼成は比較的良好である。口縁部の内傾は，直線的に屈曲している。口唇部は丸く仕上げられている。外面の調整はカキメであるが，体部にはヘラミガキも施されている。内面の調整はロクロナデである。

図29－12は，長頸瓶の底部破片である。焼成は非常に良好で，堅緻である。胴部に自然釉が付着している。

図30－１～４は，甕の破片資料である。１はＳＸ04上に堆積していたＬⅢＥから出土したもので，大形甕の胴部破片である。２はＳＫ61の東側で出土した頸部付近の破片で，２条のカキメが施されている。４も２の近くで出土した資料であるが，内・外面の調整は１にも類似している。３の胴部破片は，内面の調整がヘラナデである。（香　川）

第３章　総　　括

第１節　遺物について

１～３次調査における出土遺物の点数は，縄文土器1,400点・石器類119点，土師器類54,397点・須恵器類2,110点・鉄製品22点である。縄文時代の遺物については，最も多く出土した２次調査の報告書（今野：『阿賀川改修（長井地区）遺跡発掘調査報告２』）に詳しい。そこで，本節では出土遺物の約97％を占める平安時代の土器・土製品について要約する。平安時代の遺物は，土器の特徴や遺構の重複関係などから大きく３群に分けることが可能である。

１群土器（図31－１～23）

調査Ⅰ区のＳＩ01～03・07，ＳＫ03～07等の出土資料が該当する。当該期の資料は，調査Ⅱ・Ⅲ区では殆ど認められない。土師器類は，杯・小胴甕・長胴甕・鍋・甑などが確認でき，いずれもロクロ使用である。須恵器類は，杯・高台杯・蓋・高台盤・甕・横瓶などがある。他にＳＩ02から円筒形土製品(21)が出土している。１群土器は，土師器・須恵器とも器種が比較的多彩である。

土師器杯　黒色処理が施される杯である（１・２）。上記遺構の土師器杯はいずれも堆積土中の出土であるが，ロクロからの切り離し技法は糸切りで，体部下端に回転ヘラケズリを施しているものが主体である。器形は浅･深身があり，山中氏の土器分類（山中:1999･2000，以後，「山中分類」とする）によれば，およそＣ１・４類に位置付けられる。

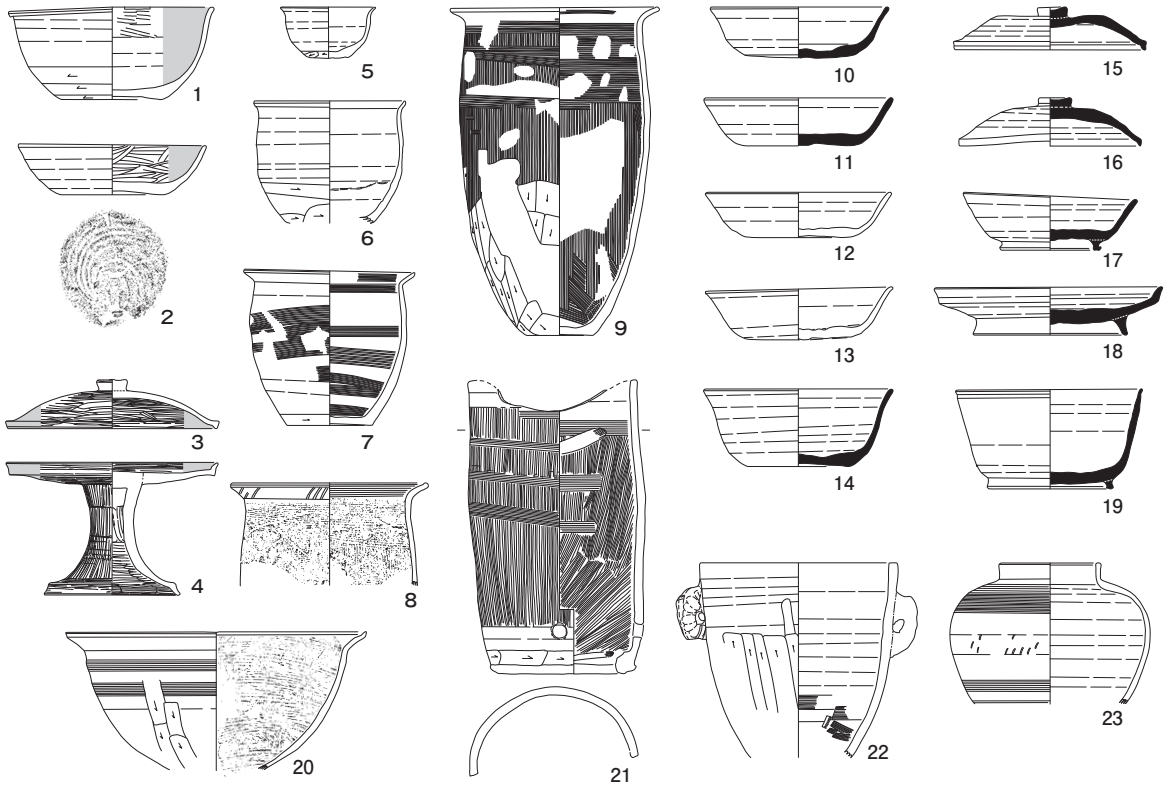
土師器小胴甕　ＳＩ02で比較的まとまって出土している（５～８）。胴部下位にヘラケズリ調整が施され，口唇部の形態は摘み出しがないか，またはわずかに摘み出されている。山中分類のⅡｃ類が主体である。

土師器長胴甕　胴部最大径が中位付近で，口縁部は外反的に開く（８・９）。８の口縁部には１次成形のタタキ痕が残る。胴部調整はハケメ・カキメが一般的で，21の円筒形土製品と同様である。口唇部はわずかに摘み出すものが多い。山中分類のⅡＡ１ａ類が主体である。

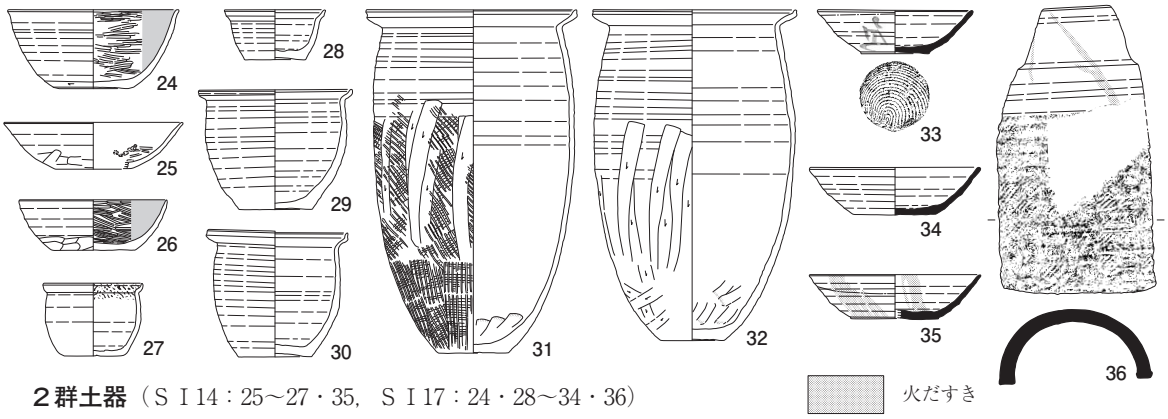
他に土師器は，高杯（４）・双耳状把手の甑(22)・短頸壺(23)・獣足片などが出土している。

須恵器杯　ロクロからの切り離し技法は回転ヘラ切りが基本で，法量は山中分類のＣ１・２類が主体であるが(10～13)，14のように深身の器形もある。なお，未還元色の杯(12・13)は，土器焼成坑と推測される。胎土分析の比較では，ＳＩ02・ＳＩ03・ＳＫ07の各杯が類似し，ＳＩ02杯・ＳＩ01杯蓋が異なるという結果である。

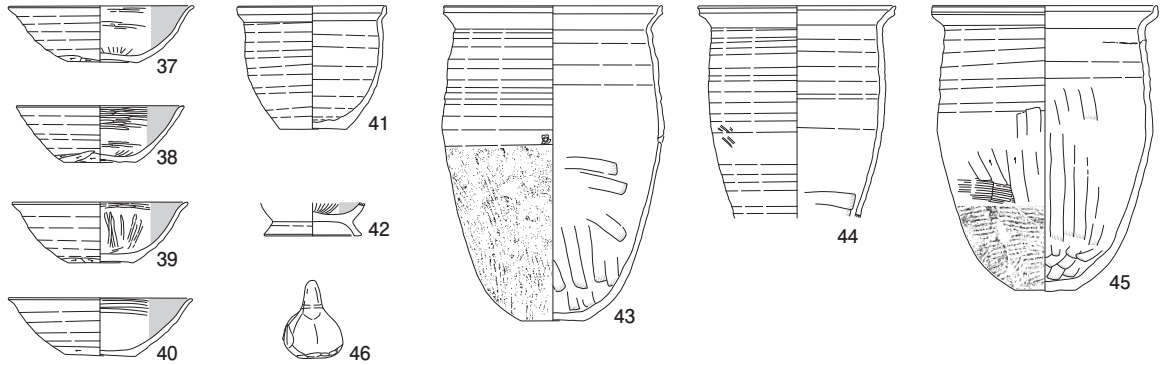
主に台地部の調査Ⅰ区で出土した１群土器について，食膳具の出土量はヘラ切りの須恵器杯（未還元杯を含む）が主流であるが，黒色処理・糸切りの土師器杯が少量ながら認められる。煮炊具は，



１群土器（ＳＩ02：１・３～12・15～18・20・21，ＳＩ07：２・14・19・22・23，ＳＫ07：13）



２群土器（ＳＩ14：25～27・35，ＳＩ17：24・28～34・36）



３群土器（ＳＩ15：37～44，ＳＫ37：45・46）　　杯類・盤・土鈴：１/６，その他：１/８

図31　平安時代出土土器群

胴部にハケメ･カキメが施される。土師器の種類は多彩で，須恵器模倣のような器種も認められる。22の双耳状把手は，他地域の要素が土師器に付加された可能性もある。１群土器の時期は８世紀末葉～９世紀前葉（Ⅰ期とする）に属すると考えられ（大河原：『阿賀川改修（長井地区）遺跡発掘調査報告１』），平安時代初期に位置付けられる。

２群土器（図31－24～36）

調査Ⅱ・Ⅲ区のＳＩ11・14・17，ＳＲ01～03，ＳＫ38・49・52～54・61，遺物包含層ＬⅢＥの出土資料が該当する。土師器類は，杯・小胴甕・長胴甕・鍋・甑などが確認できる。須恵器窯跡から出土した器種は，杯類が大半を占める。他にＳＩ17から，須恵質の瓦状土製品が出土している（36）。２群土器は，１群土器と比べて土師器・須恵器の器種が少ない。

土師器杯　黒色処理が施される杯で（24～26），ロクロからの切り離しは回転糸切りが基本である。法量は山中分類のＤ２・４類が主体で，浅・深身の規格があった可能性がある。なお，ＳＩ11の床面で検出した粘土成分と，同土師器杯の胎土成分が類似するという分析結果が得られており，ＳＩ11が土師器製作に関連した可能性がある。

土師器小胴甕　口縁部の屈曲が比較的強くなり，また口唇部は受け口状に摘み出される（27～30）。胴部の再調整は下位に回転ヘラケズリを施すか，または無調整である。底部外面には，基本的に回転糸切り痕が残る。山中分類のⅡｃ・ｅ類に位置付けられるものが主体である。

土師器長胴甕　胴部最大径は中～上位で，平底が基本である（31・32）。口縁部は外傾し，口唇部の摘み出しが顕著となる。胴部外面の調整は，１次成形のタタキ後，ロクロナデまたはカキメ→ヘラケズリの順序で施されたものが多い。山中分類のⅡＡ１ｃ類が主体である。

須恵器杯　ロクロからの切り離し技法は，回転ヘラ切りが基本である（34・35）。33のような回転糸切りは稀である。ＳＲ01～03･ＳＩ11･14･17出土の杯は，山中分類のＤ～Ｇ類の法量に納まる。なお，ＳＩ11出土の須恵器杯は，胎土分析からＳＲ01～03で作られた可能性がある。

他に須恵器類は，ＳＫ36から焼台，ＬⅢＥから鉄鉢形土器（図29－11）が出土している。

２群土器の時期は，その特徴から山中分類（山中：2000）のおよそ第２段階の第１小期に該当し，９世紀中葉～後半（Ⅱ期とする）と考えられる。９世紀中葉以降，会津地方では食膳具における須恵器杯の急減が指摘されており，ＳＲ01～03の須恵器杯は過渡期の所産と考えられる。

３群土器（図31－37～46）

調査Ⅱ区のＳＩ06・08・15，ＳＫ18・25・37・50・51，遺物包含層ＬⅡｃの出土資料が該当する。ＬⅡｃ～ⅢＥ間には洪水砂が堆積し，文化層が二分されている。上記遺構・ＬⅡｃから須恵器杯の出土は認められない。

土師器杯　無台・有台杯がある（37～40・42）。またＳＩ08では赤焼き土器も認められた。無台杯の法量は，山中分類のＤ２・Ｅ１～３類に位置付けられるものが多い。

土師器甕類　小胴甕の再調整は行われず，山中分類Ⅱｅ類が基本である(41)。長胴甕はやや寸胴器形で，平底が基本である。胴部下半に顕著にタタキ痕を残す山中分類のⅡＤｄ・ｅ類(43・45)と，同器形であるが胴部にタタキ痕をほとんど残さない(44)がある。甕類の口唇部には，受け口状口唇の退化形態が見られるほか，小胴甕では口唇部が内傾するものも認められる。

他にＳＩ15・ＳＫ37から土鈴(46)が出土している。

３群土器の時期は，その特徴から山中分類(山中：2000)のおよそ第３段階に該当し，長胴甕はＤ類が主体であることから，比較的初期の９世紀末葉～10世紀前葉頃(Ⅲ期とする)としておく。

第２節　遺構について

１～３次調査における平安時代の検出遺構は，土師器焼成坑・須恵器窯跡など比較的小規模であるが土器生産関連遺構が主体である。調査Ⅰ～Ⅲ区は河岸段丘面突端～河川敷の範囲にあたり，丘陵斜面及び狭小な平場地形が土器生産場として利用された。

Ⅰ期の食膳具はヘラ切り杯が主体であるが，同形態でも還元・未還元品に分けられる。土器焼成坑で焼かれたと考えられる未還元品については，大河原(：前掲)も指摘するように土師器の範疇で捉えるべきであろう。なお,対岸の会津坂下町に位置する萩ノ窪窯跡は９世紀前半の須恵器窯跡で,糸切り須恵器杯・土師器長胴甕が同一窯を利用して焼成されていることから「工人間の分離が緩慢だった可能性」が指摘されている(菅原：2010)。このように，平安時代初期～９世紀前半の小田高原遺跡及び周辺部では，土器生産において混交とした状況を示す。

しかし，Ⅱ期の土師器焼成坑で焼かれた食膳具は糸切り杯に限られ，当該期のヘラ切り杯は調査Ⅱ区北東部の須恵器窯(ＳＲ01～03)で生産されている。Ⅱ期では，土器焼成に関してⅠ期で見られたような混交とした状況は確認できず,「土師器工人と須恵器工人がほぼ完全に分離」(菅原：前掲)していたと考えられる。ＳＲ01～03は杯類を中心に生産していた簡易な須恵器窯跡と思われるが，斜面崩落による破壊を受けており構造的に不明点が多い。なお，Ⅱ期は須恵器生産の過渡期であり，Ⅲ期の土器生産は土師器焼成坑に限られる。

土師器焼成坑　本遺構の可能性があるものは，ＳＩとしたものも含めてⅠ期：ＳＩ07，ＳＫ05・07，Ⅱ期：ＳＫ32・38・42・53・54・58・61，Ⅲ期：ＳＩ09・15，ＳＫ18・25・36・37・48・50・51である。平面形状や規模の大小は，時期に関係なく多様である。掘形は全般的に浅く，焼土遺構としたものについても一部は壁が失われた土師器焼成坑の可能性がある。被熱痕跡は，壁～底面に及ぶ顕著なＳＫ53から，底面の一部にとどまるＳＫ05まで様々である。ＳＫ53の平面形は逆台形に近く，底面に貼床が認められた土師器焼成坑である。なお，Ⅲ期のＳＩ15・ＳＫ18・ＳＫ51から，藁圧痕が付いた扁平な焼成粘土塊が少量出土している。

竪穴住居跡　ここでは，作り付けのカマドが明確に確認できた遺構を竪穴住居跡とする。Ⅰ期：ＳＩ01・02，Ⅱ期：ＳＩ11・14・17，Ⅲ期：ＳＩ06・08が該当する。平面形はⅠ・Ⅱ期が正方形に

近いが，Ⅲ期の住居跡は長方形を呈する。カマドは，Ⅰ～Ⅲ期を通して角寄りに付設される。ＳＩ02･17からロクロピットと推測される穴が検出されているが，掘形の形状が異なる。ＳＩ02のＰ３はいわゆる漏斗状の掘形である。一方，ＳＩ17のＰ１は円筒状で，軸棒を地中深く埋めて固定したような状況であり，床面から突き出た軸棒の先端を支点として回転台を被せるように載せた可能性も考えられるだろう。ＳＩ11の床面から採取された粘土塊の成分は，同住居跡の土師器杯胎土と類似している。また，ＳＩ06・08の近接した位置にほぼ同時期の土師器焼成坑があり，これらのことから調査Ⅰ～Ⅲ区で検出された竪穴住居跡は，土器製作に関連した工房等の可能性がある。

各住居跡のカマド袖端部には，土師器甕などが付設される。Ⅰ・Ⅲ期では，伏せた土師器長胴甕が袖部に付く。しかし，Ⅱ期のカマドは，住居跡によって形態が異なる。ＳＩ11は，両袖端部に伏せた小胴甕を据えている。ＳＩ14のカマドは燃焼室が外部へ張り出すタイプで，両袖端部に長い石を据えている。ＳＩ17のカマドは，左袖端部に長胴甕上半部の半截破片(図32－５)を据え，右袖端部には須恵質の平瓦状土製品(図32－７)が付く。また，同カマドの北側で出土した合口の長胴甕は，長さが両袖の東西幅にほぼ等しく，被熱痕も顕著であることから焚口上部の構築材として利用された可能性が考えられる。

平瓦がカマドの袖部等に使用された事例は，茨城県の然山西遺跡など関東地方の平安住居跡で認められ，福島県でも関和久上町遺跡等で確認されている(吉野：2011)。ただし，図32－７の成形技法は瓦と異なっており，また当該期の土師器長胴甕に布目・タタキメが付く資料もある(図19－４)。したがって，図32－７はカマド部材として製作され，その系譜をＳＩ02の図31－21・図32－３の土製品に求められる可能性もある。

図31－21・図32－３は，いわゆる円筒形土製品である。その用途はカマドの構築材(丹治：2001，望月：2002)とする説が有力である(春日：2003)。

図32－３は望月氏の分類に従えば，口縁部が「玉縁状にソケット型の段を

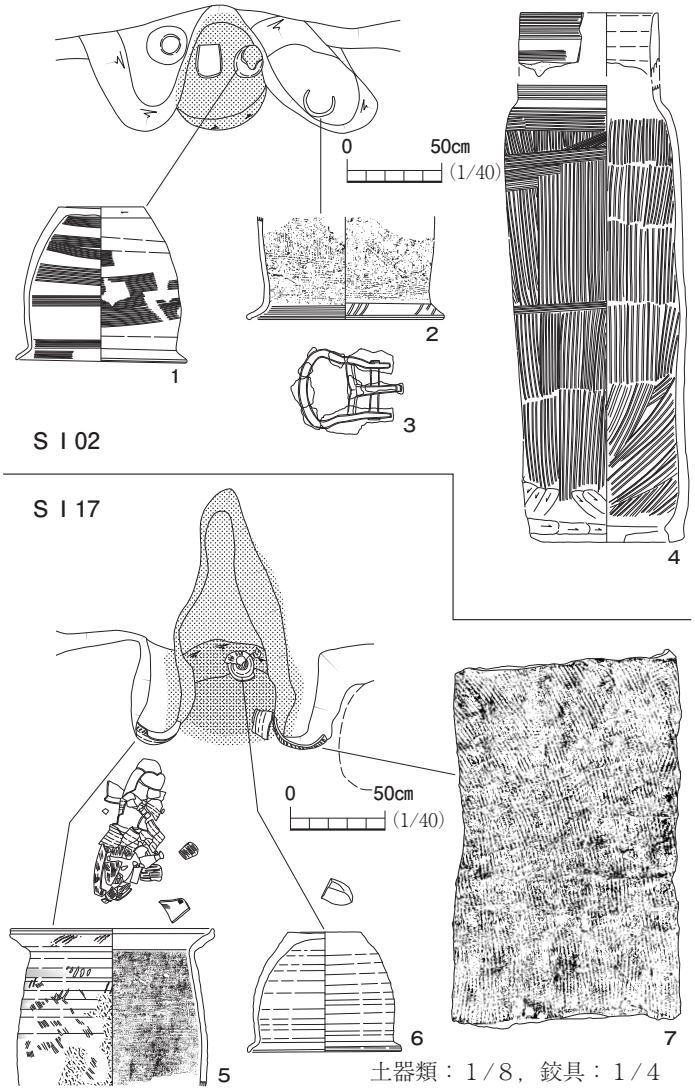


図32　２・17号住居跡カマド

形成」し，底部が筒抜けとなるＡ１類である。望月氏は，Ａ１類を主体とする円筒形土製品の分布状況について，北陸では「８世紀後半までで衰退して行く越中以西と９世紀にピークを迎える越後」の地域に分けられ，９世紀の長野県松本平周辺に円筒形土製品が「再び顕在化」する事例（長野県埋蔵文化財センター：1990）を「北陸との関連性で考えられる」とする。また望月氏は，円筒形土製品が出土する遺跡について「土師器焼成坑群の群在する生産遺跡が多い」と指摘する。

したがって，Ⅰ期のＳＩ02は，円筒形土製品Ａ１類から北陸地方の影響及び土器生産に関連したと推測される。また，Ⅱ期のＳＩ17は，図31－36がＡ１類の「半截型」と考えられ，ＳＩ02の系譜に関連する可能性がある。しかし，Ⅱ期のカマドは形態が比較的多様であり，住居跡によって工人の系統が異なる可能性を示す。小田高原遺跡の西端部で生産された食膳具の変遷は，Ⅰ期：ヘラ切り杯→Ⅱ期：ヘラ切り杯・糸切り杯→Ⅲ期：糸切り杯であり，ヘラ切り系統の移入→離脱の流れがおよそ平安時代初頭から９世紀代の間で生じたと推測される。

調査Ⅰ区の南部に８世紀中葉頃の操業とされる小田高原窯跡推定地があるが，その所在を確認することはできず，今のところ同窯跡と本遺跡の関係については不明である。しかし，今回の調査で発見された土器生産関連遺構の時期は，８世紀末葉以降である。平安時代初頭は，食膳具が須恵器杯，煮炊具がロクロ土師器長胴甕という「会津的な土器生産への転換期」（山中：2002）と考えられている。よって，小田高原遺跡における土器生産関連遺構の発生についても，比較的小規模ながら会津的な土器生産への転換期に連動したものと推測される。（香　川）

引用・参考文献（五十音順）

論文等

石田　明夫　1998『会津大戸窯　大戸古窯群保存管理計画書』会津若松市

石田明夫他　2000『会津のやきもの－須恵器から陶磁器まで』（会津若松市史14　文化編１　陶磁器）会津若松市

春日　真実　2003「越後出土の円筒形土製品・板状土製品について」『富山大学考古学研究室論集　蜃気楼』秋山進午先生古稀記念論集刊行会

菅原　祥夫　2010「東北」『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜』窯跡研究会編　真陽社

丹治　篤嘉　2001「福島県内の筒形土製品・異形土製品について」『福島考古学』第42号　福島考古学会

望月　精司　1997「土師器焼成坑の分類」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編　真陽社

望月　精司　2002『二ツ梨一貫山窯跡』小松市教育委員会

山中　雄志　1999「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相（前編）」『福島考古学』第40号　福島考古学会

山中　雄志　2000「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相（後編）」『福島考古学』第41号　福島考古学会

山中　雄志　2002「会津地方におけるロクロ土師器の出現と展開を巡って」『福島考古学』第43号　福島考古学会

吉野　滋夫　2011「白河市佐平林遺跡出土の瓦について」『研究紀要』2010　福島県文化財センター白河館

報告書

会津坂下町教育委員会　2000「萩ノ窪遺跡」『会津坂下町内遺跡発掘調査報告書』

会津若松市教育委員会　1993『会津大戸窯　大戸古窯跡群発掘調査報告書』

会津若松市教育委員会　1994『会津大戸窯　大戸古窯跡群発掘調査報告書　遺物編』

喜多方市教育委員会　1995「第１編　考古」『喜多方市史』第４巻（資料編１）

喜多方市教育委員会　2002「西新田窯跡群範囲確認試掘調査（第三次）」『平成13年度市内遺跡発掘調査報告書』

喜多方市教育委員会　2010「小田高原遺跡試掘調査」『平成21年度市内遺跡発掘調査報告書』

長野県埋蔵文化財センター　1990『更埴条里遺跡・屋代遺跡群（総論編）』

付　章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定

株式会社　加速器分析研究所

１．測定対象試料

小田高原遺跡（３次）は，福島県喜多方市慶徳町山科字古屋敷に所在し，阿賀川右岸に立地する。測定対象試料は，阿賀川の小段丘面，河川敷，小段丘斜面に分布する遺構から出土したもので，17号住居跡床面出土木炭（KT-ODK3.№１：IAAA-121750），17号住居跡カマド底面出土木炭（KT-ODK3.№２：IAAA-121751），48号土坑堆積土出土炭化物（KT-ODK3.№３：IAAA-121752），51号土坑底面出土木炭（KT-ODK3.№４：IAAA-121753），４号特殊遺構（新）底面出土炭化物（KT-ODK3.№５：IAAA-121754），４号特殊遺構（旧）底面出土炭化物（KT-ODK3.№６：IAAA-121755），10号焼土遺構底面出土木炭（KT-ODK3.№７：IAAA-121756）の合計７点である（表８）。

17号住居跡は，段丘斜面の崩壊土（ＬⅢＦ′）上面で検出され，出土遺物から９世紀後半代と捉えられている。48号土坑は，17号住居跡よりも上層に当たるＬⅢＣ面で検出され，土師器を焼成した遺構と推測される。51号土坑も土師器を焼成したと考えられる遺構で，出土遺物から48号土坑より新しいと考えられる。ただし，51号土坑が立地する小段丘斜面は，17号住居跡が立地する小段丘面とは土層の堆積状況が異なるため，層の対比によって前後関係を確認できない。４号特殊遺構は，17号住居跡よりも下層（ＬⅢＧ）で検出され，焼石と焼土面からなり，新旧２面がある。10号焼土遺構は，４号焼土遺構とほぼ同じＬⅢＧ面で検出され，遺構の特徴も類似する。

２．測定の意義

17号住居跡は出土遺物から９世紀後半代と考えられるが，この遺構と前後関係にある層から検出された遺構には，出土遺物から時期を特定できないものがあるため，年代測定によってそれらの年代を明らかにする。また，小段丘面と小段丘斜面の間で直接対比できない層の時期を検討する。

３．化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA 処理における酸処理では，通常１mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001M から１M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１M に達した

時には「AAA」，１M 未満の場合は「AaA」と表８に記載する。

（３）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を，鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

４．測 定 方 法

加速器をベースとした^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し，^{14}C の計数，^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５．算 出 方 法

（１）δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表８）。AMS 装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libby の半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代はδ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表８に，補正していない値を参考値として表９に示した。^{14}C 年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C 年代の誤差（±１σ）は，試料の^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し，pMC が100以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値もδ^{13}C によって補正する必要があるため，補正した値を表８に，補正していない値を参考値として表９に示した。

（４）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C 濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（１σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C 年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C 補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C 年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い，OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定

のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表９に示した。暦年較正年代は，^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

６．測定結果

試料の^{14}C 年代は，17号住居跡床面出土木炭 KT-ODK3.№１が1210 ± 20yrBP，17号住居跡カマド底面出土木炭 KT-ODK3.№２が1190 ± 20yrBP，48号土坑堆積土出土炭化物 KT-ODK3.№３が1150 ± 20yrBP，51号土坑底面出土木炭 KT-ODK3.№４が1110 ± 20yrBP，４号特殊遺構(新)底面出土炭化物 KT-ODK3.№５が1250 ± 20yrBP，４号特殊遺構(旧)底面出土炭化物 KT-ODK3.№６が1230 ± 20yrBP，10号焼土遺構底面出土木炭 KT-ODK3.№７が1280 ± 20yrBP である。17号住居跡から出土した KT-ODK3.№１と KT-ODK3.№２の値は誤差(±１σ)の範囲で重なり，近い年代を示す。

暦年較正年代(１σ)は，KT-ODK3.№１が778～868cal AD，KT-ODK3.№２が783～880cal AD，KT-ODK3.№３が870～967cal AD，KT-ODK3.№４が895～972cal AD，KT-ODK3.№５が694～776cal AD，KT-ODK3.№６が720～862cal AD，KT-ODK3.№７が680～768cal AD の間に各々複数の範囲で示される。

17号住居跡は，出土遺物から９世紀後半代と考えられており，この遺構から出土した KT-ODK3.№１と KT-ODK3.№２の年代値は遺物が示す時期と矛盾しない。

17号住居跡よりも上層に当たるＬⅢＣ面で検出された48号土坑出土 KT-ODK3.№３の値は，17号住居跡の２点と重なる範囲を持つが，より新しい範囲に広がる。また，この遺構に類似し，出土遺物から48号土坑よりも新しいと考えられる51号土坑出土の KT-ODK3.№４は，48号土坑出土の KT-ODK3.№３の値と重なる範囲が多いが，やや新しい年代値も示されている。

17号住居跡よりも下層(ＬⅢＧ)で検出された４号特殊遺構出土の KT-ODK3.№５と KT-ODK3.№６の値は，17号住居跡出土試料の年代値と重なる範囲を持つが，それらより古い範囲も示されている。４号特殊遺構の中で新旧関係にある KT-ODK3.№５と KT-ODK3.№６の年代値を比較すると，層位の上下関係と逆転しているようにも見える。しかし，むしろ重なる範囲が多いことを考慮して，年代差が明確でないと評価することも可能である。

４号焼土遺構とほぼ同じＬⅢＧ面で検出された10号焼土遺構の KT-ODK3.№７は，４号特殊遺構出土の２点に近い値を示し，上層に当たる17号住居跡出土の２点よりおおむね古い年代値となっていることから，層位関係に整合する結果と考えられる。

試料の炭素含有率はすべて60％を超える十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

表９　放射性炭素年代測定結果

試 料 名	測定番号	採 取 場 所	試料形態	処理方法	δ 13C（‰）（AMS）	δ 13C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-121750	KT-ODK3. №1	17号住居跡 床 面	木 炭	AAA	-24.63 ± 0.32	1,210 ± 20	86.02 ± 0.24
IAAA-121751	KT-ODK3. №2	17号住居跡 カマド底面	木 炭	AAA	-24.29 ± 0.38	1,190 ± 20	86.22 ± 0.26
IAAA-121752	KT-ODK3. №3	48号土 坑 堆積土	炭化物	AAA	-27.86 ± 0.37	1,150 ± 20	86.66 ± 0.25
IAAA-121753	KT-ODK3. №4	51号土 坑 底 面	木 炭	AAA	-27.40 ± 0.36	1,110 ± 20	87.04 ± 0.25
IAAA-121754	KT-ODK3. №5	4号特殊遺構（新） 底 面	炭化物	AAA	-28.66 ± 0.40	1,250 ± 20	85.54 ± 0.24
IAAA-121755	KT-ODK3. №6	4号特殊遺構（旧） 底 面	炭化物	AAA	-28.54 ± 0.51	1,230 ± 20	85.83 ± 0.25
IAAA-121756	KT-ODK3. №7	10号焼土遺構 底 面	木 炭	AAA	-28.71 ± 0.37	1,280 ± 20	85.22 ± 0.25

表10　暦年較正年代（１）

試 料 名	δ 13C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-121750	1,200 ± 20	86.09 ± 0.23	1,209 ± 22	778calAD-830calAD（43.2%） 837calAD-868calAD（25.0%）	722calAD-741calAD（4.5%） 770calAD-888calAD（90.9%）
IAAA-121751	1,180 ± 20	86.35 ± 0.25	1,190 ± 24	783calAD-790calAD（6.2%） 810calAD-880calAD（62.0%）	722calAD-895calAD（94.1%） 926calAD-937calAD（1.3%）
IAAA-121752	1,200 ± 20	86.15 ± 0.24	1,149 ± 23	870calAD-902calAD（27.1%） 917calAD-967calAD（41.4%）	781calAD-790calAD（2.7%） 808calAD-972calAD（92.7%）
IAAA-121753	1,150 ± 20	86.61 ± 0.24	1,114 ± 23	895calAD-925calAD（28.6%） 937calAD-972calAD（39.6%）	889calAD-985calAD（95.4%）

表11　暦年較正年代（２）

試 料 名	δ 13C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
IAAA-121754	1,320 ± 20	84.89 ± 0.23	1,254 ± 22	778calAD-830calAD（43.2%） 837calAD-868calAD（25.0%）	676calAD-817calAD（93.4%） 843calAD-859calAD（2.0%）
IAAA-121755	1,290 ± 20	85.21 ± 0.23	1,227 ± 23	720calAD-742calAD（15.2%） 770calAD-825calAD（39.9%） 841calAD-862calAD（13.1%）	693calAD-748calAD（25.2%） 765calAD-881calAD（70.2%）
IAAA-121756	1,350 ± 20	84.57 ± 0.24	1,284 ± 23	680calAD-716calAD（40.0%） 744calAD-768calAD（28.2%）	671calAD-773calAD（95.4%）

【参考値】

参考文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337–360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51 (4), 1111–1150

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355–363

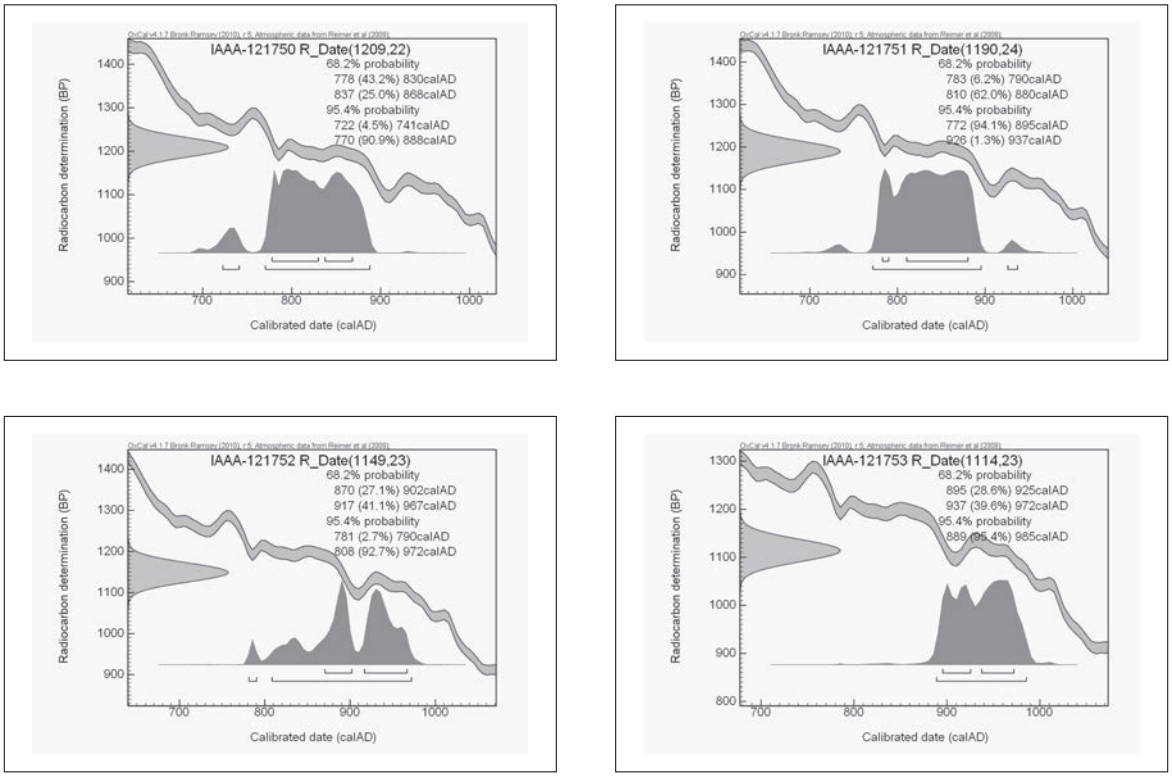
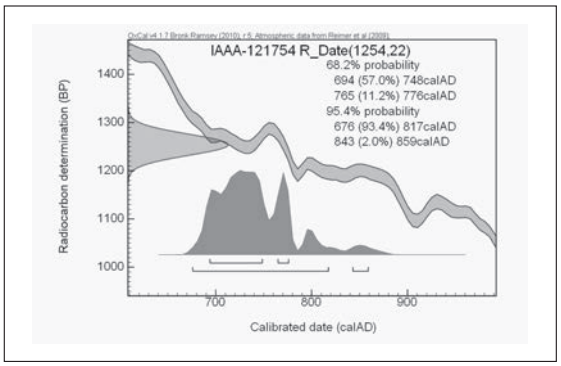
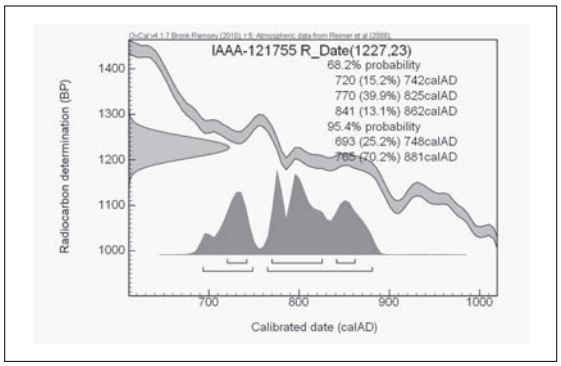


図33　暦年較正年代グラフ（１）





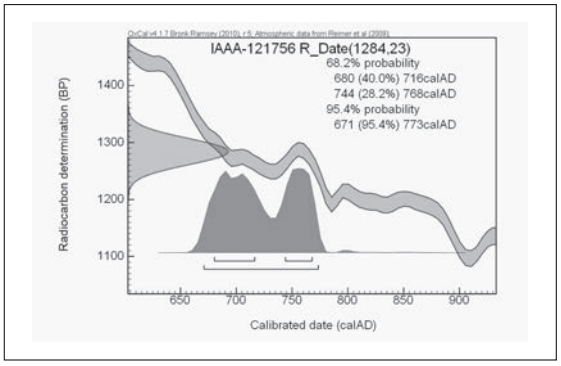


図34　暦年較正年代グラフ（２）

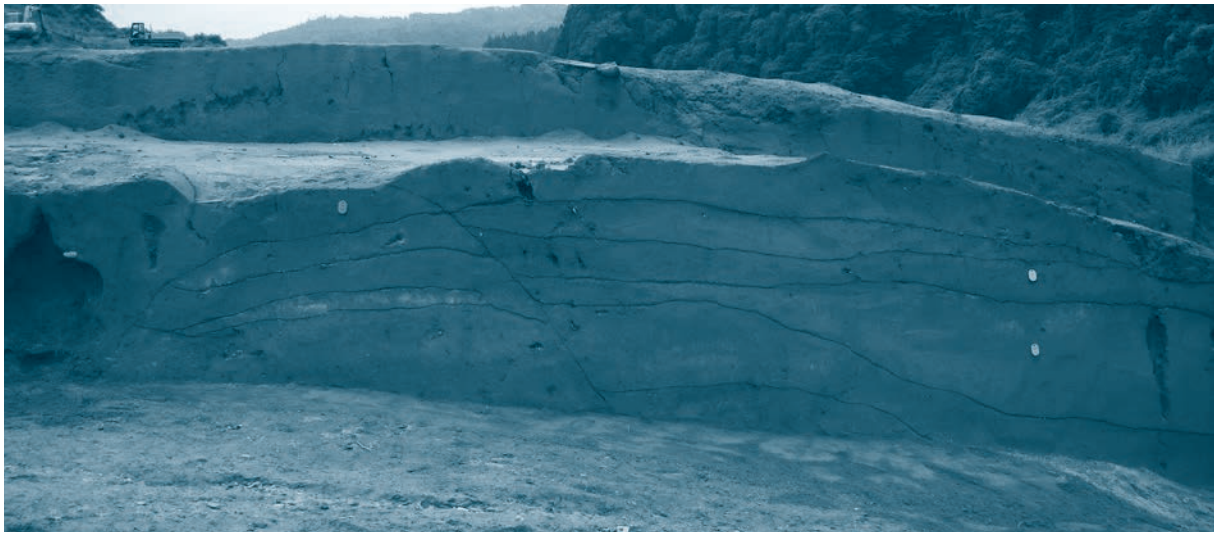
写　真　図　版

1　調査区全景（西から）

2　調査区全景（北から）

3　基本土層　B（北西から）

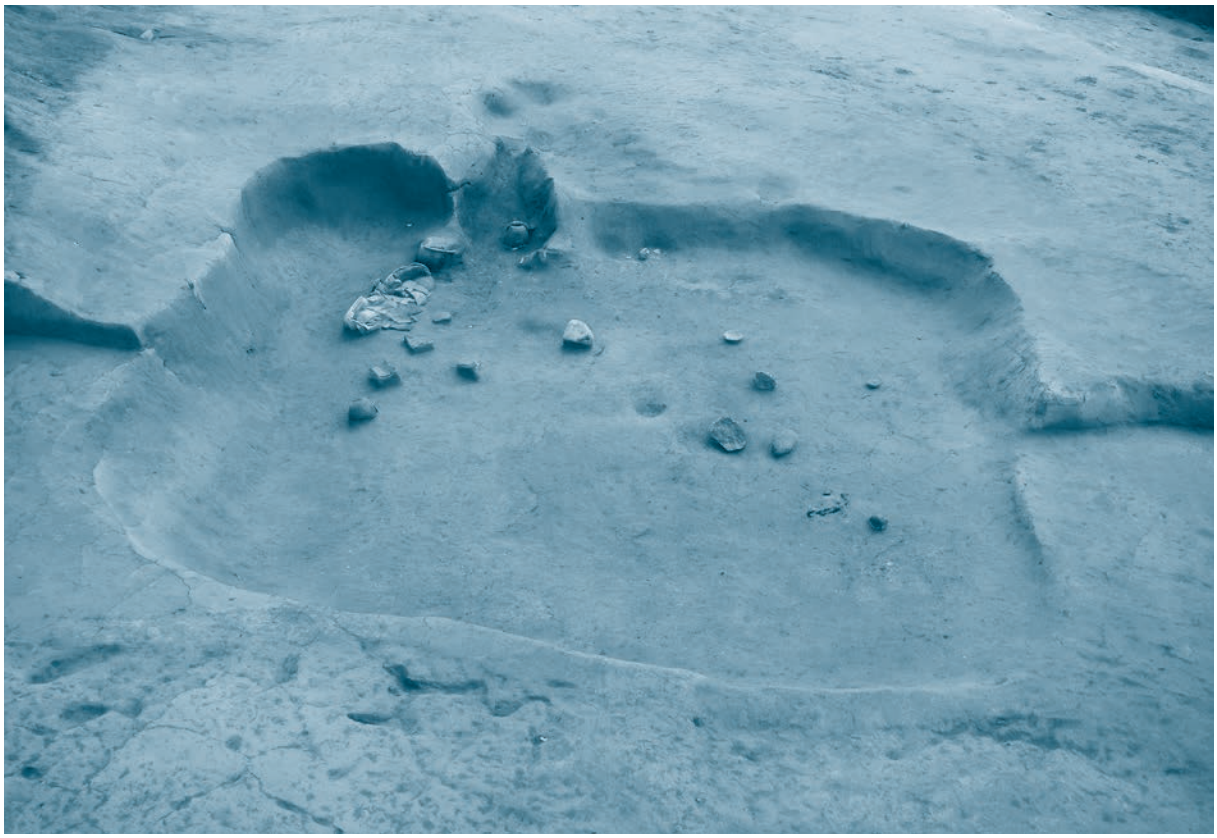
4　基本土層　F（北西から）



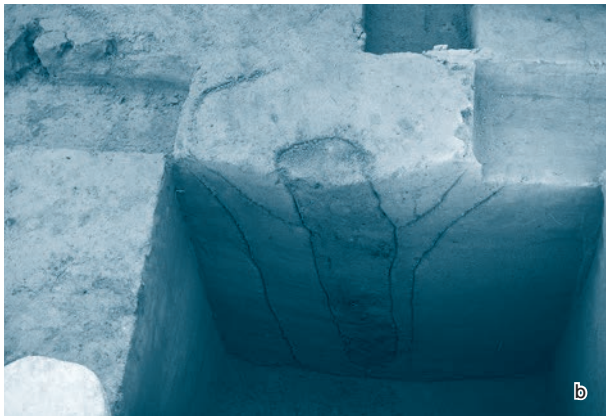
5　基本土層　I（北から）

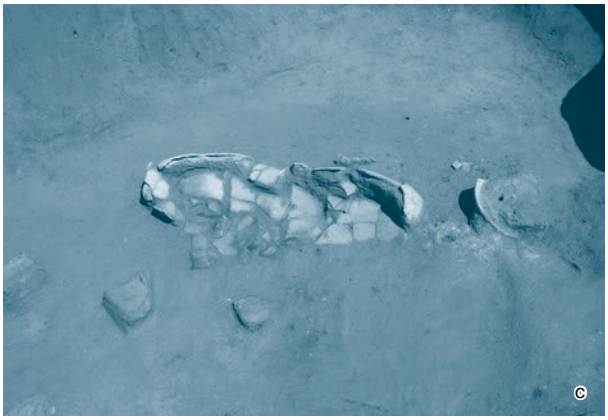
6　基本土層　C（西から）

7　基本土層　D（南から）



8　17号住居跡全景（北から）

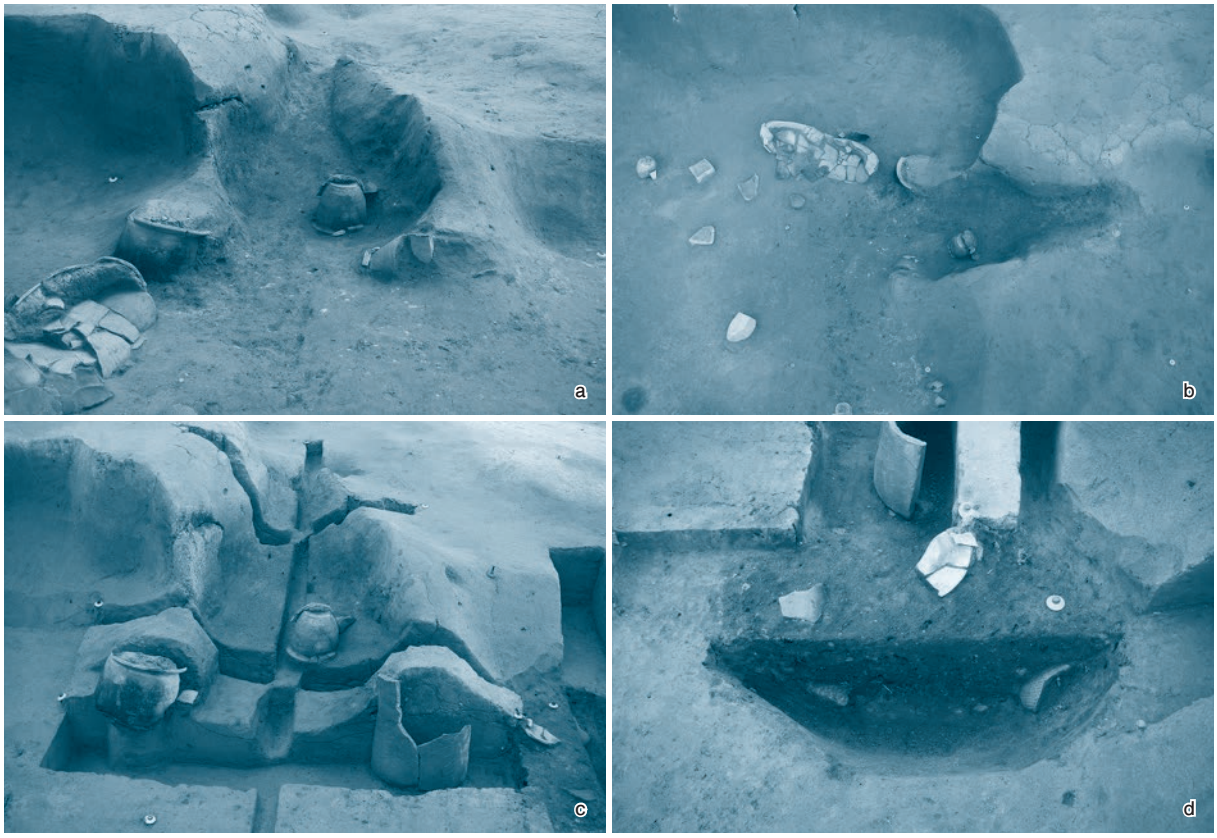




9　17号住居跡細部

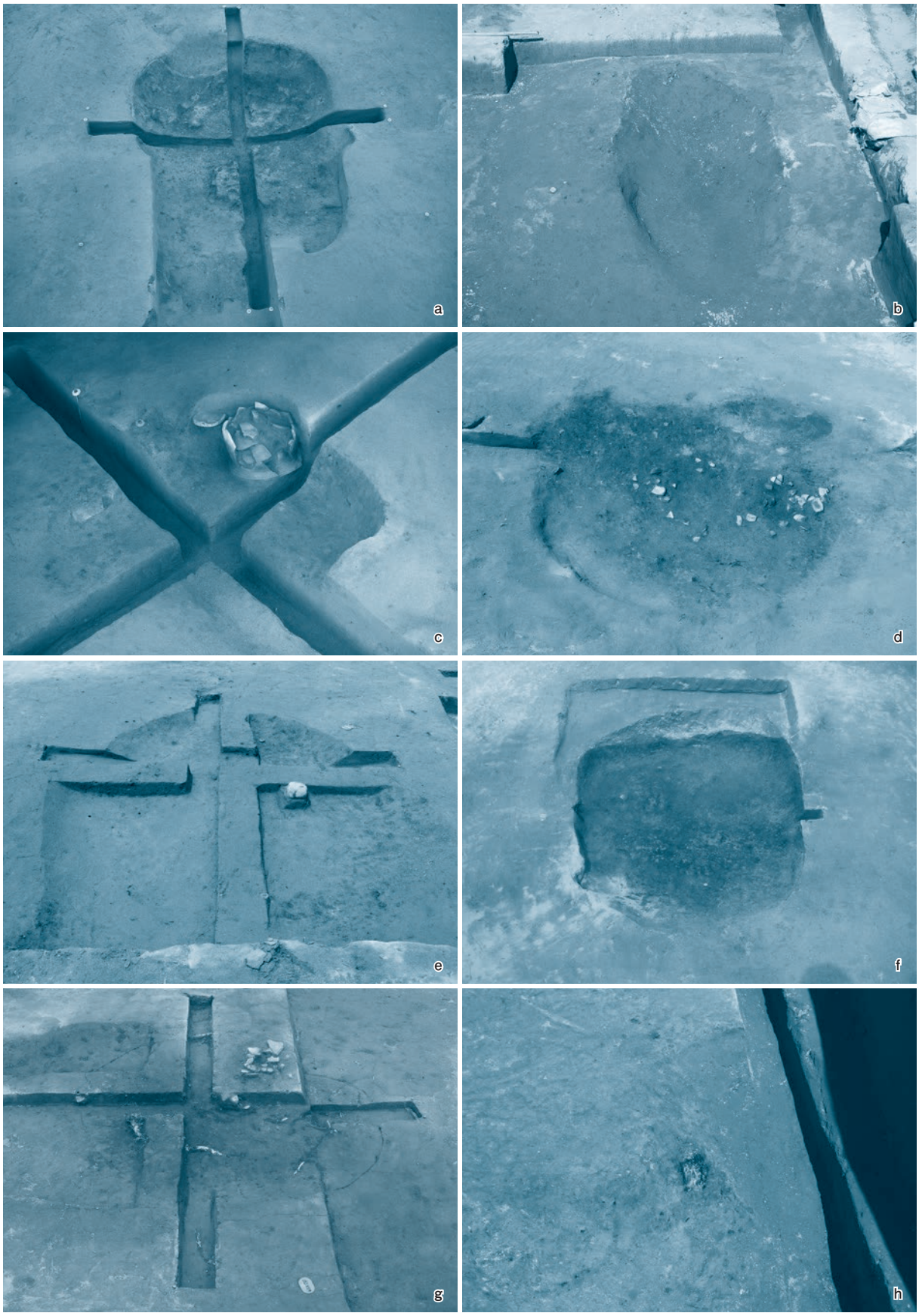
a　土層（北から）
b　Ｐ１断面（西から）　**c**　遺物出土状況（西から）

10　17号住居跡カマド（北から）



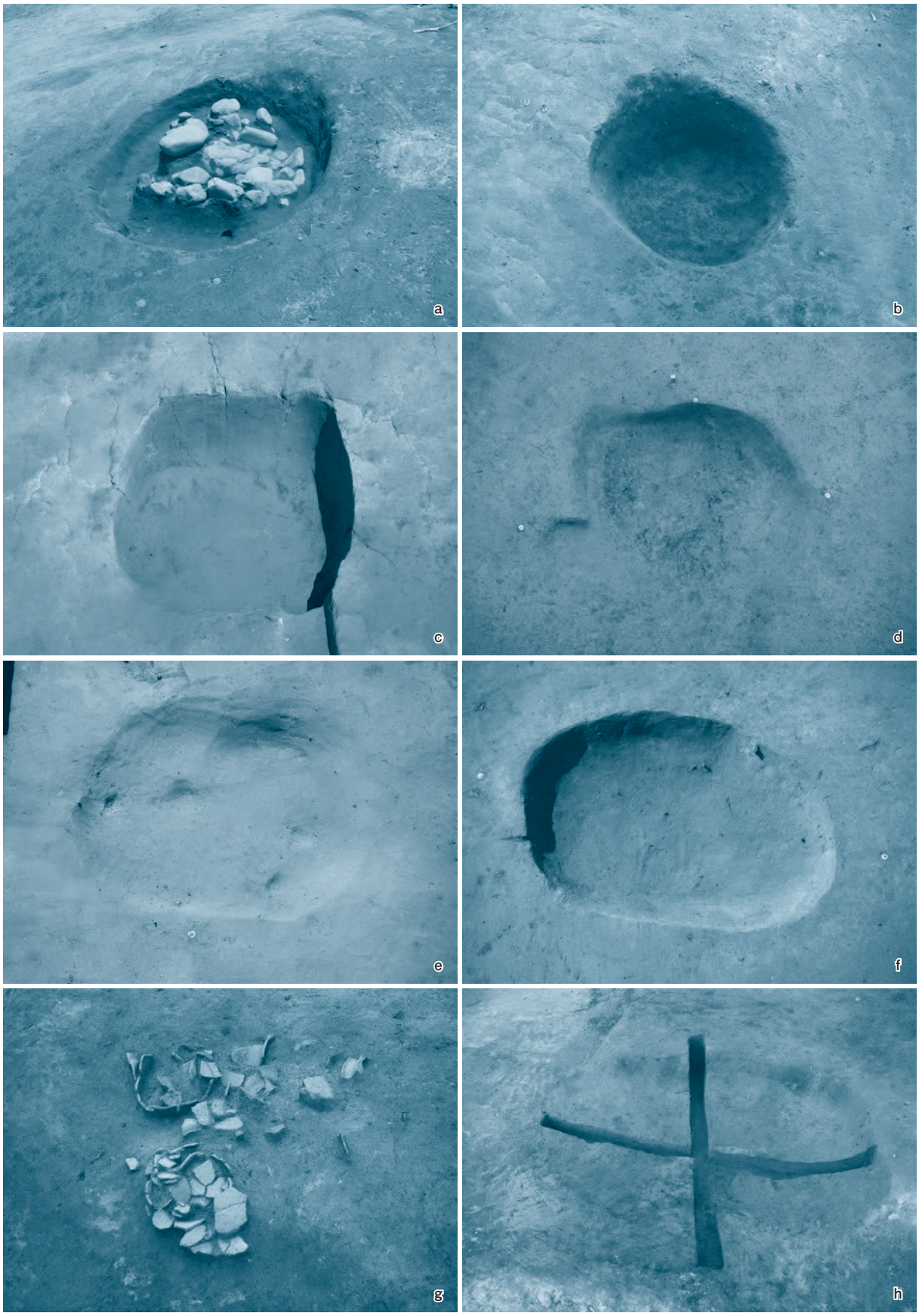
11　17号住居跡カマド細部

a　カマド（北から）　**b**　カマド（西から）
c　カマド断割（北から）　**d**　Ｐ２断面（西から）



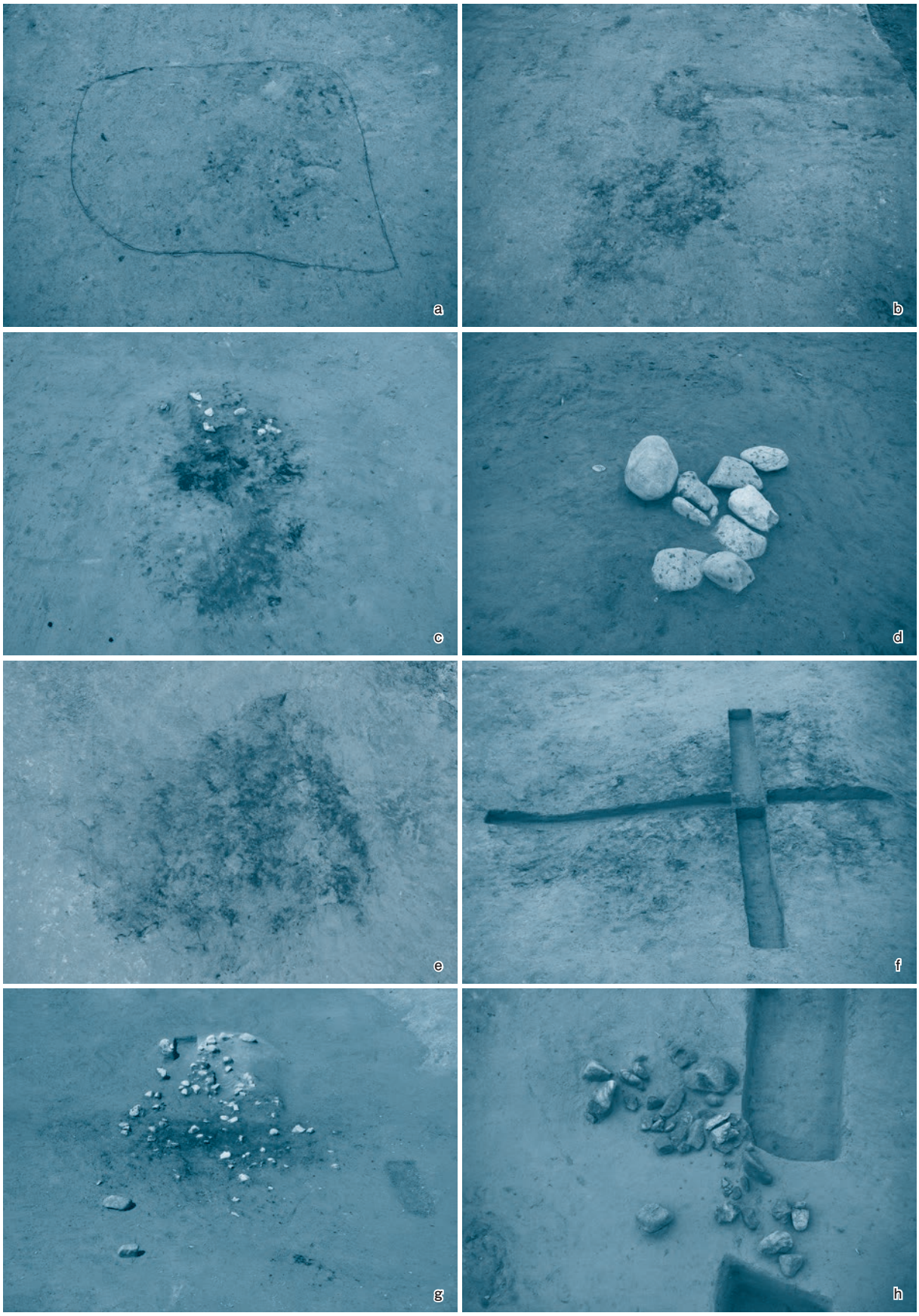
12　48～55号土坑

a　48号土坑（西から）
b　49号土坑（東から）
c　50号土坑（南西から）
d　51号土坑（東から）
e　52号土坑土層（東から）
f　53号土坑（南西から）
g　54号土坑土層（南から）
h　55号土坑（西から）



13　56～61号土坑

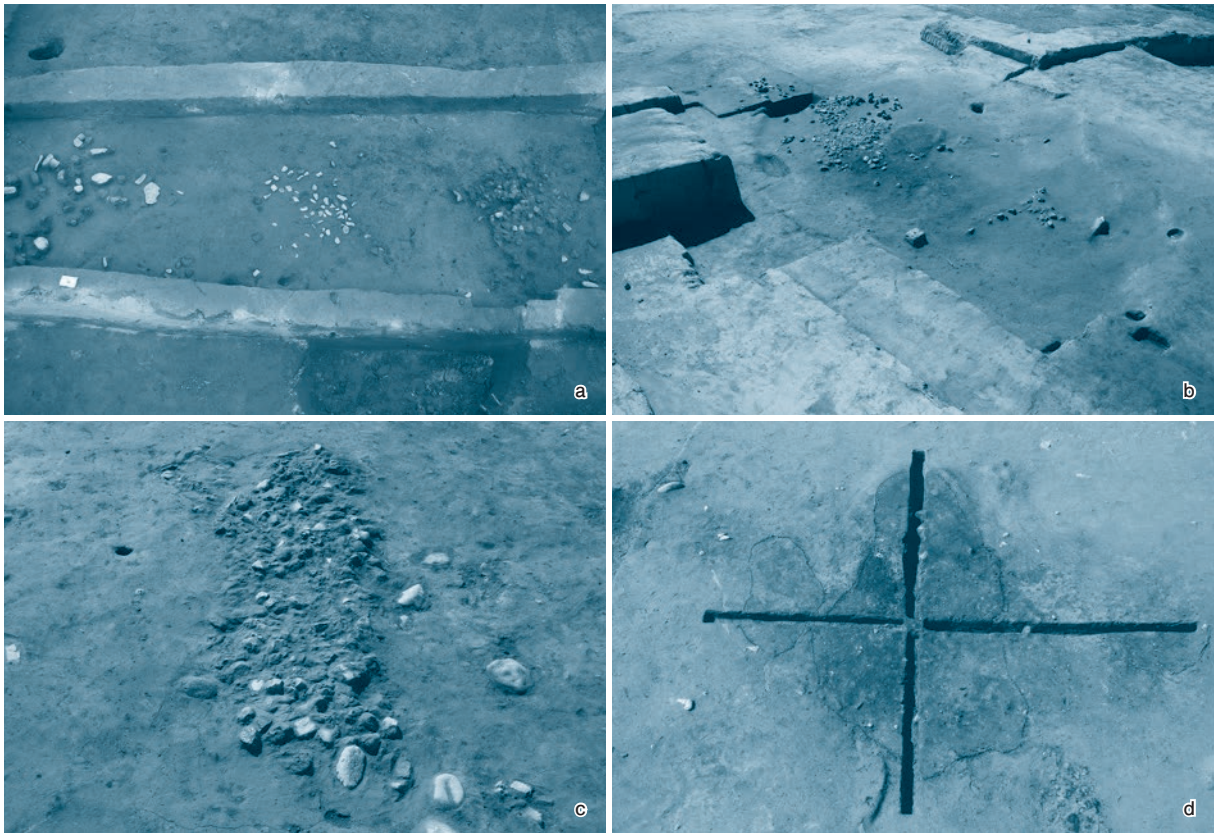
a　56号土坑礫出土状況（南から）
b　56号土坑（西から）
c　57号土坑（西から）
d　58号土坑（南西から）
e　59号土坑（東から）
f　60号土坑（南東から）
g　61号土坑遺物出土状況（南から）
h　61号土坑（南から）



14　8～13号焼土遺構

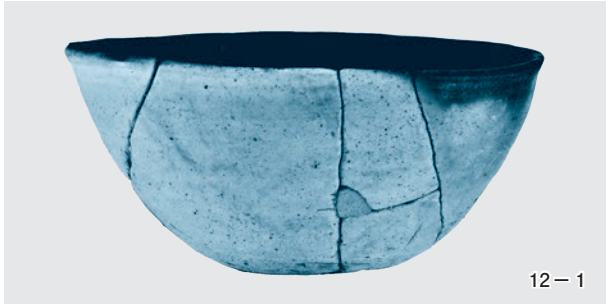
a　8号焼土遺構（西から）　**b**　9号焼土遺構（西から）
c　10号焼土遺構（東から）　**d**　11号焼土遺構（南から）
e　12号焼土遺構（西から）　**f**　12号焼土遺構断割（西から）
g　13号焼土遺構（東から）　**h**　13号焼土遺構（西から）

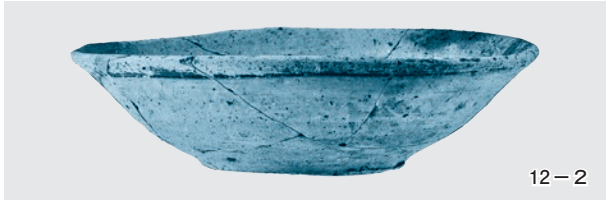
15　４号特殊遺構－新（北西から）

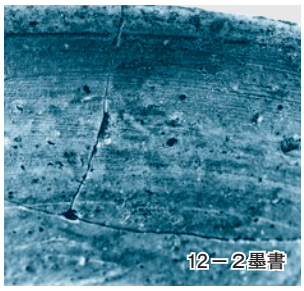


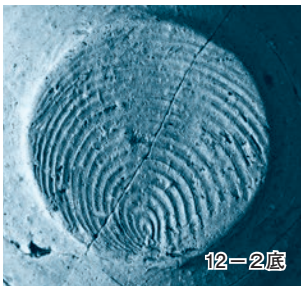
16　４号特殊遺構細部

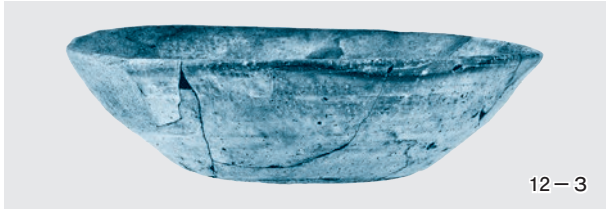
a　集石（新）（南から）　b　集石（旧）（東から）
c　集石（新）（東から）　d　焼土面（旧）（東から）

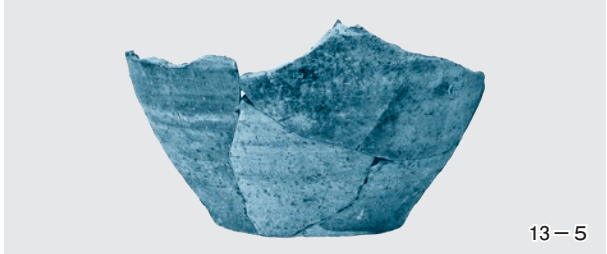


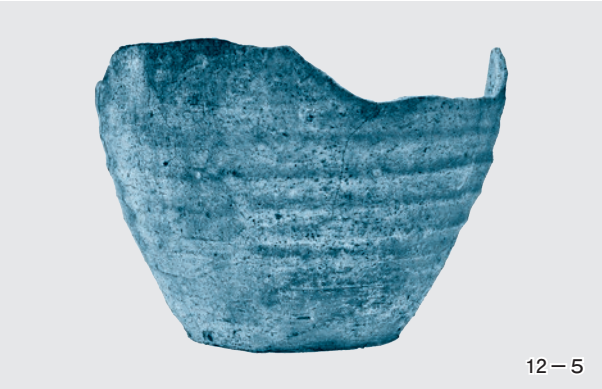


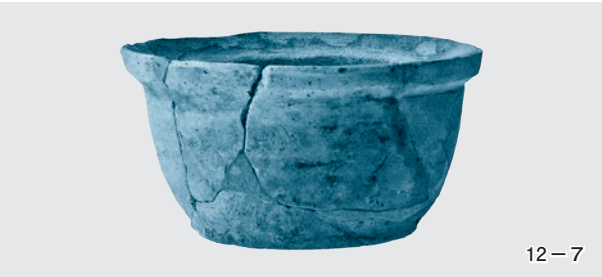






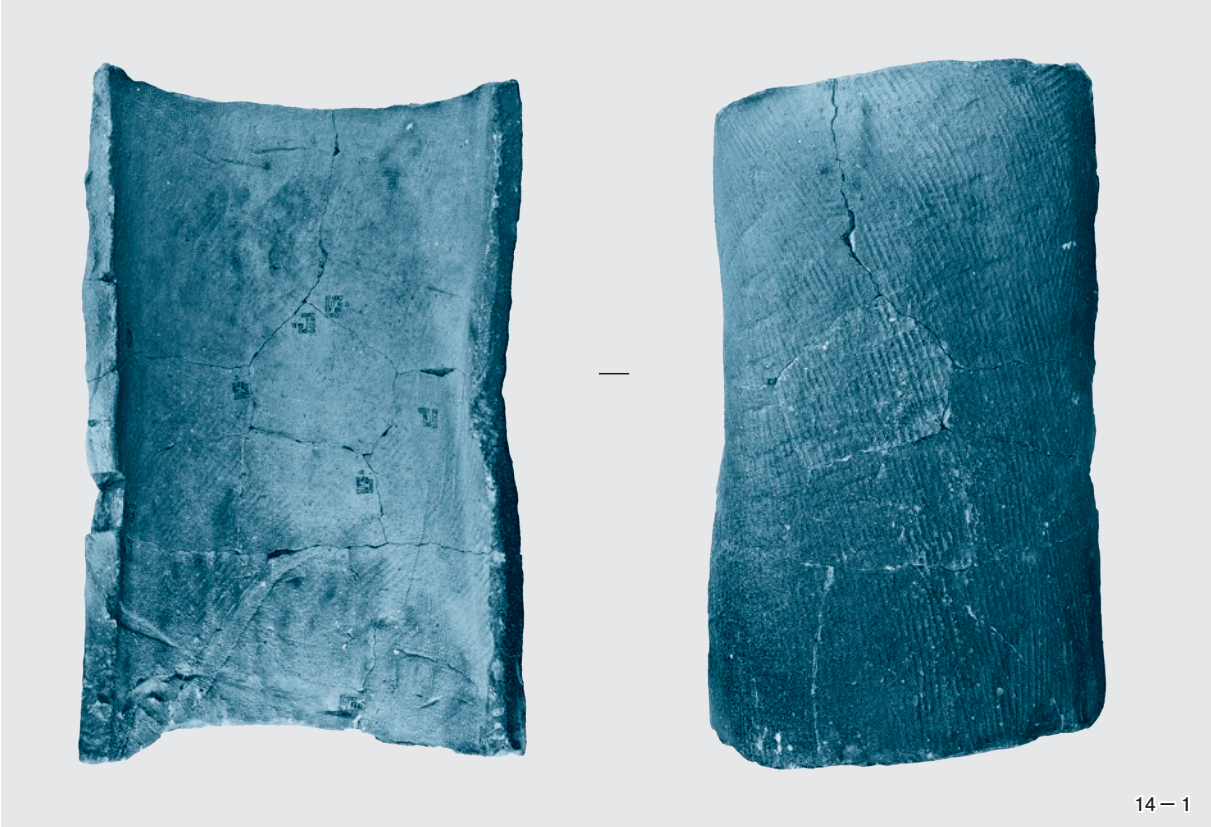




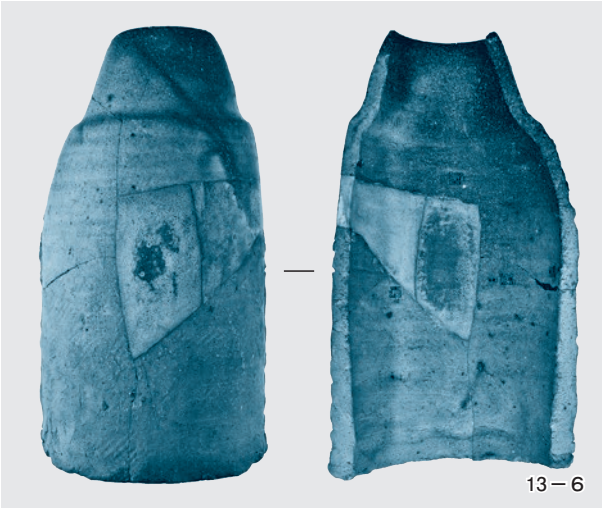


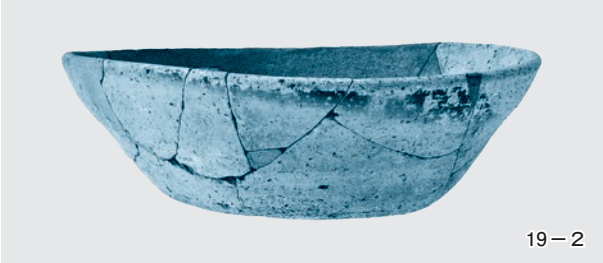
17　17号住居跡出土遺物（1）

18　17号住居跡出土遺物（2）

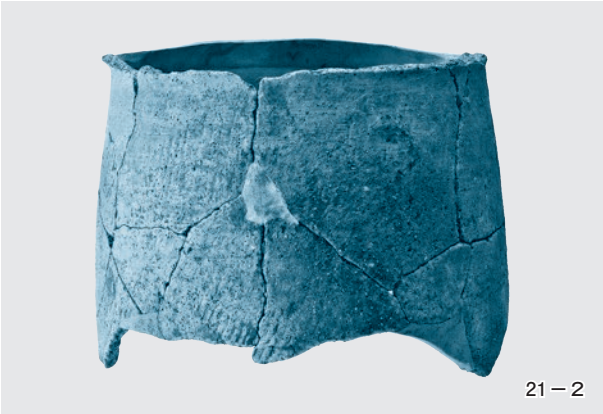


19　17号住居跡出土遺物（3）





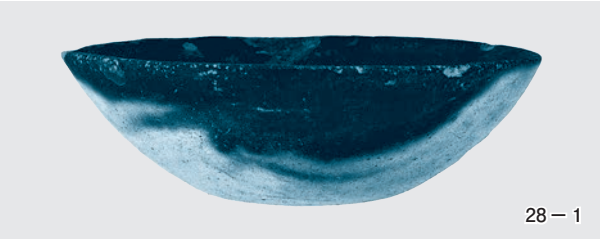
20　遺構出土遺物（1）


21－2

23－1

27－1

28－9

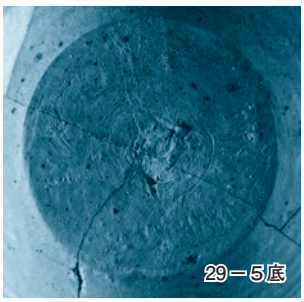

28－1

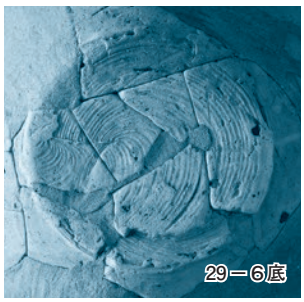
28－3

28－7

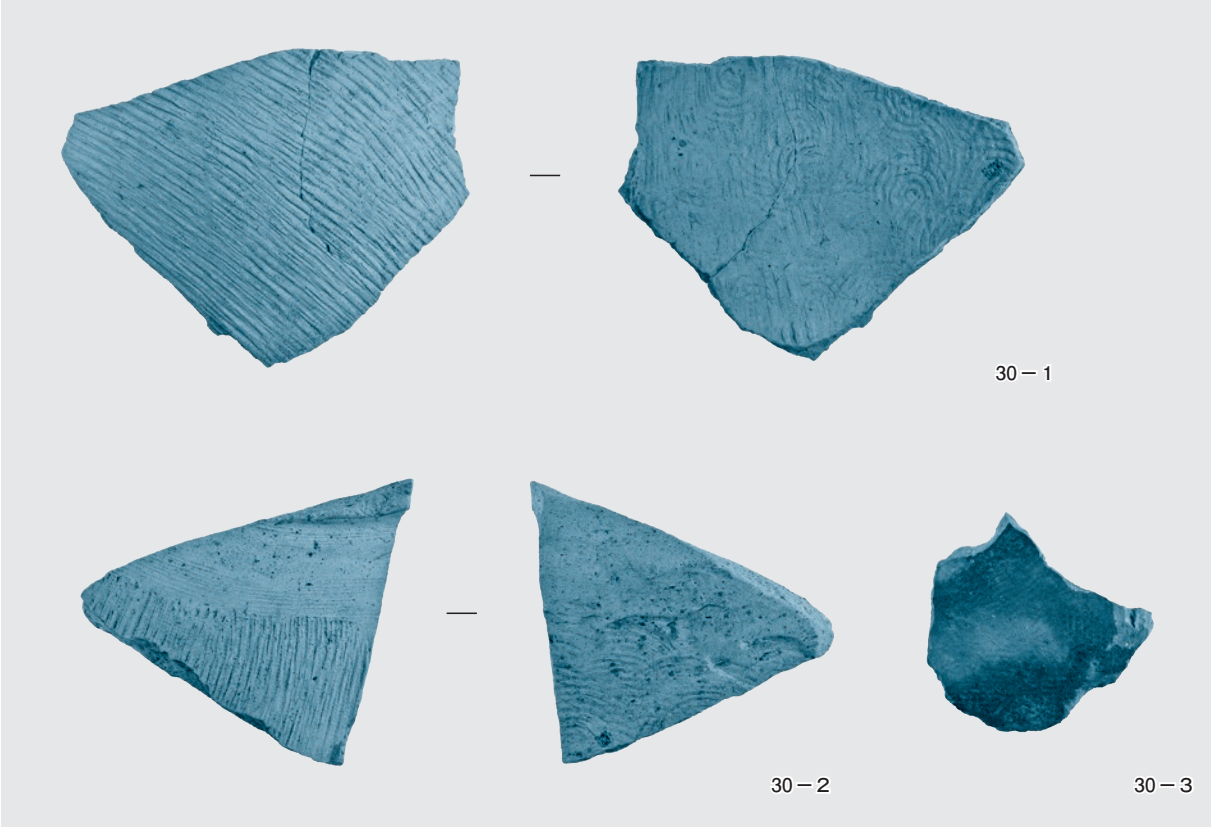
28－8

21　遺構出土遺物（2），遺構外出土遺物（1）





22　遺構外出土遺物（2）



23　遺構外出土遺物（3）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	あががわかいしゅうながいちくいせきはっくつちょうさほうこく３
書　　名	阿賀川改修(長井地区)遺跡発掘調査報告３
シ リ ー ズ 名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第489集
編 著 者 名	香川　愼一　　廣川　紀子
編 集 機 関	財団法人福島県文化振興財団　遺跡調査部 〒960-8115　福島県福島市山下町1-25　TEL 024-534-2733
発 行 機 関	福島県教育委員会 〒960-8688　福島県福島市杉妻町2-16　TEL 024-521-1111
発 行 年 月 日	2013年12月20日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
小田高原 （３次調査）	福島県喜多方市 慶徳町山科字古 屋敷・西新田	2087	00024	37° 37′ 07″	139° 48′ 02″	20120411 ～ 20120928	4,200㎡	河川改修(阿賀川)に伴う事前調査

所収遺跡名	種類	主な時代	主　な　遺　構		主な遺物	特　記　事　項
小田高原 （３次調査）	集落跡 窯　跡	平安時代	竪穴住居跡 土　　坑 焼土遺構 特殊遺構	１軒 14基 ６基 １基	土師器 須恵器 土製品	平安時代の竪穴住居跡からロクロピット状の小穴が検出され，土器製作に関連した工房の可能性がある。また，同住居跡のカマドから円筒形土製品が出土している。

要　　約

小田高原遺跡は，阿賀川下流域の右岸部に立地する複合遺跡である。発掘調査は平成22～24年度の３次に渡って実施され，特に平安時代の遺構・遺物で成果があった。

発掘調査対象区は，小田高原台地と呼ばれる中位河岸段丘面の突端部～河川敷の一帯である。古代集落の中心は小田高原台地(調査Ⅰ区：１次調査)で展開し，平安時代初期の８世紀末葉頃から集落規模が拡充していくようである。調査Ⅰ区で発見された遺構は竪穴住居跡が中心で，掘立柱建物は確認されていない。調査Ⅰ区の出土品には，土製の獣脚片・瓦塔片などの仏教関連遺物や装飾品の鉸具などもあり，比較的規模の大きい平安集落であったと推測される。

段丘崖を下った河川敷(調査Ⅱ・Ⅲ区) では，９世紀後半～10世紀前葉の土器生産関連遺構が発見されている。９世紀後半期の土器生産関連遺構には，須恵器窯跡・土師器焼成土坑がある。須恵器窯跡（１次調査)は遺存状態が悪く構造に不明点が多いが，小形の窯で杯を中心に焼成していたものと推測される。土師器焼成土坑は，緩斜面を浅く掘り窪めた簡易な構造の遺構である。杯類のロクロからの切り離し技法が違っていることから，異系統の工人が調査Ⅱ・Ⅲ区の河川敷で土器生産を行っていたようである。９世紀末葉以降，須恵器生産は認められなくなるが，土師器類の生産は継続している。調査Ⅱ・Ⅲ区でも少数であるが竪穴住居跡が確認されており，ロクロピットの検出などから工房として機能していた可能性がある。

以上，小田高原遺跡では，高台に平安時代の集落の中心があり，眼下の河川敷では土器生産などの活動が行われていたと推測される。他に発掘調査対象区の南東部で，縄文時代の石器製作関連遺構(早期末葉)や落とし穴が発見されている(２次調査)。

福島県文化財調査報告書第489集

阿賀川改修（長井地区）遺跡発掘調査報告３

小田高原（おだこはら）遺跡（３次調査）

平成25年12月20日発行

編　集　財団法人福島県文化振興財団　遺跡調査部
発　行　福島県教育委員会　（〒960－8688）福島市杉妻町２－16
財団法人福島県文化振興財団　（〒960－8116）福島市春日町５－54
国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所　（〒965－8567）会津若松市表町２－70
印　刷　八幡印刷株式会社　（〒970－8026）いわき市平字田町82－13